
サブウェイ

一宮 集

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サブウェイ

【Nコード】

N4966H

【作者名】

一宮 集

【あらすじ】

生まれつきのユーレイ体質、典型的乙女座B、秋葉チャン、それでも一応大学生な俺、三国廣明。このまま地道に生きていく筈だったのに、たまたま遭遇した地下鉄事故で、何だかエタイの知れないもん拾っちゃって。それから何故か、見えるようになったんだ。地下鉄に棲む、可愛いユーレイさんが…

その日の朝。

地下鉄で事故があつたんだけど。

正直、俺は何の関心もなくて。

授業に遅れるからメーワクだなあぐらいにしか思つてなかつたんだよね。

でもさ。

轢かれたのが、俺と同じガツコの奴で。

しかも、女の子だつて聞いたたら、やっぱちょっとね。

一応、可哀想だなと思う訳。

駅員さんつてのは大変だよ。

いわゆる事後処理つての？

俺だつて見たかねーもん。死体とか。

ご苦労さまですつて感じで、エスカレーターに乗つただけど。

それから真鍋に会つたり、いろいろしてたから。

すっかり忘れてたんだよね。

ガツコでも大した話題にはなつてなかつたし。

気付いたのは家に帰つてから。

何かヤな予感がしたんだよ。

心配つての？

子供の頃から霊感強えから。

ヤだよ。

マジやべーって。

カバン、勝手に動いてるし。
超触りたくねー。

てか、

また、やっちゃった？

何かお持ち帰りしちゃった、俺？

@ @ @

カバンの異変に気付いた俺。
真っ先にやったことと言えば。

徒歩一秒の台所行って、
サララップを引つつかんで、
それでもってとりあえず、そいつをぐるぐる巻きに…

ヘタレって言うな。

てか、まだ動いてるんですけど？

しゃあないから、押し入れにぶち込んで。
今夜は、旭川の実家に帰ろうかと…

そうもいかねーじゃん。
明日もガッコあるし。

ユーレイのせいで自主休講なんて洒落にならんし。

でも。

マジ怖え。

なまら怖え。

明日、明るいうちに正体調べて。

供養するなり、捨てるなりしないとなあ。

てかさ。

何で俺がいつもこんな目に遭うの？

ちよつとばかり靈感あるっただけで。

俺ばっか頼んでんじゃねーよ。

自力で何とかしろよ。

ほんと。

つくづく。

世の中不公平だよなあ…

翌朝。

いつもの時間に起きて、テキトーな服着て。

ポケットの中身確かめる。

ケータイ、財布、家の鍵。

よっしゃあ。準備万端…

…じゃ、ねーよ。

アレがいたのよね。

テンパると何故か、オネエ言葉になる俺。

つまり、それだけテンパってたの、マジで。

心理学の教科書とか、思いつきり入ってるし。

でもって、まだビミョーにカタカタ動いてるし、それ。

…ま、いつか。

あとで何とかしよう。

3秒後にはそう考えてフツーに部屋出る俺。

こう見えて、乙女座Bだったりする。

西28丁目からまた地下鉄に乗る。

昨日の事故は、乗り換え先の大通。

ガッコ行ったら、図書館で新聞見なきゃ。

なんて思ってたなら、たちまち円山公園着。

通勤客がそろそろ降りてったから、やっと座れた。
で。

いつもの癖で、右肩にかけたカバン確かめるけど。
アホだよな！。

今日は、アレがいるから置いてきたんだっけ…

え。

ちよつと待て。

何あれ？

…向かいのガラス。

何か映ってね？

ちよ。

マジで？

誰か、いるんですけど？

見えるんですけど？

俺の、左隣…

空席なんですけど？

@ @ @

一度、左を確かめたあと。
念のため、もう一回窓見てみる。

…いるよ。
いるのよ。
間違いなく。

で。

しょーがないんで、もっかいチラ見。
リアルな座席、不在。
窓に映る座席、存在。

やべーな、俺。
昨日ろくに寝れなかったし。
かなり疲れてるっぽい。

またチラ見。
いない。
いる。

再度チラ見。
いない。
…やっぱいる。

一人できよろきよろしてる俺。
気付くと、斜め向かいの綺麗なねーさんにガン見されてんの。
絶対アホだと思われてる。
でなきゃ、はちきれそうなスカートの奥覗こうとしてるとか？
いや、見れるもんなら見たいっすけどね。
今、見たかねーもんが見えてるんですよ。

でも。
よく見ると、ちょっといい感じかも？
いやその、ねーさんじゃなく。
窓にいるお隣さん。
あ。

うん。

結構、可愛いかも。

優香っぽい。

服とか、顔立ちとか。

なーんて考えてるうちに大通。

電車を降りると、彼女は消えちゃって。

階段下の鏡にも映らない。

そう言えば、誰かが言ってたな。

このでかい鏡、自殺防止のために置いてるんだって。

じゃ、あの優香タンは、昨日ここで轢かれた子なんかな？
判んねえけど。

ひょっとしたら、東西線のヨーセイさんかしんねーし。
俺のモーソーかしんねーし…

で。

そっからまた、南北線に乗り換えたんだけど。

俺はさすがに窓見る気がしなくて。

でもさ。

そういう時に限って。

不思議と、富樫って男に会ったわ…

富樫って誰かって？

フツーに説明すると、大学の同期で。

ちゃんと説明すると、オカルト研在籍中の変人で。

好意的に言っとオタツキーな友達で。

本音を言っと少々ウザい。

だから。

富樫が満面の笑みを浮かべ、地下鉄のドアから駆け込んできた時。

俺は速攻、前言を撤回する。

こら。

地下鉄駅員。

こんな奴に乗車権与えちゃダメだろーが。

「お疲れ、三国！」

「いや、別に疲れてねーし？」

「何でお前そうノリ悪いのよ？」

「前から言おうと思ってたんだけどさ…」

俺がそう言いかけても、富樫は完全無視。

出っ歯のメガネ面を、俺にすりつけてくる。

マジきもい。

「てか、最近どうよ？ ユーレイちゃん、見えてる？」

アホ。

言うか？ このタイミングで。

しかも。

周囲の人、さり気にとっち見てっし。

さらに。

富樫の向こう側には、しっかり優香タン、いやユーレイタンがいて。

俺とぼっち目が合っちゃうし。

もう何とかしてくれって状態で…

ん？

てことは。

南北線にも出沒すんのね？

てか。

やっぱり彼女は俺のこと見てんのね？

いゃん。

ひよっとして。

惚れられちゃった、俺？

…んな訳ねーか。

@ @ @

ウツロな視線をさまよわせてる俺に気付いて。

富樫も背後を振り返る。

そしたら何と。

優香タン（↑仮名）、笑顔で手を振るじゃねーの。

ちょ。

やべ。

マジ可愛いんですけど？

な〜んて思ってるぞ。

富樫はヘンな顔をいっそうヘンにして、俺に向き直る。

「何か見えてんの？」

「お前、見えねーの？」

「見えてるよ」

「どんなんが？」

俺がそう突っ込むと。

奴はもういつぺん振り返る。

優香タン（仮名）はまた手を振ってくれる。

ヤバイ。

何か、ヤバイ。

超可愛いんですけど？

で。

富樫はまたまた俺に向き直って。

余裕の笑みをかましながら、こう言い放ちやがった。

「…あの、窓んどこにいる。品の良さそうな婆ちゃんだろうっ？」

…。

テメー、ほんと嘘ツキだな？

おまけに、空気まで読めねーとくる…

富樫が余計なこと言っ たせいか。

いや、言っ たせいで。

優香タン（↑仮名）、すっ かりご立腹。

腕組みして、俺のこと睨んでる。

いや、ヤバいつて。

萌えるつて。

そっ いう力才も可愛い…

…あ、怒つ てる。

すっ げー怒つ てる。

すいません。

何でもありません。

萌えたりしてゴメンナサイ。

…てか。

何で俺、ユーレイ相手に必死に謝つ てるの？

そもそも、彼女をババア呼ばわりしたのはこいつでさ。
なのに。

何で俺が謝らないかんの？

そっ ころしてゐるうちに、目的の駅に着いて。

俺と富樫は電車をあとにする。

可愛い優香タンは目も合わしちゃくれねえ。
くそ。

アホ富樫。

全部、お前のせいだからな？

とりあえず、真面目に講義受けて。

それから、バイト先の麻生へ移動することになったんだけど。
あんなことのあとだから、何となく地下鉄は使いたくなくて
バスで移動することにした。

歩いてても、大した距離はないんだけど。

そこはまあ、乙女座Bだから…

カテキョのバイト終わったあと。

また、どうしようかになって悩む俺。

いや。

バスで琴似まで出ちまえ。

そうすれば…

いや。

どのみち、琴似から地下鉄乗らねーと。

じゃ、駅まで戻って、桑園で降りるか？

でもさあ。

あそこからアパートまでどんだけあるのよ？

…やーめた。

馬鹿馬鹿しい。

ユーレイ一匹のために、何で俺がそこまでしなきゃなんねーの？

そう思って、地下通路降りて。

定期通して改札潜って。

座席座ったら溜息出ちゃった。

ふうって。

だつてさ。

いるんだもん。

優香タンが。

でもって。

何でか知らんけど、俺にしなだれかかってくるんだもん。

他のヒトには見えないだろーけど。

認めたくねーけど。

俺には、見えちゃうんだもん。

もうやだ。

どうにかして。

萌とかどーでもいいから。

俺、ふつーだから。

ふつーの大学生だから。

お願いだからほつといて。

なんて、不機嫌な力オして見せるけど。

優香タンは、きょとんとして俺を見てる。

…くそ。

馬鹿かよ俺。

何やってんだよ俺。

でもさ。

可愛いんだって。

これがマジで。

だから結局、終点まで行っちゃった。

終電ないのにさ。

…ったく。

何やってんのさ俺。

違う意味で、憑り依かれてんじゃない？

@

@

@

宮の沢駅へ降り立ってから。

俺はしばらくボーゼンとしてた。

そりゃそうだよな。

どうやって帰ればいいのか判んねーんだから。

しかも、よりによって。

ユーレイと離れたくないがために、終電逃したなんて。

「どんだけ女に飢えてんのよ？
馬っ鹿みてー、俺…」

「しょーがないんで。」

「胸ポケットからさくつと携帯取り出して、
小樽の兄貴に電話してみる。」

「リング4回鳴らして、やっと奴が出る。
こんな夜中に何やってんだか。」

「—— 何だよ？」

「何だよってことはねーだろ？」

「言いたくもなるだろう？ こんな夜中に何やってんだか」

「すげー。エスパーかよ？」

「てか、マジ意味判んねー。何の話だよ？」

「でさ。兄貴、今飲んでる？」

「さっき風呂上がって、ビール飲もうとしてたところ」

「それがさ、俺、今宮の沢なんだよ」

「はっ？ 何でお前そんなとこいんの？」

「悪いけど、迎えに来てくんね？」

「あゝ？」

いきなり不機嫌な声。
相変わらず、感じ悪い奴。

「冗談よせて！ 今からそっち行けって？」

「う、うん」

「もう0時過ぎじゃねーの？」

「そうなんだけど。すっかりして終電逃しちゃってさ。何とかかなんねー？」

「なんねーよ！」

「そこを何とか！」

「あ、わりー。たった今飲んじまった」

「まったまたー。嘘ばっか！」

「いやマジで。今すぐ酒飲めって、神の啓示が…」

「ちよっ、おま、何やってんの？ マジでそういつことするっ？」

「するする。来週車検だし、ガソリンたけーし。無駄なことしたくなーのよ」

「可愛い弟が困ってんのに？」

「お前の何処が可愛いつて？」

「頼むつて。とりあえず、兄貴しか頼る人いねーんだから」

「だから今ビール飲んじまった」

「……」

「あつ？ ひよつとして本気にした？」

「……」

「しゃーねーな。片道5000円でいいよ」

「馬っ鹿じゃねー？ それだけあつたらタクシー乗れるし！」

「あつ、そ。じゃ、タクシーで帰りな」

「こんな時間にいる訳ねーだろ？」

「電話で呼べ。携帯持つてんだから」

「……」

「てか。それが人にモノを頼む態度？」

「……」

「お願いしますは？」

「…お願い」

「声がちいせーな？」

「…お願いします」

「最後に舌打ちしなかったか？」

「してねーよ！」

「じゃ、待ってろ」

「マジで来てくれんの？」

「その代わり、お前んとこ泊めるよ？」

「はっ？何で？」

「明日休みだし。夜、すすきので飲みなんだよ」

「……」

「返事は？」

「…はい」

そんなんで。

寂しい地下鉄駅前で、俺はさんざん待たされて。
何とか兄貴の車に乗せて貰って。

それから、自分のアパートまで送って貰う。
で。

奴にベッドを占領されてから気付いたけど。
押し入れの中のカバンは、やけに大人しい。
しかも。

図書館行くの、忘れてたし。

それどころか。

轢かれた子の名前も確かめてねー。

全く。

何やってんの、俺？

兄貴のイビキを聞きながら。

俺はコタツの中で仰向けになってたけど。

思い出すのは、優香タン（↑仮名）のこと。

何で地下鉄でしか会えねーのかな、とか。

何で俺を選んだんかな、とか。

最初のうちは、いろいろ考えてたんだけど。

だんだん、めんどくさくなってきた。

頭の後ろで腕組んだまま、目を閉じる。

しゃーねーな。

明日、兄貴が目を覚ましたら。

だまして、カバン開けさせよう。

ひよっとしたらそんな中に、何か入ってるかしんねーし。

それが、優香タンの謎を解く鍵になるかしんねーし。

上手くいけば、彼女を成仏させられるかしんねーし。

でないとき。

俺、体もたねーもん。

毎日終電とかマジありえねーし。

でもさ。

ひょっとしたらまた、彼女に会えるかも、なんて。

何となく、明日を楽しみにしてる俺。

兄貴にも誰にも言えないけど。

どうよ、このシチュエーション。

何か、面白いことになりそうじゃん？

翌朝。

俺はとりあえず、さつさと兄貴を叩き起こしてぶつぶつ言うあいつに、カバンを突きつけた。その時にはもう、動いたりはしてなかったけど。念には念を入れないとね。

「何、これ？」

「いーから」

「何で俺がこんなの開けなきゃなんねーの？」

「ま、深く考えず」

「意味判んね。テメーでやれよテメーで」

などつぶつぶつ言いながらも。

兄貴はさくつとファスナーを開けやがる。

俺は反射的に、背中を向けたけど。

背後から聞こえてくるのは、ズームインの音声のみ。

…？

何で？

何も起こらんの？

恐る恐る振り返ると。

兄貴はあぐらをかいて、こたつに潜り込んでる。
さっきとおんなじ格好で。

あー？

ちょ、テメー。

ちゃんと見たのかよ？

「…兄貴」

「ん？」

「何、入ってた？」

「何って。心理学の本と、ペンケースと、英和辞典」

「……」

「それがどうしたんだよ？」

「…いや。何でもないっす」

すっかり意気消沈した俺。

じゃああれは、単なる通りすがりってこと？
それとも、何かの間違い？

…ま、いつか。

そう言いながら道新見てる俺。

ほっというて。

所詮、乙女座Bだから。

今日は講義なし。

だから、兄貴に付き合って大通まで出る事になったんだけど。

地下鉄にはやっぱり、優香タン（↑仮名）の姿。

昨日とちよつと服が違う。

ゴスロリっちゅーの？

これがまためっちゃ可愛い。

しかもね。

今日、気付いたの。

彼女、絶対俺に惚れてるさ。

何で判るって？

だって。

彼女のこと見てるの、俺しかいねーし。

彼女が見てるの、俺だけなんだもん。

…単純？

@ @ @

大通で降りるまで、俺は何だか妙にテンション上がったけど。兄貴と一緒に地上に上がった途端、がつくり落ち込んだ。だつてね。

冷静に考えると、やっぱりありえねーもん。地下鉄でしか見えないユーレイなんて。実用価値ゼロじゃん。

とは言うものの。

P A R C O 行つて、洋服見てる間も。タワレコ行つてる間も。

俺はどーもガラスばかり見ちゃう。ひょっとして、ユーカたん（↑仮名）がいるんじゃないかって。でも、やっぱりそこに彼女はいなくて。変な話だけど。

何となく寂しかったりする。

兄貴は何も入ってねーって言ってたけど。あの時俺はばつちり感じたんだよね。何かをお持ち帰りしちゃった気配って奴を。だから。多分さ。

見えなくても、彼女は意外と近くにいるんじゃないかって。
そんな風に考えたらさ。

エロ本手に取るのもためらう訳よ。

やーね、俺ってば。

何でそんな可愛いのか？
てか、判り易いの？

・・・やってらんねー。

こいつ置いて、ちっちと帰るついで。

ぶつぶつ言う兄貴置いて、俺はまた地下鉄に乗る。

別にバスでも帰れるんだけど、それはまあほらつまりそのアレだから。

とりあえず、彼女に会いたかったのよ。

大通駅は、さつきより混んでて。

ぶつとい足の女子高生がたむろして、座席占領してんの。

ばーちゃん二人、座りたそうにうろうろしてんのにさ。

堂々と化粧してやがんの。

両脇にでかいバッグ置いたぐらいにして。

あー、やだやだ。

そういう無神経な女。

俺、大っきれー。

ム力つきながら窓見たら、そこにはユーカたん（↑仮名）がいて。
俺のこと、じーっと見てる。

やべ。

不機嫌なとこ見られちゃった。

なーんて思ってたら。

彼女、すつと消えちゃった。

あれ？

何処行った？

俺、必死に探したけど。
彼女、いなくなっちゃった。
やだな。

嫌われたかな。

てか。

何でユーレイに嫌われたぐらいでさ。

俺、こんな焦ってんの？

一人でキョドってんの？

ありえねー。

何やってんのさ、俺？

そう思ってたなら。

ぶつとい足の女子高生が、ぎゃあっ！
そりゃびつくりするよ。 って叫んだ。

声も象並みだもん。

「ちょ、何かここ冷たいんだけど？」

「はっ？ マジで？」

「あんたオシッコ垂れたんでね？」

「垂れる訳ねーべさ！」

「マキだば垂れるがもしんねべさ！」

「はあ？ あんたら何言ってるの？」

ぎゃあぎゃあ言いながら、連中が立ち上がると。
ばーちゃんはその隙にちゃっかり座っちゃった。
よしよし。

札幌のばーちゃんはそんぐらいでねーと。

内心、にやにやしながら。

ふと窓見ると、彼女はまたそこにいて。
にこにこしながらウィンクしてくれた。

あ？

マジで？

今のつて、そーゆーこと？

俺が目をまんまるにしてると、彼女はにっこりして。
それから、バイバイって手を振ってくれた。
開いたドア指差しながら。

あれ？

もう西28丁目かよ。

ありえねー！。

このタイミングで着くか、普通？
車掌、空気読め。

@ @ @

家に帰ってからも。

何か、ボーゼンとしてる俺。
だってね。

ユーカたん（↑仮名）が、俺のために動いてくれたんだもん。
いや。

俺のためじゃないかもしれないけど。
少なくとも、彼女もああいうのがキライな子なんだってのは判った
し。

そこがますます俺のツボにはま…

って。

何言ってるんの、俺？

マジ意味判んねー！。

あれがユーレイかどうかってことも微妙なのに。

しょーがないんで。

確かめましたよ。

ヘタレ卒業ですよ、こうなりゃ。

兄貴が元通り、ラップでぐるぐる巻きにしたカバン取り出して、開けてみましたよ、久々に。

で。

何が入ってたかっていうと…

…。

やっぱ何もなかった。

どんだけヘタレだったの、俺？

はあ。

疲れるね、マジで。

やっぱあれは気のせいだったってことにして。

それでもやっぱ彼女のことが気になって。

久し振りにテレビ点けて、ニュースなんか見てみた訳でもさ。

手がかりなんかある訳ねーのよ。

事故も殺人もしょっちゅうあんだから。

何日か前の事故なんかニュースになってる訳ねーの。そんなもんよ。

だから。

しゃーないから。

明日、確かめてみようかなと。

ガッコの図書館で。

前の新聞引っ張り出して。

ん？

ネット？

お客さん、頭いいすね。

その手があつたよね。

本間まゆ。

変な語感。

だって。

”ほんままゆ”、だよ？

名字が”ほんま”なら、別に”みな”でもいいじゃん？

”みき”でも”みほ”でもいいじゃん？

何でわざわざこんな名前にしたの？

てか。

今時の親って、こういうネーミングセンスしてんの？

って、ごめん。

前置き長くて。

これが、ユーカたん（↑仮名）の本名。

でもさ。

やっぱ、見なきゃ良かった。

見るもんじゃなかった。

俺、めっちゃめっちゃ凹んでる。

まゆタン。

いや、まゆちゃん。

北見の子だったさ。

頑張って勉強して、大学入って。

悩み事なんてのも特になかったらしい。

それが、何であの日に限って、線路のすぐ傍を歩いてたのか。
何で地下鉄が入ってくる直前、あんなところに落ちたのか。

…。

まだ、19歳だよ？

俺といっこしか違わねーし。

何か、ひどくね？

あんまりだ。

だから。

今日はガツコ行くけど、往復バスにしたさ。
彼女、寂しがるかもしれないけど。
こんな気分で、彼女のこと見たら。
俺、泣いちゃうかもしれないさ。

そしたらまた、嫌われちゃうかもしれないし。

それだけは避けたいから。

そんなんです。

また、ヘタレに逆戻りなの、俺。

ほっとけ。
判ってっから。

@

@

@

こういう日に限って、雨だったりして。
行きのバスは何だかもんもんとしてんの。

あ、こちら。

てめー。

濡れた傘俺につけるなって！

でもって。

何故かこういうところでまた、富樫に会うし。
どいつもこいつも。

ちよっとは空気読め。

「おーっ！ 三国！」

「あに？」

「ちよ。何でいきなり不機嫌？」

「別に」

「で、あのユーレイどうした？」

「んあ？」

「地下鉄の、ほら…」

こいつ。

うぎ。

マジっぞ。

消えて。

お願い。

ほら。

隣のーさん、俺のことチラ見してるし。
惚れられたらどうしてくれる。

「いや、見えねーし」

「またまた！ 嘘ばっか！」

「マジで。普通に見ねーし」

「何言ってるんだって。本間まゆの幽霊だろうっ？」

…。

前言撤回。

こいつ、何様？

いや何者？

マジきもいんですけど？

「見えてんだろ？」

オカルト研の富樫は、ふつーにそんなことを言う。
で。

ここで俺はどうしたらいいんだ？
素直に肯定する？

じょーだん。

そんなことしたら、ますます大騒ぎになるって。

俺、昔から勘だけはいいいから。

言っていいことと悪いことはわきまえてんの、いちおう。

「つーか、誰？ 本間って」

「この前飛び込み自殺した子」

「あれ、自殺じゃねーだろう？」

「新聞だとな。でも実際はそうだったらしいぞ」

「まさか」

「何で否定すんの？ 否定する材料でもあんの？」

「……」

「本人がそう言ってた？」

「知るか」

「なあなあ、言ってたのか？」

「言わんし！」

「何で？」

「知るか」

「写真見たけど、結構可愛い子だったじゃね？」

「知るか！」

「可哀想だよなー。まだ処女だったかなー」

なーんて不謹慎なことを、あいつが言うから。
俺、反射的に足出ちゃった。

昔からそう。

怒ると手より先に足出ちゃう。

それで何度兄貴にボコられたことか。

「ちよっ！　いてーんだけど？」

「公衆の面前で、アホなこと言うな！　天下のドーターがっ！」

「ばっ！ 馬鹿！ お前こそ、こんなところで何てこと言っただよ！」

富樫が真っ赤になってそう叫んだ途端。
隣のばーちゃんが吼えた。
俺等の何万倍もの声量で。

「ちょっと！！ あんたらうるさいんだけど！！！！」

…はい。

すみません。

ごめんなさい。

てか、悪いのはこいつで。

俺は何もしてないんですけど？

…したか。

したよな。

ごめん。しました。

ま、いいや。

もうそろそろ、ガッコ着くし…

@ @ @

富樫のせいで、俺はまたまたブルーになって。

授業も聞いてんだか聞いてないんだか。

思い出すのは、ネットで見たまゆちゃんの写真。
小さな顔。

控え目な微笑み。

真っ直ぐな髪。

あんま長くはなかった。

いい感じで頬にかかっている。

化粧っ気なし。

あれ、高校の頃の写真だよ、絶対。
何かそんな気がする。

俺、一応道民だけど。

北見には行ったことなかった。

免許もねーし、友達もいねーし。

遠い親戚はいるけど、交流ねーし。

それでも。

まゆちゃんかどんな高校生だったのかは想像出来る。

スカートはプリーツ。

セーラーじゃなくてブレザー。

あのリボンってどうやって結ぶんだ？

最初からああいう形に出来てんのかな？

細っこい脚。

黒い長靴下。

茶色の革靴。

トラッドっちゅーの？

あの学校指定の奴。

彼女、好きな奴はいたんだろーか。

付き合ってた奴とか。

勉強で、それどころじゃなかったかな。

まさか。

今時、そんな女いる訳ねーし。

格好いい彼氏とかいたんだろーな。

でもって、遠距離だったりして。

毎日メールとかしてたんだろーな。

だとしたら。

そいつ、相当参ってんじゃね？

俺なんかよりずっと。

正門から出ると。

俺の足は真っ直ぐ、地下鉄駅へ向かった。
昔っから、霊感強くて。
いろんなユーレイさんと交流してきたけど。
こんな気分は初めて。
何ていうか。
感化されたというか。
呼ばれてるというか…

ねえ。

何か、ヤバくね？ 俺。

ちょっと、本気入ってるっぽくね？

やだやだ。
らしくねー。

でもさ。
会いたい。
まゆちゃんに。

今度は、ちゃんと話したいの。

もし、向こうにその気があればって話だけど。

玉砕したら、笑ってやって。

北17条から、地下鉄乗って。

落ち着かない気分でシートに座ったけど。

どんだけ窓見ても、まゆちゃんは見つからない。

えー？

マジでー？

そんなのって、あり？

何かもうすっかりがっかりしながら、ジャンパーのポケットに手突っ込んだ。

周りには、近くの女子大の連中ばっか。

それがマジ香水くせーし。

うるせーし。

俺、だんだんイラっとして。

フテ腐れながら窓睨んでた。

せっかく決心したのに。
ちゃんと話すって。
いや。

向こうがどーかは知らないけど。
俺はとりあえず話す気マンマンで。
ヘンな汗かきながら、地下鉄乗ってんの。

でも。

大通に着いても。

どという訳か、まゆちゃんは現れない。
てか。

現れるどころか。

気配すらない。

次第に不安に陥る俺。

とりあえず電車降りて、ベンチに座り込む。

隣の親子連れ、ヘンな顔して俺のこと見てんの。
だよねえ。

俺、明らかにヘンだもん。

一人できよろきよろしてて。

明らかにキョードーフシンだもん。

…。

……。

ね！。

ひょっとして。

またやっちゃった？

嫌われちゃった、俺？

@

@

@

めっちゃ凹む。

てか。

俺っていつもこういうタイプ。

遠足の前の日に腹壊したり。

運動会の前の日に足折ったり。

テストの前の日に風邪引いたり。

よく大学入れたなって、いつもばーちゃんに言われる。
うん。

俺も実は奇蹟だと思ってんの。

入試ん時も、集合場所間違えて。

もうちょつとで間に合わないところだったし。

女の子と遊びに行くって決めた日に限って土砂降りだったり。
もう、ね。

ちよい難しい言い方するなら。
枚挙に暇がないって感じ。

バスセンター前を過ぎると、電車はがらんとしちゃう。
これもいつものこと。
皆、ファクトリーに行くから。

俺、自慢じゃねーけど。

あそこにはまだ一回しか行ったことねーの。
友達がトイザらス行ってくていうからついてって。
結局、電腦空間で待ってたの。

だってね。

そーゆー時に限って、参加メンバーすげーし。
絵梨ちゃんがいるし。

俺、勝手に憧れてただけど。

彼女、オタクは嫌いなんだって。
特に秋葉系。

それで、俺の夢はあっさりなくなっちゃったって訳で。
以来、女の子と歩いたこともなし。
同じゼミの奴とも特にしゃべんねーし。

サークルは野郎か、気味の悪い女ばっかだし…

あ、いや。

一回だけ、まともな女の子の入部希望者ってのがあって。
大騒ぎになったんだよな、確か。

…あれ？

ヘンタイ富樫に聞けば判るけど。

それって、

あれ？

…確か。

確かさ。

北見の子、

だったよーな…

その事実気付いた俺。

速攻、ケータイ取り出して。

アホ富樫に電話する。

端っこの座席のオバハンが何気にイヤな顔して見てるけど。

公共のマナーも空気読めの視線も判ってるけど。

ぶっちゃけ俺、今、それどこじゃねーのよ。

ちよつと大変なことになってんのよ。

「ふぁーい。どうした？」

気の抜けたアホ声で富樫が言う。

俺はちょいイラっとした。

「いやさ、お前、ほら、アレ覚えてる？」

「あゝ？」

「だからアレさ、アレ！」

「意味判んね。ちゃんと日本語喋れ」

「あー、だからほら、あの、オカルト研に入部希望者来たことあんじゃん？」

「は？　んなことあつたっけ？」

「あつたつて！ で、覚えてねー？」

「何を？」

「それが、女の子だって。騒ぎになったじゃね？」

しばしの沈黙。

その間に、東札幌着。

オバハンなおも怪訝な目を向けて下車。

お陰でこの車両は俺のもんになった。
んで。

正々堂々と喚くことにした。

「あー、はいはい！ あつたねー、そんなことも！」

「遠い目してる場合じゃねー。名前覚えてね？」

「覚えてる訳ねーだろ？」

「はっ？ テメー本気でそういうこと言う？」

「だってあれいつの話よ？ 去年の暮れじゃね？」

「かしんねーけど。覚えてね？ 名前とか、学年とか」

「学年は同じだったと思ったな、確か」

「で、名前は？」

「知らん」

「マジで?。」

「マジで知らん」

「いや、覚えてる筈だつて!」

「知らんもんは知らん」

いや。

もうダメ。

マジ使えねー、こいつ。

「てかさ。何で今更そんなこと言ってるの?」

「ちょっと今ぴんと来たんだよ。それで…」

「俺に電話するより、部室行って名簿見た方が早いんじゃない?」

「いや、だから。今すぐ知りたいん……」

言ってる傍に。

あいつ、ばつとり切りやがる。

だから。

切れたケータイ見詰めながら、俺ボーゼン。
うわー。

何やってんだよ、こいつ。

人が困ってるのに、そういう態度取るか普通?
最悪だな。

全く。

死ねばいいのに。

@ @ @

はあ。

俺、不機嫌。

マジ不機嫌。

富樫はアホだし、まゆちゃんには会えないし。

このまま新札幌まで行っちまおうかと思うぐらい不機嫌。

じゃあさ。

あれは一体何だった訳？

俺のカバンに入ってた奴。

それと。

地下鉄乗るたんびに見えるあれ。

何あれ？

俺、そんなもんに振り回されてた訳？

何かすっかり馬鹿馬鹿しくなつて。

両足、前に投げ出したくらいにして。

俺、完全に怒っちゃった。

怒ったってか、何かもうどうでも良くなった。
はあ。

何やってんの、俺？
どうしちゃったの？

マジでおかしくなったんじゃない？

考えてみればさ。

考えるまでもないんだけどさ。

どれだけ可愛いったって、ユーレイはユーレイじゃないや。

もし仮に、まゆちゃんがそうだとしたらって話。
てか。

俺のユーレイ歴からいくと、确实そうなんだけど。

だとしたらさ。

デートにも誘えないじゃん？

告白どころか、キスもなし。

しかも彼女、どういう訳か地下鉄からは出らんないみたいだし。
そしたらさ。

好きになっても意味なくね？
てか。

そんなのを好きになった俺が、ちょっとどうかしてんじゃない？

もういい。

やめよ。

アパート帰って速攻寝よう。

疲れてんの、俺。

あんなもんお持ち帰りしてからずっと。
だから。

あれ、もう捨てちまおう。

気に入ってたカバンだけど。

ユーズドの分際で、8000円もしたカバンだけど。
ユレイごと捨てちまおう。

呪われそうだし。

気味悪いし。

鮮度も落ちただろーし。

いい加減、賞味期限も過ぎただろーし…

そう思いながら、ふと顔上げた時。
窓の向こうに、視線を感じたんだよね。

…え？

何で？

俺、びっくりして、まゆちゃんのこと見たけど。
彼女、白っぽいパーカー着てそこにいて。
目が合った途端、にっこりしてくれる。

何で何で？

さっきまで、影もカタチもなかったのに。
俺もう、諦めてたのに。
アパート帰ってフテ寝しようって決めたのに。
どうして今になって出てくんの？

おろおろする俺のこと、まゆちゃんはじっと見てる。
怖くなんかない。

ユーレイには慣れてるし。

可愛いユーレイならなおのこと。
それに。

今回はいつもと違ってたんだ。

何処がって？

これまでは俺、見てるだけだったの。
眺めてるだけだったの。

でも今回は、ちょっと違ってた。
だってね。

窓の向こうのまゆちゃんが、遠慮がちにドアをすり抜けて。
俺の方に来てくれたんだから。

反射的に、脚見ちゃったけど。

デニム地の可愛いタイトスカートで。

真っ白な膝と、真っ直ぐな脚。

赤い靴下と黒い靴。

ちゃんと揃ってる。

五体満足。

途端に俺、ドキドキし始める。

ヤバいくらい。

でもね。

まゆちゃんにはここにこしながら歩いてきて。

俺の前でぴたつと足止めて。

それから、

ふわりと、隣に座ってくれる。

ありえないくらい自然に。

@ @ @

まゆちゃんとの、初めての2ショット。

予想外の展開に、俺、大慌て。

いやいやいやいやいやいや。

だって、ありえねーでしょ？

俺にははつきり見えてんだから。

彼女の姿も、表情も。

フツーに見えてんだから。

恐る恐る、視線合わせると。

彼女も、俺を見返してくる。

これがねー。

マジ、半端ねーの。

可愛いなんてもんじゃ。

ぶつちやけ、優香タンなんか目じゃねーって感じ。

何よこれ？

俺のモーソー？

だとしたら。

俺の想像力、かなりレベル高くね？

な〜んてコト考えてたら。

彼女、ちよつと遠慮がちに、俺の手に触れてくる。

見た目はリアルそのものだけど、感触はやっぱ薄い感じ。
何て言うか。

触られてるのも判るし、ほんのりあつたかい気もする。
でも。

やっぱ、実物とは違う。

それでもさ。

俺、嬉しかったの。

パニクリもせず、テンパリもせず。

よって、オネエ言葉にもならず。

ちゃあんと見れたんだ。

まゆちゃんのこと。

なんで。

すっかり舞い上がった俺。

ちよつと調子に乗ってみる。

彼女の顔色窺いつつ。

肩あたりに、触ってみようかな、なんて考えた。

どうよこれ？

やっぱまずいかな？

まだ早いかな？

とは言っても。

そこは俺、所詮乙女座B。

筋金入りのヘタレなもんで。

触ってみたい気持ちはあるけど、指が全然動かねー。

すぐ隣に、まゆちゃんいるのに。

俺のこと、にこにこして見てるってのに。

あーやだよだ。

どんだけヘタレなのよ、俺？

そんな俺に愛想を尽かすこともなく。

まゆちゃんは、そつと手を伸ばしてくれる。

え？

何？

それって、ヤバくね？

だってさ。

俺、ふつーに、手とか握られてるし？

てか。

彼女の方から、俺に触ってくれてるし？

そのことに気付いて、ますます硬直する俺でも、怖いとは思わない。

だって、まゆちゃんだもん。

ユーレイだとしても。

会いたいつてずっと思ってた子なんだから。

そうこうしてる間に、地下鉄はぐんぐん走って
南郷13丁目に到着しちまう。

ホームには何人か人がいる。

くそ。

来るな客。

頼むから。

ちよつと空気読め。

なーんて祈る必要もなく。

皆何故か、俺のいる車両を避けていく。

ん？

何で？

まゆちゃん、何かした？

それとも、俺がいくくないの？

再び閉まったドア。

ちよつとほつとして、まゆちゃんを見返すと。

彼女も、にっこりしてくれる。

あー。

何となく判った。

最初俺、嫌われたのかと思ってたけど。

こういうことだって。

つまり、その。

ねえ。

そういうことだよな？

…要するに。

二人つきりになりたかったんだよね？

@ @ @

地下鉄がぐんぐん走り出したあと。
あらためて、まゆちゃんと向かい合う。
さて。

何言おう。

何て話そう。

その間。

俺、結構必死。

何気に必死。

ごちゃごちゃした頭、必死に働かせて。

何話せばいいか、必死に探ってる。

あー！ー！ー！っつ、もうっつっ！ー！

今思えば、俺っていつつもこう。
肝心な時になると、何も喋れなくなつて。
あとでいつつも悔しい思いすんの。
だから、口ゲンカも負けっ放し。

チャットも苦手。

何かを整理しながら話すとか、まず不可能だし。
てか。

こんだけ俺がテンパってるってこと、彼女判ってるんだろーか？
少しは判ってくれてるんだろーか？

俺がぱくぱく口を開いたり閉じたりしてるのを。

まゆちゃんは、黙って待ってくれてる。

ちよつと首を、右側に傾げたぐらいにして。

さらさらの髪が、揺れるぐらいにして。

ああ。

もう無理。

もうダメ、俺。

萌え死ぬ。

マジで萌え死ぬ。

こんな可愛いコ前にして、何にも出来ないくせに。
そういうとこだけは、ソッコー反応するんだわ。

言葉なんか出てこないから。

俺、いい加減諦めて。

必死にテレパシー送ってみる。

笑うなって。

必死なんだから。

だって相手、ユーレイなんだから。

しかも、めっちゃ可愛いコなんだから。

俺のこと今笑ってるだろーけど。

お宅だつてきつところなるって。

…あのー。

ひよつとして、本間まゆさん？

って訊いてみると。

彼女、こくんって頷いてくれる。
はにかんだ微笑み浮かべつつ。

あのさ。

判る？

この、こくんって感じ。

可憐っての？

いかにも女のコっての？

マジやベーって。

俺、初めてかもしれない。

リアルで見たの。

女のコがこんな頷き方するのって。

アニメの世界だけだと思つてた。

てか。

こんなところにいちいちはんのーしちゃうから。

俺の話、全っ然進まねー。

ごめんね皆様。

イラつとさせて。

でも、一番イラつとしてるの俺だから。

一人でテンパってるのも俺だから。

初心者マーク頑張れよってことで。
も、ちよい、我慢してやって。

で。

どーしましろう、これから。

何話しましろう。

こんな時に限って、話題ゼロ。

天気とか、スポーツとか。

日ハム好き？　なんて言ってもしよーがないし。
えーと。

とりあえず。

…触ってもいい？

なーんて考えた。

だってね。

彼女が先に触ってきたんだもん。

俺、後発だもん。

じゃなくて。

誰だってそう思うんじゃない？

可愛いユーレイさんならさ。

でもって。

そんな俺のアホな願いを、まゆちゃんは聞いてくれた。

こくんって頷きながら。

ああ。

ダメ。

それほんとダメ。

反則。

俺、メンエキないんだから。

初心者マークなんだから。

死ぬよ。

萌え死ぬ。

マジで萌え死ぬ。

…で。

俺、恐る恐る右手伸ばして。

まゆちゃんの肩に触ってみる。

ん？

左手はどうしたって？

彼女に握られてますよ。

しっかり、ばっちり。

判る？このシチュエーション？

19年生きてきて、初めての体験。

相手、ユーレイだけど。

そんなのこの際関係ねーし。

でね。

見えるの。

見えてるのフツに。

でもね。

やっぱりちゃんと触れない。

ふわっとして、ほのかにあったかい。

いるのは判るけど。

何だかヘンな感覚。

でもって。

恐る恐る手、下に下げてみる。

同じ。

何にもない。

見えるのに。

…で。

もうちょっと下げてみる。

はたかれた。

う。

ごめん。

調子に乗り過ぎました、俺：

@ @ @

もう、いゃん。

何でこんな無礼なの？

何でこんな馬鹿ばっかやってんの、俺？

逸脱にもほどがあるぜ、ったく。

そんなんで。

必死こいてぺこぺこ謝ったあと。

何とか気を取り直して、まゆちゃんに質問してみる。

「…何でまた俺だったの？」

まゆちゃん、もごもごと答えてくれるけど。

残念ながら、声は聞こえない。

なもんだから。

俺、耳を指差して。

それから、顔の前で手をダメダメって振って見せる。

そしたら。

まゆちゃんは気付いたみたいで、肩を竦めちゃう。
いや。

これがほんと可愛いんだわ。

マジで。

でも、ここでまた俺が萌えてると話進まないんで。
とりあえず先行くわ。うん。

上手くコミュニケーションが取れないまま。

地下鉄は南郷18丁目に着いちゃった。

この時間に乗る降りする客なんてまずいないから。

ドアが閉まってから、また話を始める。

とは言ってもね。

通じないんだわ。ぜーんぜん。

参ったなあ。

手話でも習っておけばよかった。

すると。

まゆちゃん、いきなり俺の手を取って。

おつきくひらがな書き始める。

あ、なるほど。

そういう手があったか。

「み・え・て・る・ひ・と・が」

で、一度切って。

まゆちゃん、俺のこと指差してくる。

ん？

あ、見えてる人が、俺だけだったってことね？

そう思ったら。

彼女また、こくんって頷いてくれる。

そっか。

そーゆーこと。

たまたま俺だけが、まゆちゃんのこと見える体質だったから。
こうしてアプローチしてくれてるって訳かあ。

あ、いかん。

何でか凹んでる、俺。

いかんね。

やっぱ、密かに自惚れてたりして？
俺に気があるのかも、なんて？

うーん。

ちよっとこれヤバくね？

何気にフラグ、立ったんじゃない？

…サイアクの展開、っばい。かも。

やや凹みがちの俺の手に。

まゆちゃんは、続きを書いてくる。

彼女が俯くと、綺麗な髪がさらさらつと落ちて。
ちっちゃな耳がちらつと覗く。

ああ。

これが現実ならなあ。

生きてる相手ならなあ。

なーんて思うけど。

そんなこと考えてるジブンが何だかイヤになる。

ユーレイだって何だって、まゆちゃんはそこにいる訳で。
何でか知らないけど、俺のこと頼りにしてくれてる訳で。
だったらさ。

何でもいーじゃん。

メッセンジャーだろーと、単なる遊び相手だろーと。

それで彼女の気が済むんなら。

うん。

俺、決めた。

もう迷わないさ。

ほんとだって。

まゆちゃんがこうして俺のところに来てくれたのも。
こうして俺と一生懸命話そうとしてくれてるのも。

何かの縁って訳でさ。

だとしたら。

出来るだけのことは、してやるべきじゃん？

元同期としてでも。

単なる知り合いでも。

ユーレイ体質のヨシミとして。

彼女、何か書きかけて。

ううん、って感じで首を横に振って。

俺の手の平、ぐちゃぐちゃって手で撫でる。

あ。

今のは取り消しってことね。

ゼーんぜん。

だいじょーぶ。

のーぷろぶれむ。

俺、いーかげんを絵に描いたような乙女座Bだけど。

口うるさいおふくろと、頭の悪い妹のせいで。

忍耐力だけは、人並みにあるから。

「お・ね・が・い・が・あ・る・ん・だ・け・ど」

ほら。

来たよ？

来ましたよ？

そう来るの、鉄板だと思ってたんだよね。

じゃないとさ。

俺になんかわざわざ声かけねーっての。

身長165の、天パの、一重の、キョードーフシンの。

でもって、年中ネルシャツ着て、デイパック背負ってるよーな。

どう控えめに見てもアキバちゃんなんだから。

電車男は、元々格好いい奴っぱいけど。

俺はどう考えてもダメよ。

けどね。

もしこれが成功したら。

俺、どっとう名前でデビューしようかな？

やっぱ、地下鉄男？

いや。

ありえねーし。

…どー考えてもパクリだべ。

@ @ @

「お願いって、何だろう？」

アホみたいな妄想を打ち切って、そう訊いてみると。

まゆちゃんはこちらっとな顔上げて、また手の平に書き出した。

今度は、迷いなく。
さくさくつと書いていく。

「も・う・い・ち・ど」

うんうん。
もう一度ね。

「か・ば・ん・の・な・か」

うんうん。
カバンね、カバン…

…へっ？
カバンって。

あのカバン？

あの、何かごそごそ言ってた奴？
サランラップでぐるぐる巻きにした？

びっくり目の俺に構うことなく。
まゆちゃんは書く。
黙々と。

淡々と。

あっさりと。

日和見な俺がすっかり忘れてたことを。
一番恐れてたことを。

「あ・の・な・か・を・み、……て……？」

…はいっ？

兄貴に見て貰ったものの、まだ気持ち悪くて。
あのまんま封印してるってのに。

あれ、…見ろってか？

おいおい！

マジっすか、まゆちゃん？

あれもつかい見ろって？

いや、その。

確かにね。

のーぷろぶれむと言っただけださ。

まさかそう来るとは…

固まってる俺見て。

彼女、にっこり微笑んじゃう。
だから。

俺、もう断れないさ。

アキバちゃんでも、ヘタレでも。
男だもん。

いちおー。

ついてるもんついてんだもん。

いや、まあ。

大したもんじゃないけどね。

だから。

今更、引き下がれないさ。

…でもさ。

ちよつとだけトホホな気分。

一難去つてまた一難って感じ。

ねえ。

ひょっとして。

これって、新種のイジメか？

マジかよって思いつつも。

俺、何とか頷いた。

しょうがねーべ。

やるしかねーべ。

男たるもの。

こうなったら、皿を食らえば毒まで。

…ん？

違った。

毒を食らわば皿まで、だっけ？

ごめんね。

俺、いちおー教育学部なんだけど。

教育よ、教育。

ヒトサマにガクモン教えなきゃいけない立場になる予定なんだけど。

ご覧の通り。

日本語、あんま得意じゃないんだわ。

で。

やっと決心したもんで。

まゆちゃんの方みて、いいよって頷いた。
そしたら。

彼女、何故か、ちょっと複雑そうな顔した。
えっ？

何？

そのハンノー。

ひよっとして、断った方が良かったの？

と、俺もやや複雑な気分になりながら。

まゆちゃんの手、握り返す。

判るの。

何かね、あつたかいの。

モーソーとか、錯覚とかかもしれないけど。
手、繋いでるって感じ判る。

なんて、せつかくいい雰囲気の人に。

KYな地下鉄、新さつぽろに着いちやった。

どつと人が降りて、どつと乗ってくる。

やれやれ。

うんざりしてそれ見てたら。

まゆちゃんはすつと席を立て。

俺に、端に寄ってねって手招きする。

あ、なるほど。

そしたらまゆちゃん、潰されずに済むもんね。

帰りは、やけに早かった。

東西線沿線に住む俺は、乗り換える必要もないし。

そのまま、座席に座りつ放し。
大通りで人がどつと降りて。
またどつと乗り込んでくる。
でも。

この日は珍しく、円山公園で皆降りて。
俺とまゆちゃんは、また二人きりになれた。
ほんの一区間だけど。

座りなよって言っても、彼女はいいって首を振る。
いやいや。

幾らユーレイでも、そういうの俺、ダメなのよ。
なんで。

俺も隣に立って、一緒にドアの向こう眺めてみる。

次は西28丁目。

もうすぐ着いちゃう。

やだな。

このまま、家に着いて。

一人であれ開けんのかよ。

そんなことが俺、ほんとに出来るのか？

違う意味で、心臓バクバクしながら。

ちらつと、まゆちゃんの方見てみる。

彼女の方が、俺より身長低いから。

俺のこと、下から見上げるみたいになる。

で。

アナウンス。

ここでまた、KYなアナウンス。

「間もなく、西28丁目」

あのなー！

判ってるって、んなこたあ！

と、叫び出したい気持ちを抑えて。
何とか、まゆちゃんに伝えてみる。

俺、頑張るから。

アレにナニが入っても。

頑張ってるから。

でもって。

何があつたか、ちゃんと教えるから。

明日ここで。

まゆちゃんに、報告するから。

そう思うと。

彼女、こくんって頷いてくれる。

ああ。

萌えてる場合じゃねー。

もうホームだし。

もうすぐ電車止まるし。

大丈夫、俺？

ほんとにちゃんとやれんのか？

ドアが開く直前。

俺は、じゃ、って言おうと思ったの。

ほんとそれだけ。

でも。

世の中万事塞翁が馬。

何が起こるか判ったもんじゃねーって。

俺には判ったの。

まゆちゃん、俺の左腕掴んでるの。

それで。

気が付くと、目の前に彼女の顔があつて
それから。

いきなり、唇が重なってきたんだ。

ちゅっ、て。

軽く。

ほんのちよつとだけ。

…信じられる、コレ？

@ @ @

突然のことに、ボーゼンとしてる俺を。
まゆちゃん、笑顔で送り出してくれる。
なんで。

よろよろしながらホームに降りてからも。
車掌がヘンな顔して指差し確認してからも。
俺はずっと、まゆちゃんのこと見てた。
いや。
てか。

彼女から、目が離せなかった。

…え。

何で？

ちょ、待って。

何、今の??

俺、パニック。
完全にパニック。

微笑みながら、電車と一緒にまゆちゃんがなくなったあとも、
がらんとしたホームに一人きり。
馬鹿みたいにパニックってる。
てか。

ボーゼンって言葉は、こんな時のためにあるんだって。
やっと判ったさ。

何とか、気力振り絞って。
自動改札潜って、外へ出る。
看板も、信号も、なーんにも目に入らない。
だって。

初めてだったんだもん、俺。
こういうの。
例え相手がユーレイだとしても。
何もかもが、初めてだったんだもん。
だから。

札幌銀行の前通って、館の前通って。
アパートの階段上って、電気点けるまで。

ケータイが鳴ってることにすら、気付かなかったぐらいで、
しかもそれが、アホ兄貴だってことも。
俺、全く頭の中になかったのね。

で。

ポケットからケータイ出して。

ぶるぶる震えるそれ見てたけど。

黙って見てたけど。

やっぱり、一人でやらなきゃいけないよーな気がして。
ケータイ、ベッドの上に置いてみる。

ぶるぶる。

ぶるぶる。

ぶるぶる。

ぶるぶる。

…あのさー。

何か、しつこいんだけど？

そう思いながらも。

俺、頑張ったから。

誰にも頼らないって。

一人でもう一回、アレと対決するんだって。

よくよく考えたら、兄貴がいつぱん見てる訳だし。

あいつ、何も入ってなかったって言うてたし。
でもさ。

あいつを信じるべきか。
それとも、まゆちゃんを信じるべきか。
どっちにしろ、何だか落ち着かなくて。
どちらかというと、イヤな予感してきてんだけど。
でも。

俺、頑張らないと。

約束したんだから。

そうだって。

キスまでしてもらって。

今更逃げられるかってーの。

で。

ようやくぶるぶるが鳴り止んだ頃に。

意を決して、押入れを開けた。

ごめん兄貴。

あとで電話すつから。

お前のこと信じてない訳じゃねーけど。

俺、基本ヘタレだけど。

安穩な乙女座Bだけど。

こう見えて、やる時ややるのよ。

そーーーっとなけると。

ホコリあーんどカビの臭いがして。

でも、がらんとした暗闇に、そいつはちゃんとあって、
相変わらず、ラップでぐるぐる巻きのまま。

…さって。

やりますか、俺。

いゃん。

手、届かないし。

誰だ、こんな奥に押し込んだの？

…俺か。

俺だな。

うん。

そう言えば。

あ。

やっと手届いた。

もうちょっと。

もうちょ…

やだ。

ちょっと。

何よ今の？

動いた？

動かなかった？

…無理。

ごめん。

やっぱり無理。

俺、もう心臓バクバク。

さっきとは違う意味でバクバク。
だってさ。

こえーもん。

ハンパなく。

動くんだもん。

かたかたって。

何もしてねーのにさ。

やだ、もう。

無理だって。

てか。

何で俺がこんな目に遭わなきゃなんねーの？

マジこえーし。

マジありえねーし…

…なーんてね。

期待裏切って悪いけど。

今回は、そうはいかないの。
だって、約束したんだから。
ちゃんと中見るって。

だから。

目つぶって、えいって引きずり出した。
その得体の知らないカバン。
この前まで、俺のお気にだったカバン。
今は、何が入ってるか判らないカバン。

一応、台所に新聞紙広げたくらいにして。
その上に置いてみる。
でも。

相変わらず、カバンは動いてる。

かたかた。

かたかた。

これ、結構くるよ。

ぶっちゃけ、かなり怖い。

でもね。

俺、何とかやってみる。

まゆちゃんのために。

理由なんか判らないけど。

この中に多分、ヒントがあるんだと思う。
だから。

やってみるよ。

まあ、何とか。

…。

… やっぱ怖え。

マスクとかした方がいいのかな？

ユーレイにマスクしてもしゃーないか。
花粉じゃないんだから。

ようやくリップの端っこ見つけて、
ぴりりって剥いてみる。
いや。

誰だよ全く。

こんなにぐるぐる巻きにした奴は。

…俺か。
俺だな。

よし。

上のは外れた。

あとは切っちまおう。

確か、この辺にハサミが…

ねーし。

見事にねーし。

だから、モノはいつも決まった場所に置いておくもんだって。
俺、いつもかーちゃんに怒られてた。

で。

いつも不思議に思っただけど。

モノって、使う時に限って見付からなくね？

でもって、他のモノ探してる時に、前に探してたのが見付かったりとか。

あれって絶対嫌がらせだよな？

…ま、いいや。

んなこたあ。

ベッドの枕元でようやくハサミ見付けて。

てか、何でこんなところにあんの？

俺、一体何に使ったの？

ベッドでハサミ使っって何よ？

ハサミぶれい？

変態か？

まあ、いいから。

俺の性癖なんか今更どーでも
ざくざく切っちまおう。

よし。

あとはすぽつと抜けるぞ。

それ。

すぽつと…

…。

やだわ。

あと少しだったのに。

ファスナーに食い込んでるんだもん。

どうしても開けなきゃダメってことだな、うん。

判ったよ。

判りましたよ。

開けりゃいいんだろ、開けりゃーさ？

ぐい。

引っ張るけど、スムーズに開かねー。

きつと兄貴だ。

うん。

間違いない。

締める時にラップ噛ませやがったんだ。

あのヤロ―。

ったく、使えね―。

俺にこんな手間かけさせやがって。

ただじゃおかね―。

今度、ロイホで奢らせちやる。

で。

やや苦戦したんだけど。

ぎぎぎぎっ、てな感じで、ようやくファスナーが開いたんで。

俺、一応覗き込んでみる。

でも。

兄貴が言った通り、俺の私物以外何も入ってなくて。

ちよっただけ拍子抜けした。

何だよ。

せっかく、頑張ったのに。

ヘタレな俺だけど。

まゆちゃんのために、目一杯頑張ったのに…

…ん？

ちよ、待って。

何か見えてねーか？

ぼんやり光ってる。
てか、光ってる感じ。

何だろう、これ？

…え。

ちょ、待ってって。
ありえねー、こんなん。

だってね。

やっぱり何か入ってた。
多分、俺にしか見えないもの。

これ、何だろう？

…あ、判った。
一番底にある。

指。

細い指先。

ちっちゃな手。

手首までしかない、ニンゲンの左手で。

多分。

@

@

@

まゆちゃんのだ。

きつと、

これ…

こういう場合。

これまでの俺だったら、『ぎゃー！ー！っ！っ！』って叫んで。

腰抜かして、アワ吹いて。

そのまま、朝まで気を失ってたかもしれない。

でもね。

俺、大丈夫だった。

意外と平気だった。

怖くもないし、気持ち悪くもない。

それ、見ちゃった段階で。

まゆちゃんが俺に伝えたかったこと、何となく判った気がしたから。

台所から部屋まで、新聞紙ごとカバン持ち込んで。

そこであらためて、中身出してみる。

まさか皿の上に上げる訳にもいかないから、タオルの上に。

小さな手。

手首から向こうは、うっすらと透明になりかけて。

まあ、その。

断面だとか血だとか骨だとか、そういうものは全く見えない。

何だろう？

半透明な、ガラス細工みたいな感じ。

でも、触ると仄ほのかにあったかくて。

さっきまで握ってた、まゆちゃんと同じ感触があつて。

ヘンな話だけど。

そのせいで俺、逆に実感させられた。

彼女がもう、死んでしまった人なんだって。
この世にいない人なんだってこと。

ベッドに腰かけて、タオルごとその手膝に乗つけて。
黙って見てるうちに、何だか凄く悲しくなってきた。
だってね。

これ、俺にしか見えないんだから。
兄貴にも、アホ富樫にも。
多分、彼女の両親にも。

俺しか触れないもんだから。
きつとまゆちゃんは、託してくれたんだ。
どういう事情があつてかなんて、見当もつかないし。
これをどうしたらいいのかさえ判んねーけど。
とにかく。

まゆちゃんは、知って欲しかったんだと思う。
自分がここにいてるってことを。
手がかりを残してるってことを。

そう思ったら。

何だか、どうしようもなく泣けてきて。
その手に、自分の手重ねてみたりする。
可哀想につて。

どうしてこんなことになるんだろうって。
もう、泣けて泣けてしょうがなくて。
泣いたからどうなるってもんじゃないって判ってるけど。
そんなの判ってるけど。
でも。

俺、何も出来なくて。

何もしてやれなくて。

まゆちゃんが死んだ時も、ほんと他人事で。

あー、事故かあなんて、軽く考えてた。
でもさ。

俺と同じ年に生まれて、同じように育ってきて。

ついこの前まで、同じ大学に通ってた。

それが。

何で、こんなことになっちゃうんだろうって。

知らなければ、それで済んだ話だけ。

俺、知らずにはいらなかったから。

生まれつきのユーレイ体質のせい。

どうしてまゆちゃんが、俺を選んでくれたのか判らないけど。

知った以上、彼女のことはもう他人事じゃなくて。

自分のことみたいに思えてくる。

めいっばい泣いたあとは、何だか気が抜けて。

そっとタオルにくるんで、枕元に置いておいた。

大丈夫。

俺、何とかするから。

ヘタレだけ。

いい加減を絵に描いたよーな乙女座Bだけ。

何とかするから。

まゆちゃんを、あの地下鉄から引きずり出して。

家に帰してあげるから。

ん？

具体的にどうやるの？

そんなの判らねーよ。

レーバイシでも何でもねーんだし。

けど。

とにかく、いろいろ考えてみる。

こんなもん見せられた以上。

彼女がカラダ張って、頼ってくれた以上。

俺のこと信頼してくれてる以上。

ここで何とかするのが、男ってもんでしょ？

真夜中。

何でか知らないけど、ケータイ鳴ってる。

しかも、俺の耳元で。

ぶーん。

ぶーん。

マナーモードにしっ放しだったっけなと思って、うつ伏せのままも
ぞもぞ手動かして。

やっと掴んでみたものの、何か違う。

ん？

てかこれ、俺のじゃねーし。

何この、オレンジのケータイ？

でもさ。

何だか出なきゃいけないよーな気がして。
ぱかっとなげて、通話ボタン押してみる。

最初は無音。

でもよくよく耳澄ませると、ごーんごーんって、低い音が聞こえて

くる。

あ？

何これ？

乗り物みてーだけど。

…。

……。

あの。

… ひょっとして、地下鉄？

それに気付いて、ちょっとだけ戻ってくる俺の意識。

ガッデムだべ。

ジーザスだべ。

無視して寝ちまえばいいものを。

お前ホント気がきかねー。

何でこのタイミングで正気に戻るかな？

まあいいや。

ほら。

言ってみ。

何か伝えたいんでしょ、俺に。
聞いてあげるから。

何でも言ってみ、にーさんに。
今なら配送料負担でご奉仕中だから。

でも。

ケータイの向こうはあくまで沈黙。
マジで？

何か言いなよ。

俺、もう開き直ってるから。
だってここ、札幌だもん。

何が起きてもおかしくねー場所だもん。

って思ってたら。

やっと、ハンノーあり。

予想通り、可愛い声がこう言ったんだ。
ちよっとだけ、遠慮がちに。

「…三国、くん——？」

@ @ @

「あつ、はい!!」

緊張のあまり。

これでもかってかんじのでかい声で返事した俺でも。

そこはベッドじゃなく、大教室で。

みんなの冷たい視線が、四方八方から集まってくる訳。

…わお。

ひよつとして。

またやっちゃった、俺？

「ちよ、何でそんなおっきい声出すの!」

俺のこと咎める^{とが}一方で、周囲にすみませんすみませんってアタマ下げるコ。

なーんだよ、杉本か。

オカルト研一年、唯一の女子だけど。

どちらかとゆーと、こいつの力オの方がオカルト。いや。

念のため弁解しとくけど。

俺じゃなくてね、みんなが言ってるの。

「てか、講義中に声かける方が悪いべや？」

目擦りながらそう言つと。

杉本はややずり落ち気味のメガネを上げながら囁いた。

「あのね。講義中に熟睡してる方がどうかと思うけど？」

「しょーがないべ。眠れなかったんだから」

「てか、ヨダレ拭きなよ。きつたないな」

げっ。

そう来たか。

慌てて口を拭う俺。

やべーやべー。

何よこの展開？

超力ッコ悪い。

「…で、何か用？」

「あ、そうそう。富樫くんからメール来て。帰り部室に力才出して
つて」

「はあ？ 俺、用事あんだけど？」

「久々に上映会やるらしいから。メール行つてない？」

「…あ」

「ん？」

「ケータイ、忘れてきたかも」

「マジで？」

「うん。多分あいつのメール読むなっていう神の啓示が」

「何言ってるの。とりあえず来てね。みんな待ってたから！」

「いや、だからやることあるって言ってるっしょう？」

と、再度抗議したところで。

杉本は聞きもせず、さっさと席移りやる。

生意気にも、こいつにはちゃんと彼氏がいて。

講義中もいつも一緒に座ってやがる。

これがまたオカルトくせーカオの彼氏なんだけど。

何故かそういう同士がカップルになんだよな。

俺なんかこんなに地道に生きてんのに。

もうちょっとで、彼女いない歴20年になっちまう。
だからさ。

世の中、ほんとどーかしてると思うよ、ったく…

で、講義終了後。

そのまま逃げようと思ったら、あっさり捕まった。
ったく。

クソ富樫。

待ち伏せなんかしてんじゃねーよ。

「何でメール返さねーの？」

仏頂面して、奴が言う。

その態度がまた気に食わねー。

「忘れたんだよ、ケータイ」

「はっ？ マジで？」

「冗談で忘れつかよ？」

「いや、ネットおたのお前がさー。珍しいなと思って」

「しゃーねーべ。朝寝坊して、一限出損なうところだったんだから」

「で、寄つてく？」

「じょーだん。そんな暇ねーから」

「いい映像入ったんだけどな。この前、例のお化け病院に突撃した」

時のねぼとか」

「あー、わりー。ぶっちゃけ興味ねーし」

「またまたあ。ユーレイちゃんの見える三国じゃなきゃ、詳しく分析出来ねーし」

「分析ってなあ」俺は、溜め息をついちゃうよ、マジで。「お前等が勝手にこじつけてるだけじゃねーの？」

「だから、そこがシロートとクロートの差なんだって！」

「俺、今日はパス。マジ忙しいんだって」

「まあまあ。絶対見た方がいいからさ」

「やだ」

「まあそう言わず」

「やなもんはやだ。こうしてる今も、あちこちから見られてるってのに」

「あん？」

「見えねーの？ その木の影にいる、髪の毛長いおねーさん」

「……」

「それと、そこにいる半袖の子」

「……」

「別に何処にでもいるじゃん、あんなもん。何でわざわざ見なきゃいけないの？」

「いや、だからそこがシロートと」

「とにかく、俺は一般人なんだって！ あんま下らねーことに巻き込むなよなっ！」

会話をさっさと打ち切って。

イライラしながら、奴に背を向けたんだけど。

何故か富樫は、引き下がらねー。

これ以上しつこくするとキレるって知ってる癖に。

俺がユーレイ体質だってこと言われるのキライだって判ってる癖に。今日に限ってしつこくて。

しかも。

よりによって、こんなこと言いやがった。

俺が正門まであと数メートルってところで。

「ま、無理して来いとは言わんけど」アホ富樫は、でかい声で言う。
「知りたくねーのな？ 本間まゆのこと！」

@ @ @

ったく。

うっせーな。

何が「知りたくないのな？」だ。

クソ富樫。

俺の悪友。

歩くアホの分際で。

何が、本間まゆ…

…。

……。

んあ？

ちよ、待って。

何でお前がそんなこと言うの？

で。

俺、ついに足止めちゃった。

ぴたりと。

で、くるりと振り返る。

相変わらずの出っ歯面。

オマケに眼鏡。

典型的日本人みたいな、富樫に向かって。

「…あんだって？」

「だから、本間まゆのこと。でもお前、知りたくねーんだろっ？」

「知りたくねーなんて言ってねーだろう？」

「いや、だから無理しなくていいよ。何か知らんけど機嫌悪そうだし」

「あー、やっぱり行くわ部屋」

「はあ？」

「気が変わった」

「眠いんじゃないかったのか？」

「昨日の夜中、兄貴に寝込みを襲われたからな」

「またすすきの帰り？」

「そう。合コンと麻雀とパチンコとソープが趣味だから」

「すげー！ 兄貴さん相変わらず頑張ってるなあ！」

「そうなんだよ。いつそいろんなもん感染うつされちまえばいいのに……」

なーんて言いかけて。

俺、はたと気が付いた。

てか。

俺としたことが。

富樫相手に、何フツーに会話してんだ？

「……って、ちげっ！ 兄貴の話じゃなくて……！」

「ん？ 何の話だったわけ？」

「その、本間まゆ……さんの話」

「ああ。だったらやっぱ、部室寄ってけよ」

「……」

「この前の電話でへんなこと言ってたからさ。気になって見てみたんだよ」

「そしたら？」

「そしたらばっちりあったんだわ。部員名簿に、その名前が」

「……」

「何か聞いたことあると思ったら。この前、地下鉄で自殺した子だろっ?」

「…自殺? 何それ?」

「あ、知らんの? ひょっとして道新読んでねーな?」

「いや、一応読んだけど。事故って話じゃなかったか?」

「表向きはな。目撃者の証言だと、何かに誘われるみたいに落ちてったって」

「……」

「後ろの会社員のヒトが、あっと思って掴まえようとしたけど、遅かったんだってさ」

「……」

「そう言えば三国、そこにいたんだろっ?」

「…まーな」

「で、どうだった?」

「何が?」

「見たんだろっ?」

「見てねーし」

「マジで?」

「だって俺、ガッコ来る時で。事故があったのは反対側のホームだったから」

「あー、なる。そういうことが」

「今となつては、見なくて良かったかなって」

「そりゃそうだ。気持ちのいいもんじゃないからな」

なんて言いつつ、奴は俺を部室へ連れ込んで。

半ば無理矢理、プロジェクトの前に座らせる。

周囲には、25人ぐらい部員が集まって。

そのうち18人は野郎だから、これがほんとむさ苦しくって。
だからって。

オカルト研に入る女子なんか、まあ、ご想像通りの訳で。

杉本同様、カオからしてオカルトな連中で。

俺はもうほんとすっかり徹底的にブルー入っちゃう。

ああ。

せめてこの隣にいるシュワルツェネッガーみたいな女が、まゆちゃんなら。

彼女みたいなら、ほんわり可愛い女の子なら。

きっと俺、めっちゃときどきして。

倒れそうなくらいキンチョーして。

世界一幸せな気分になれるって、思っただけだなあ…

で。

思いつきり気が進まないまま、上映会スタート。

何処のテレビ特番なんだか判んねーけど。

売れないタレントがきゃー！ とか、わー！ とか、大袈裟に叫ぶたびに。

連中は皆、スクリーンに釘付け。

わざと暗くした、こ汚らしい部屋ん中。

ポテチとかつまんだぐらいにして。

でもさ。

内容以前の問題がひとつ。

俺、あんま目良くないから。

暗視カメラの映像だけでも辛いのに。

手ブレだらけのビデオ画像見てるだけで、具合悪くなってくる。

てか。

ここ来ていつも思うことだけど。

何が悲しくて、廃墟になった病院とか、炭鉱とか。

学校とか、そーゆーところに行きたがるもんかね？

ほっときゃいいものを。

何でわざわざそんなの見たがるもんかね？

俺、確かにユーレイ体質だけど。

さっき富樫に言ったのはウソで。

実は、はつきり見える訳じゃない。

どっちかっていうと、ふわふわの白い固まりがそこにいる感じで。俺を見ると、ほわんほわんって近付いて来たり。ふっと消えちゃったりするくらい。

けど。

はつきり見えないわりには、いろんなこと感じちゃうから。不思議なことに、年齢とか性別とか、何となく判るし。

話は出来ないけど、何が言いたいのかも大体判る。

何処に行つていいか判らなくて困ってる、とか。

寂しいとか、退屈だとか。

意外と、恨んでやるってユーレイさんっていないのよ。てかね。

あっちにはあっちのコミュニティみたいなもんがあつて。

ユーレイさん同士で付き合ったり、その辺に座つてぼーつとしてたり。

天気の良い公園には、そーゆー連中が沢山いるから。

多分、俺等が好きそうなところは、ユーレイさんも好きな所で。

ちっちゃいユーレイなんか、その辺走り回つてて。

悪さしたり、めそめそ泣いたり。

別にこつちと変わらない感じ。

そういうの知ってる俺だから。

ありえない窓からよいしょって入ってくる女の子がいても。

病院の中、ふらふら歩いてるお爺さんがいても。

だからどうした？　って感じで見ちゃう。

そーいうのを見て、怖いとか気持ち悪いとか。

興味本位で騒いでる連中の気が知れない。

明日例えば、富樫が車に轢ひかれたとして。

いや。

俺としては、結構本気で轢かれて欲しいんだけど。

そしたら、イヤでもあっちの世界に行っちゃう訳で。

ミセモノみたいに扱われたら、やっぱり気分良くないんじゃないかなと。

そんなことを、思っちゃう訳で。

…ん？

だとしたら、何でもまゆちゃんは、ちゃんと見えるんだろう？

勿論、これまでもたま〜に全身見えるヒトはいて。

すれ違うつもりが通過して、初めて気付いたりもするんだけど。

彼女とは、ちゃんと意思が通じてるし。

ちょっとだけど、ちゃんと触れるし。

そこまで突っ込んだ付き合いになった相手は初めて。

ということとは。

まゆちゃんと俺の、波長っての？

波形っての？

そういうのがぴったんこ合ってるのかもしれない。

あ。

そういえば。

靈感バリバリある親戚の叔父さんが、前に言ってたんだ。

ユーレイ体質にも、フルオートタイプとマニュアルタイプがあつて。

オートのヒトは、勝手にチューニングが合っちゃうんだって。

俺の場合はマニュアルどころか、自分で調節出来ないタイプらしい。つまり、チューニング出来ないテレビみたいなもんかな。

波長が合っていないと、完全には見えないけど。
たまたま周波数帯が合う相手だと、実体として飛び込んでくるんだ
って。

まあ、その叔父さんも乙女座Bなもんで。
何処までホントかなんて、俺には判んねーけど。
とりあえず。

まゆちゃんと俺は、何かで繋がってるんだなって。
恐怖映像見ながらきゃー！　きゃー！　言ってる連中の先頭で。
きつたないテーブルに肘突きながら。

俺、ずっと考えてた。

まゆちゃんからの預かりものの意味と。
それをこれからどうしたらいいのかと。

あと。

さつき富樫が言ってた件。

何で、まゆちゃんが死ななきゃなんなかったのかって。
それをまず、訊いてみようかなと思った次第。

…でもさ。

訊きづらいよね。
そういうことって。

さてー。

何て切り出そう？

明るく？

楽しく？

じゃなきゃ、真剣に？

・・・ないわー。

俺の中にないわー、その手のマニュアルでもさ。

やってみるべ。

とりあえず、やってみるべ。

やらないと、先に進めないから。

まゆちゃんが可哀想だから。

あのままずっと地下鉄にいるんじや。

幾ら何でも、可哀想だべ？

@

@

@

「なーなー、このあとどーすんの?」

なんて言いながら、くつついてくる富樫をシカトして。
黙々と、地下鉄へ向かう俺。

とりあえず、まゆちゃんに会わなきゃって。

アタマん中には、それしかなかった。

けど。

富樫はそんなんお構いなし。

バス定期も持つてる癖に、わざわざ俺についてきやがる。

あーあ。

こいつに好かれるぐらいなら、ユーレイに好かれる方がなんぼかまし。

とりあえずうるさくないし…

「三国い!」

「なにっ!」

「お前何で最近冷てーの?」

「最近どころじゃねーだろ?」

「あん？」

「四半世紀前から、お前には興味ねーの」

「いやいやいやいや、それってちょっとひどくね？」

「ぜんぜん？」

「んなこたねーって」

「ちつとも？」

「いや、ひでーわ」

「まったく？」

ばたばた真駒内行きに乗り込んだ俺を、富樫はしつこく追ってくる。
あのさー。
お願いだから。
少しは空気読もうな？

「腹減らね？」

「別に」

「ドンキでも行かね？」

「行かね」

「おごるからさー」

「だから、行かねーって…！」

そう言いかけた時。

ようやく、まゆちゃんを見付けた。
でも。

彼女、何だか様子が変わった。
うつ向いたまま、吊革に掴まってんの。
俺に気付いた様子もなく。

で。

まゆちゃんの前に座ってる男。
小栗旬似の茶髪のイケメン。
見た感じ、同じ学生っぽい。
どういう事情か知らねーけど。
まゆちゃん、そこから動かない。
そいつのこと、黙って見てんの。
泣き出しそーな力オして。

…えっ？

ちょ、待って。

誰それ？

てか。

何？ この展開。

あー。

…ひょっとして。

そーゆーこと？

瞬時に固まる俺。

その前方3mに、まゆちゃんと男の姿。
でも。

ここでまた活躍する訳だ。
空気読めない誰かさんが。

「…ん？ なしたの？」

「どーもしねー」

「いや、何かあったべ？」

「何もねーって！」

「いやいやいや、あったべさ！」

「あー、ほんと、しつこいね！」

さすがにキレそうになって、富樫に向き直ると。
あいつ、何だかにやにやしてやがる。

ん？

ん？

何だよ？

「…知ってるぞ？」

「何が？」

「三国チャンつてば、見えてんでしょ？」

「だから何が？」

「あそこにいる…いや、ここで言ってもいー訳？」

思い掛けない言葉に。

再び、フリーズしちゃう俺。

は？

何？

どーゆーこと？

ひょっとして、お前にも見えてんの？

…なーんて。

勘繰った俺がバカだった。

てかね。

こいつ、基本的にハッター野郎だから。

シッタカ野郎だから。

でも。

富樫の口から出まかせを信じちゃうほど、俺のショックはでかくてこのままこの話シ・エンドに持ち込もうかと思っただぐらいにして。けどね。

富樫ときゃあぎゃあ騒いでたせいで。

まゆちゃん、俺のことに気付いてくれたみたいだった。

彼女と目が合った瞬間。

お約束どーり、三度目のフリーズ起こしたんだけど。
まゆちゃん、しょぼんとしたまま、俺んどこ来て。

俺のカラダに細い両腕回して。

左肩に、こてんって頭乗せてくるから。

俺、ますます訳判んなくなつて。

富樫のことなんか、もうどーでもよくなつて。
ぶっちゃけパニックよ。

はっ？

なんだなんだ？

何があつた、まゆちゃん？

あつちのイケメン、どーすんの？

あいつ、彼氏とかじゃねーの？

ほっといていーの？

てか。

何よこの、萌えシチュエーション？

@ @ @

てかね。

もし隣に、富樫がいなきゃ。

悪趣味なカエル色のトレーナーを着たこいつがいなきゃ。

俺、マジで、まゆちゃんのこと抱き締めてたかもしんない。

周りから見たら判らないかもしんないけど。

はっ？ こいつキモッ！ 何やってんの？ 的視線びしばかりかもしんないけど。

俺、多分そうしたと思う。
出来たらね。

でも。

実際の話、電車は帰り際の学生やら専門学校生やらでこった返してて。

とてもじゃねーけど、そんな余裕はなさそうだった。

精神的にも、空間的にも。

なんで。

札幌駅でわんさか人が降りて、またわんさか乗って来た時も。

吊革に掴まるのが精一杯。

そんな中で。

まゆちゃんとはぴたっと俺に寄り添って。

すんごい辛そうな感じで目閉じてる。

それ見たらね。

もう、ユーレイとか関係ないもんね。

俺、心底可哀想になっちゃって。

何とかしてやらなきゃって思った。

事情は全く判んねーんだけど。

とりあえず、あいつがまゆちゃんと繋がってるらしいってのと。

多分。

俺の勘だけど。

彼女が死ぬ前に、何かあったんだろうなって。

それは何となく想像がついた。

でないとさ。

こんな風にならねーって。

リアルの子の女の子だって。

こんなに悲しそうにしてる訳ねーって。

揉みくちやにされたせいで、富樫と二人分距離が離れて俺はちょっとだけほっとした。

で。

ふと見ると。

いつの間にか、あいつの前には女が立ってる。

このクソ混んでる中、真っ赤なケータイ片手で操って慌しくメール打ちながら、そいつに話しかけてる。

「…んで、どーすんの、今日？ いちおーカ才出す？」

「行きたかねーけど。行かなきゃしゃーねーじゃん？」

意外とチャライ声。

ここで俺、すでにワンランク下と見た。

女の方は、まあ、結構綺麗っぱいんだけど。

まだ秋口だったのに、露出たけーたけー。

銀色のおっきいカバンに、真紫のカーディガン。てか。

あのスカートの丈は何？

膝上20cm？

いや、もったか？

ちよつと屈むと、おパンツ見えんじゃん？

別に見たかねーけどさ。

如何にも女子短大生って感じの、ど派手な子で。ガングロじゃないけど、化粧はマジ濃いし。

まばたきすると、つけまつげがばっさばっさしてる。

あんなの初めて見たよ、俺。

てか、どんだけつけてんだ？

「じゃあ、何処で乗り換えんの？」

「おーどーり。マジたりーけど」

アホっぽい話し方。

さらにワンランクダウン。

「何でたりーの？」

「大通あんま行きたくねーんだよね」

「えー、何で？」

「死んだ奴いんだよ。俺の後輩で」

「はあ？ ガチで？」

「ガチで。てか、ぶっちゃけ元カノなんだけど」

「はあ？ ヒロアキ、あたしだけって言ってたじゃん？」

「嘘つくなよ。言ってるし！」

「てか、何で死んだの？」

「前に事故あったじゃん」

「あー、はいはい。何か友達言ってた」

「俺んところにも友達から連絡来たんだけどさー、マジうざかった。」

もう関係ねーしって感じで」

「うざいってあんた」

そこで女、笑いやがる。

まあ、女も女なんだけど。

ケータイ打ちながら、脚組み替えてる奴。

そいつも、くすくす笑ってる。

あーと。

その。

何だ。

あいつちよっと、殴っていい？

「マジうぜーんだって。女の癖にアニメイトとか行って。アニメの話しかしねーの」

「え、可愛いじゃーん？ そーいうの？」

「何処がよ？ マジきもかった」

「でも、付き合ってたんでしょ？」

「付き合ってたってか、ぶっちゃけ二股。あんましつこいからさ」

「うわー、サイアクこいつ！！」

「サイアクなのは向こうだって。一回デートして、サイッコーつまなくて。速攻別れた」

「ますますひでー！」

「でもさー、あいつはずっと俺に惚れててさ。高校出るまでストーカーされまくったわ」

「あはは！ ストーカーってー！」

「しかも、俺がH大入ったら、ここまで追っかけてきて。ずっとシカトしてたけどね」

「いやいや、可哀想でしょ？ そこまで言ったらさ」

「可哀想なのは俺の方だって。てか、もうどーでもいいーんだけどさ、あんな奴」

「そんなこと言ったらダメでしょう？ 化けて出るよ？」

「化けて出ても平気。俺、靈感ぜんっぜんねーから。一生死んでろって感じ」

はー。

こんだけ距離あるのに、全部聞こえてくるし。

俺、何か無性にむかむかしてきて。

今にもスイッチ入りそう。

でも。

まだ、確証がある訳じゃねーし。

何かの間違いかしんねーし…

そう思った時。

丁度、大通に電車が滑り込む。
てかね。

女の子ずっと立たせておいて、平気な顔して座ってんの。
それだけでもムカつくのに。

立ち上がった瞬間、そいつ、笑顔でこう言い放ちやがった。
よりによって、まゆちゃんの目の前で。

皆が振り向くよーなでっかい声で。

「――ぶっちゃけ、まゆが生きようと死のうと。俺には関係ね
ーからさー!」

なんかね。

それ聞いた瞬間。

俺、完全にスイッチ入ったさ。

完璧アタマに血い昇ったさ。

だから。

隣にいるまゆちゃんをそつとどかして、降りる人に紛れて
ヒロアキとかいう名前の奴をおっかけた。

だつてさ。

ありやないべ？

一度だつて付き合つた相手のことをさ。

しかも、事故で死んじやつた相手のことをさ。

あんな風に言うとか、俺、信じられねーし。

絶対に許せねーって思った。

ましてや。

それがまゆちゃんだって知って。

こんな場所に、ずっと縛りつけられて。

辛かったり、寂しかったりする筈なのに。

まゆちゃんはずっと、あいつのこと思ってたに違いなくて
それをさ。

あんな言い方はねーべ？

それほど好きじゃなかったとしても。

最低だべ？

別れたカノジヨのこと悪く言う男なんて。

多少迷惑かけられたにしてもさ。

あんまり気持ちなかった相手だったとしてもさ。

ああいうのって、ヒトとしてどーよ？

幾ら何でも、あんな言い方はねーべ？

気に食わねー。

ガチで気に食わねー。

あんなオトコ、別れて正解だっちゅーの。

ありえねーっちゅーの。

しかも。

どいう字書くのか知らねーけど。

俺とおんなじ名前だったのも気に食わねー。

だからさ。

これはもう、やるっきゃないっしょ？

てか。

俺しかやってやれないっしょ？

他の奴には、判らねーんだから。

まゆちゃんがそこにいることも。

泣きそうな力才して、俺のこと見てることも。

だから。

俺、やってやる。

絶対、やってやる。

あんな馬鹿。

許しちやおけねーよ。

「—— あれ？ 三国？ みくにい！……！ 何でここで降りんの？」

あちゃー。

俺としたことが、すっかり忘れてた。

でっかい声で俺のこと呼びながら、追い駆けてくる馬鹿がいたってこと。

振り返ると、富樫の向こうにまゆちゃんの姿があつて。

電車の中から、心配そうに俺のこと見てる。

大丈夫だつて。

俺、ヘタレだけど。

乙女座Bだけど。

基本日和見な日本人だけど。

ケンカ滅茶苦茶よえーけど。

逃げ足だけははえーから。

こう見えて、意外と頼りになんのよ。

電車の中のまゆちゃんに向かって、親指突き出したあと。

富樫を無視つて、まっしぐらに階段へ向かう。

あの馬鹿をおっかけて。

まゆちゃんの元カレ。

長身のイケメン。

それも何だか気に食わねー。

目の前に迫る、ローライズのジーンズ。

くそ。

やってやる。

てか。

今、気付いたんだけど。

これって、やつかみか？

嫉妬もコミか？

慌ただしく階段駆け上がる俺の前で。
今カノの細い脚が、ちらちらしてる。
でもって、やっぱりしっかりおパンツ見えてんだけど。
それがまたよりによってピンクの総レースなんだけど。
んなもん、この際関係ねーし。
俺が目指すのは、ヒロアキだけで。
あの馬鹿の背中だけ。

あとちょっと。

そこへ、歩くKY富樫到着。
でも、んなこたあ関係ねー。
まゆちゃんに見せられないのが残念だけど。
ちゃんとやってのけるから。
ほら。

あとちょっと。

あと30cmであいつに追いついて。
あと10cmで、射程距離に入る。
よし。

こいつ、俺が後ろに張り付いてんのに。
殺気マンマンで尾行してんのに。
まったく、全然、気付いちゃいねーし。
下らねー自慢話しながら、女と手繋いでやる。
ありえねー！。

てか、こいつ、マジで馬鹿？

さて。

いよいよ、ミッション開始。
いくぜ、三国廣明。

一世一代の大勝負。

どーでもいいけど、無駄に画数多いのよ俺の名前。
何でふつーに広明にしなかったんだろーね？
全く。

お陰で小学生の頃は、ひでー目に遭った。

俺は死ぬまでとーちゃんを恨むね。

で。

奴は無防備。

完璧なまでに無防備。

そりゃそうだろう。

こいつ馬鹿だから。

徹底的に馬鹿だから。

こいつがH大入ったこと自体奇跡としか思えねー。
だから。

俺は瞬時に攻撃態勢に移る。

よっしゃ。

いい角度だ。

では…三国、いきまーす。

じゃ、ねーや。

―― 突撃い！

@ @ @

ヒロアキAのこうげき！

「ていつ！」

かいしんのいちげき！

「うあつ！！！！！」

つて。

みつともない悲鳴を上げた途端。
ヒロアキBは、階段の最上階でバランス崩して。
そのまんま、ごろごろと転がり落ちる。

…筈が。

現実はそのーは上手いかなくて。
奴は階段をしぶとく上りきり、そこで一瞬よろめいた。
でもまあ、俺にしちやあグッジャブ！
ミッション成功！

…なーんて思った瞬間。

「…何すんだデメー！！！」

…やだなー。
叫んじやつたよ、このヒト。
大衆のと真ん中で。
じょーだんなのに。
かなりマジだよ？
一人でマジ切れしてるよ？

こんな時。
俺はセオリーに従って、ある行動に出た。
そりゃあまあ。
逃げるが勝ちに決まってる。

「ちょ、三国！ おま、何やってんの？」

と。

すっかり忘れてた。

でも、今は説明してる暇ねーから。

相変わらずKYな富樫の腕、がっつ掴んで。

俺、改札へ向かって猛ダツシュ！

「——っざけんなデメーら！ 待てこらあっ！..!」

や、やべー！

超ウケる。

だってね。

あいつ、すげーの。

あんなイケメンが、顔真っ赤にして。

ケツ押さえながら走ってくんだから。

いやいやいや。

その格好がやたら笑えんの。

っーかさ。

今回も冴えてるわ、俺の必殺技。

「待てっって言ってるんだろ！ この野郎！..!」

待てっって言われて待つ訳ねーだろ？

やっぱ頭わりーな、こいつ。

…っと思ってたら。

「きゃーっ！ 変態っ！..!..!」

今度は、女の悲鳴。
ん？

何だ何だ？

振り返ると。

ヒロアキBは床にばったり倒れてて。

後ろにいるOL風のねーさんが、きゃーきゃー悲鳴上げてる。

あ、そっか。

俺、カンチョー食らわしたついでに、奴のベルト思いっきり下げた
んだけど。

あいつアタマ来てたせいか、それに気付いてなくて。

しかも、勝手に裾踏んづけたらしく、半ケツ見えてんの。

うわー。

みつともねー。

サイアク、こいつ。

「三国、何やってんだよ！ 逃げっ、逃げっっ！！！」

いきなり、腕がっつと掴まれて。

今度は俺が、富樫に連行される。

てか俺、もーちよい見てたいんだけど？

「やだー！ あんた、バツカじゃねー？ 何やってんのよー！！！」

黄色い声は、奴の今カノ。

文字通り、腹抱えて笑い転げてる。

そりゃ笑うよね。

笑うしかねーって。

でもね。

他の乗客も、見て見ぬ振りすりゃーいいものを。

一緒になって笑ってるもんだから。

マジ切れ中のヒロアキ、ますますヒートアップしたもよー。

「うつせえ！ 見てねーで、さっさとあいつらおっかけろって！！」

「はあー？ てゆーか何様？ あたしに命令する気？」

「いいから早く追えって言ってるだろう？ このバカ女！」

「ちょ、何よそれ？ 信じらんない！ あんた誰に向かってそんなこと言ってるの？」

なーんて。

バカップルの痴話喧嘩が始まって、駅員がどやどや駆けつけたあたり。

俺と富樫は、悠々と改札を出る。

まゆちゃんを傷付けたことへの制裁にしちゃ、ちょいと甘過ぎたかもしんねーけど。

今回は事前にウェポン用意しとこつと。

息切らせながら、三越前に出て。
俺と富樫、ぱつと顔見合わせる。
で。

次の瞬間、ほぼ同時に爆笑。

「いや、死ぬ、死ぬ！ チョー腹痛え！」

「だろ？ 俺、ガチで笑い死ぬかと思った。見たかよあいつのカッ

「？」

「見た見た！ 俺最初、三国が何やってんのか全っ然判んかったんだけどさ」

「あいつ宿敵なんだよ。懲らしめてやるーと思ってさ」

「っーか腹痛え！ 息出来ねー！」

「俺なんか涙出て来たさ！」

「しかしお前、やる時やんのな？」

「そりゃもう」

「俺、ずっとヘタレだと思ってたからさ」

「ちょ、ふざけんなって。お前にだけは言われたくねーし！」

「…で。これからどーする？」富樫は、眼鏡を拭きながら言う。
「あいつ、まだ探してるかな？」

「まさか。ぜってー覚えてねーって」

「なら、いいけどさ」

「とりあえず俺、ソッコー、手洗いーんだけど？」

「何で？」

「いや、手加減なしだったからさ。かなり深く入っちゃって…」

「うえー。じゃ、先にトイレ行くか」

「それから…」

「うん？」

「…ドンキー、行くかあ？」

びつくりドンキーは、意外と空いてたから。

俺と富樫は一番奥のカウンター席に陣取ることにした。それから、メロンソーダで乾杯する。

レギュラーバーグディッシュの300g食いながら。

「いやいやいや、ほんととサイコーだったわ！」

「だろ？ 出来れば動画で撮りたかったな」

「で、ニコ動かYouTubeにUPしてか？」

「そうそう。ぜってーウケるから！」

「だよなー。あれは完璧面白映像だったぞ？」

そんな話しながら。

富樫はいかにも楽しそうに笑う。
なんで。

こいつはアホで、お調子者だけど。

オカルト関係には一応の理解があるからして。

やっぱ、打ち明けた方がいいうな気もして。

飯食ってる間に、まゆちゃんのこと話しちまった。
これまでのいきさつを。

予想外なことに。

富樫は、結構親身に俺の話を聞いてくれた。

混ぜっ返すことも、気持ち悪がることもなく。

「あー、それでかあ。本間まゆのこと調べてたの」

「そうなんだよ。何でこんなことに巻き込まれるんだか、俺にもぜんぜん判らねーんだけど」

「そりやお前、縁つてもんじゃないかい？」

「縁？」

「そう。何でか知らねーけど、好かれてるってことは確かなんじやん？」

「まーな。だからって、何がしてやれるって訳じゃねーし…」

俺が溜め息つくと、富樫はげへげへ笑った。

何故かこいつはいつもげへげへ笑うんだよね。

「でもやっぱ、帰してやんなきゃいけないんじゃない？」

「うーん…」

「あ、アレか。幾らユーレイちゃんでも、寂しいんだな？」

「寂しいっていうか。とりあえず理由を訊きてーんだよね」

「それもそーか」

「だけど、声聞けなーし。前みてーに、手の平使って筆談するしかねー感じ」

「手間かかるけど、そやって聞き出すしかないんじゃない？」

「だよなー。やっぱりそれしかねーか！」

なーんて話しながら。

ようやく、飯食い終わって。

さて、会計するかとなった時。

奴は笑顔でこう言い放ちやがった。

「じゃ、今日は三国センセイのおごりだな？」

「…はっ？ 何で？」

「だって、お前のせいで全力疾走するハメになったださー」

「……」

「それに。いろいろ相談に乗ってやっただろ？」と、肩に手を置いて。「なっ？」

…。

……。

前言撤回。

やっぱりサイアクだ、こいつ。

@ @ @

結局何でか知らんけど、富樫におごる羽目になって。
どうにも納得いかない気持ちで、奴と別れた。
全く。

ほんととずーずーしーよな。

ま、いつか。

結果おーらいだし。

まゆちゃんに、戦勝報告せねば。

そう思って、地下鉄に乗ってみる。

まゆちゃんに会いたかったから。

バスセンター前で、人がどこか降りたから。
一車両丸々貸切状態。

そこでようやく、まゆちゃんが来てくれた。

今日は、最初の頃と同じゴスロリ調の服。

そんな格好で、隣にちよこんと座ってくれたんだけど。
脚、真っ直ぐ伸ばして、きちんと揃えてるんだけど。

白い靴下と黒い靴のコントラストが眩しくて。

それがまた、ね。

すっげー可愛い。

「見てた？さっきの」

俺がそう訊くと、まゆちゃん、こくんって頷いた。

ちよっただけ微笑みながら。

いや、これがほんとやべーの。

って、それはまあ置いておいて。

話進まなくなっちまうから。

「まゆちゃん、あいつと付き合ってたの？」

また、こくん。

あー。

これはちよつと妬けるわ。

事情知っちゃった今は余計。

「でも、あれ、ろくでもねーよ？」

また、こくん。

うんうん。

判ってたか。

そりゃそうだよな。

人間、見た目じゃねーって。たく。

「…んで。大学入ってから、ずっと、その…好きだったの?」

ここでもゆちゃん、初めて首を横に振る。

ううん、って感じで。

えっ?

ちょ、話違っただけど?

「あ、違っの?」

で、こくん。

うーむ。

何だか、yesno問題やってるみてー。

「…あのさ、俺、あんま頭良くないから。ここに書いて説明してくれる?」

そう言っつて、左手差し出すと。

まゆちゃん、こくんって頷いて。

右手の人差し指で、一生懸命字書き始めた。

まゆちゃんの話は、すごく判り易かったけど。

なんせ一文字一文字書くから、かなり時間がかかって。

結局、東西線の端から端まで往復することになった。

でも。

彼女の話聞いて、俺、ようやく納得がいった。
要するに。

最初はいいつのこと追っかけたい一心で猛勉強して、大学入ったんだけど。

途中から、別に好きな人が出来て。

その人を見かけて呼び止めようとした時に、誰かに後ろから押されて。

それで、ホームに転落したって。

相手が誰なのかは見てないし、わざとなのかも判らないって。
気付いたら、地下鉄から出られなくなってたんだって。

なるほどね。

人目を気にしながらも、俺はいちいち頷いて。

ようやく、何があったのかを理解したんだけど。

一つだけ、引っ掛かってることがあった。

そりゃあね。

乗りがかった船だけど。

フラれるのにもいい加減慣れてるけど。

こりゃあ男たるもの、一発ストレートに訊いておかなきゃなんない。
まあ。

大抵、予想通りの答えが返ってくるに決まってるし。

ぶっちゃけ俺、そーゆーの慣れてっから。

カラオケ行っても単なる頭数合わせだし。

合コン行ってもお笑い専門だし。

彼女いない歴19年だし。

ドーテーだし。

オタクだし。

秋葉チャンだし。

友達も兄弟も変人ばっかだし。
出身は旭川だし。

…それは関係ねーか。

でもさ。

やっぱ、訊かなきゃいかんでしょう。
なんで。

話が一段落したところで、勇気出して訊いてみた。
他のことはともあれ。

俺的には、一番興味のあること。
で。

相手が富樫か誰かだったら、速攻バス通学に変更しようって。
札幌にいるうちは、二度と地下鉄なんか乗んねーって内心決めたく
らいにしてい。

訊いてみたさ。

まゆちゃんに。

てかね。

俺もうその時点で、かなりフテ腐れてて。

とりあえず今度は、まゆちゃんの思い人探してやんなきゃなんねー
のになって。

本音言っと、あんまり訊きたくなかったけど。
訊いたさ。

こんな感じで。

「…ところでさ」

俺がそう言つと。

まゆちゃん、大きな目きよとんとさせて、顔上げる。
ヤバいつて。

マジ可愛いんですけど？

いや、ちよつと待て。

萌えてる場合じゃねーだろ？

「その、まゆちゃんが好きだった奴つて、誰？」

まだ、きよとん。

ちよつと小首傾げたぐらいにして。

ああ。

ヤバイ。

ヤバイ。

マジヤバイ。

どれぐらいヤバいかつて言うとマジヤバイ。

いや、だから。

そんなんどーでもいいんだよ！

「やつぱ、同じ大学の…」

そう言いかけた時。

まゆちゃん、突然笑い出す。

くすくすつて。

前傾姿勢になつて。

女の子がよくやるじゃん？

腹抱えて笑つてゐるつてのを示すあの仕草。

いや、それがまた萌えるんだけど。

つて。

どーでもいいっすね、それはこの際。

で。

まゆちゃん笑うから、今度は俺の方がきょとしちゃう。

え？

何で？

俺、何かおかしいこと言った？

内心おろおろしてる俺。

その手を、まゆちゃんはしっかり握ってくる。
笑い過ぎて涙ぐみながら。

で。

俺の肩に、ぽんぽんってする。

…へっ？

何これ？

そのぽんぽんって、何？

どーゆー意味？

てかこれ、どーゆー展開？

…えっ？

あ、何？

ちょ、待って。

あのー。

俺の右半身が、「ありえねー！」って絶叫してんですけど？
左半身は、「ネタにマジレスカコワルイ」って言ってるんですけど？

で。

まさかとは思いますが。

…つまり。

そーゆーこと？？？？

…でもさ。

俺、アホだけど、樂觀主義者じゃねーの。
だから。

まゆちゃんの反応見て、喜ぶのはまだ早いんじゃないかって思った。
だってさ。

まゆちゃんにそんなこと言われたら、今更引き下がれねーじゃん？
乗りがかった船どころの騒ぎじゃなくなるって。

あ、でもね

すっげー嬉しいの。

これは嘘じゃない。

滅茶苦茶嬉しいの。

まゆちゃんみたいな可愛い子に、惚れられてたなんて。

いや、惚れられては大袈裟だな。

とりあえず、いい印象持つてもらってたなんて。

それだけで俺としては、120パー達成したようなもんなの。

だってさー。

ちよい想像力を逞しくしてみてよ？

今まで、人に好かれたことなんかなかったのよ、俺？

郵便局のバイトすれば、犬に吠えられるし。

ボランティア活動で保育所行けば、赤ちゃんに大泣きされるし。

電車座れば、俺の両隣だけいつも空いてんの。

で、しょーがねーなーって座るのはいつつも、ばーさんかおっさん。

若い女の子なんか、半径5m以内に近付きやしねーし。

吊革掴まっても、しゅるしゅるって何処かに行っちゃう。

それくらい人気ねーのよ、俺？

だから、ありえないっしょう？

とはいえ。

沈黙してるのも何だから、話続けてみる。

てかさ。

まゆちゃんと俺、いつ会った？

何処で会った？

ぶっちゃけ、全然覚えねーんだけど？

まゆちゃんに好かれるようなことした記憶どころか、会った記憶も。

かなりテンパったまま、俺がそう説明すると。

まゆちゃん、につこり笑って続き書いてくれた。

【つどーむのコミケ、覚えてる？】

「はい？」

【あれに来てたでしょう？】

「あー、そう言えば。富樫に連れて行かれたんだよ。去年の4月だっけ？」

【そのあと、アニメイト行ったでしょう？】

「うーん、行ったなー。行った行った。ルルーシュのキーホルダー買った」

【その時のこと、覚えてない？】

「えー、どうだったかな？とにかく混んでたからな〜…」

って言いかけて

俺、ふと閃いた。

今更おせーよって感じだけど。

思い出したんだよね。

フルフルそっくりなエヴァとか、マジありえねーイヴとか。

顔がバイオハザードなコーネリアとか、そういったイタいねーさん達の中に。

一際可愛いゴスロリっ娘がいたことを。

なんで。

「——……………あーっ！……！！！！！！」

って。

思わず、叫んじまった。

近所迷惑顧みず。

周りの乗客お構いなしに。

そうだ！

そうだって！！

何やってんの、俺？

間違いないって！！！！

あの子だよ、あの子！

階段とこでグズぶちまけて、泣きそうな顔してた！！！！

富樫がそのあと2ヶ月ぐらい言ってたじゃん！
名前ぐらい聞けばよかったなあって！！

んーと。

でもって、そんな時……

俺……

何したっけ？

えーとね。
確か…

それ…拾ってやったんだっけ？

@
@
@

まゆちゃんが話した通り。
あの日俺は、富樫と一緒にコミケ行って。

帰りにアニメイト寄って、いろいろ買って。

Yellowでスープカレーでも食って帰るかあ？　なーんて話しながら。

何の気なしに、階段下りてた。

その時。

如何にもアキバって感じの兄ちゃんが、凄い勢いで駆け込んできて出ようとしてたコスプレ集団と見事にぶつかった。

でもって、先頭にいたゴスロリっ娘の袋、叩き落としちゃったんだけど。

その中身が、がばーと路上に散らばったんだけど。

そいつ何故かあとずさりして、アーケード街を猛ダッシュ！

まあ、ね。

顔と体型がかなりヤバい連中揃いだっただから、相当ビビったんだろう。

俺だってビビったくらいだからさ。

でもさー。

最強のコスプレ嬢達が、それを許す訳がねー。

「ちょ、てめー！」

「待ちなさいって！！」

「謝れ、このオタク野郎があっ！」

って叫んだかと思うと。

もの凄い勢いでそいつを追っかけたもんだから。

あとに残されたのは、大量のキーホルダーをぶち撒かした女の子。相手が相手だったもんで、かなりの勢いで弾き飛ばされて。

広い歩道の真ん中まで散らばっちゃったんだ。

「すみません、すみません…」

なんて小声で言いながら、彼女、一生懸命拾い集めてるけど。だーれも、見向きしないんでやんの。

そーゆーところ、結構冷たいんだよね、札幌のヒトって。所詮都会だからなあ。

俺と富樫は、目を見合わせた訳。

「…どーする？」富樫は、メンドーなことは嫌いなタチ。「ほっといても大丈夫だよな？」

「何言ってんだ。手伝うべ！ 男として」

「だよな。手伝うよな普通？」

「…てか、お前どんだけ変わり身はえーの？」

と、結局ゴーインに手伝わして。

さっさとキーホルダー拾いに明け暮れた。

彼女、長めの金髪カツラかぶってるもんだから。

顔までは、はつきりと判んなかったけど。

フリルやらレースやらついた黒い服から覗く手足が、びっくりするぐらい細っこくて。

誰かに踏まれたら、ぽきんって折れちゃいそうな感じだった。

てか、あるじゃん？

見た目というか、雰囲気というか。

スタイルだけですでに、可愛いオーラ発してる子って、まさにそんなタイプの子だったんだけど。

俺、それほどディープなオタクじゃなかったし。

こっいう子と付き合ったら、ちょい大変かもなんて思ってた。

だつてさ。

富樫の元カノとか、大塚の今カノもそうなんだけど。

アニオタだったらもう大変。

一日中、らきすたやらハヤテやらひぐらしやらの話熱く語られて、プラス。

やおい萌えの腐女子だった日には、目も当てられねー。

そんなんで。

その時はホント下心抜きで、純粹に手伝ってた。

女の子一人でこんな量買うの半端ねーとか思いながらも。

で、全部拾い終わってから。

俺と富樫は、ゴスロリっ娘にそれ全部手渡して。

揃ってるか確認してっついちおー言ってみた。

「あ、はい。大丈夫です。ありがとうございました」

なんて言いながら、ぴょこんって頭下げられた日には。

こりゃもう腐女子でも何でもいっかーなんて妄想がアタマ掠めていたんだけど。

そこはほら、ヘタレな乙女座Bだから。

いや、こんな可愛い子が彼氏いねーとかありえねーって判断して。例えいなくても、俺となんか絶対ありえねーって解釈したんで。

「じゃ、そーゆーことで…」

なーんつつてカッコよく別れる筈が。

長い前髪の下から見えるちっちゃな唇が、すっげー可憐で。

それに見とれてた俺、前から来たおっさんにがつつりぶつかった。

いや、それがでけーでけー。

アレックス・ルイ・アームストロング少佐も真っ青って感じ。

しかも見るからに、関西からの観光客。

背後にいるおばさんも、真っ赤やら真っ金色やら。

あんなド派手な服、道民はまず着ねーもん。

「何処見て歩いとんじゃー！ ボケー！」

つて。

そのおっさんに、すっげー勢いで怒鳴られて。

俺と富樫、文字通り飛び上がったさ。

「すいません！ すいません！」

つて叫びながら、ソッコー逃げた。

あ？

カッコ悪いって？

だよね。

実は俺もそう思う。

だから、二度と振り返れなかったの。

ゴスロリっ娘の方。

恥ずかしくて。

みっともなくて。

そりゃそうでしょ？

振り返れないっしょ？

無理ですから、このシチュエーション。
何処までお笑い系なんですか、俺。

そんなんで。

俺の記憶からは、その辺が見事にデリートされてたって訳。

せつかくいい感じでクリア出来そうだったのに、最後に痛恨のミス
って感じだったから。

多分、思い出さなくなかったんだろーし。

思い出すこともなかったと思う。

まゆちゃんに、そのこと言われるまでは。

記憶が戻った頃、電車は丁度新さつぽろに着いて。そこから再び折り返す。

ラッシュ時間も過ぎたせい、人は少なくなってきた。

その間も、俺はずっとまゆちゃんと手を繋いでた。

他の人には見えないと思うけど。

俺はちゃんと感じてられたから。

彼女の温もりとか、息遣いとか。

西28丁目を過ぎると、車両はがら空きで。

まゆちゃんは再び、俺の隣にそつと腰を下ろす。

静まり返った車内。

真つ暗な窓の向こうからは、地下鉄独特の走行音が聞こえてくる。

あの、うとうとううとうううんって感じの奴。

それが仮にがたんごとんって音だったら、こんなに寂しくはないんだろーけど。

やっぱり、ね。

そんな話聞いちゃったらす。

判らなくなっちゃったよ。

この件に関して、どうリアクションするべきなのか。どうフォローしていったらいいのか。

それで。

俺、どうしたらいい？

これから彼女と、どう接していったらいいんだろう？
だってさ。

まゆちゃんがどういう訳か、俺のこと覚えててくれて。

好意らしきものを持ってくれて。

それ聞いた時は、馬鹿みたいに舞い上がったけど。
よくよく考えたらさ。

彼女あの日、俺に声掛けようとして。

事故かどーかは判らねーけど、その結果線路に落ちて。
つまり。

まゆちゃんが死んだの、俺のせいってことじゃん？

俺とあの日会わなかったら、こんなことにはならなかったんじゃない？

そんなんで。

さっきまでのテンションは何処へやら。

俺、がつり落ち込んだじゃった。

だから。

今更言うなって突っ込まれそうだけど。

知らなきゃ良かったかなーなんて、無責任にも考える。

RPGなら、リセット効くけど。

セーブポイントからやり直せるけど。

俺が後悔したって、まゆちゃんはもう生き返れないし。

何もしてあげられない。

目の前にいるのに。

こうやって、傍にいるのに。

なーんにもしてやれないの。

それが、一番悔しい。

誰もいない車両の中。

ユーレイさんと二人きりなんだけど。

不思議と、怖いとは思わない。

まゆちゃんが可愛いからか。

俺がそーゆー体質なせいか判んねーけど。
とりあえず、怖くはなかったけど。

何だか、すっげー寂しくなった。

まゆちゃんいるのに。

そこにいるのに。

俺のこと、好きって言うてくれたのに。

生まれて初めて告ってくれた相手なのに。

幾ら何でも、ユーレイとは付き合えねーって思ってる自己中な自分がいて。

夢だったらいいのになんて思ってるヘタレな自分がいる。

…やだ。

何かやだ。

俺、サイアクじゃね？

サイテーの人間じゃね？

俺にしか、まゆちゃん見えねーのに。

まゆちゃんには俺しかいねーのに。

他の連中はみんな、一方通行なのに。

さっきのヒロアキみてーに。

でもさ。

俺、夢だったの。

好きなコと、手繋いで歩くの。

ガキっぽい夢かもしれないけど。

大通公園とか、ポプラ並木とか。

一緒に飯食いに行ったり、買い物したり、映画行ったりしたかったの。

彼女が俺のアパートに来て、泊まっていてくれたりだとか。

週末には何処か遊びに行ったり。

この19年間。

そーゆー、トシ相応の夢ばっか見てたのよ。
なのに。

何で、こんなことになるんだろう？

好きじゃなきゃ簡単。

俺、いつだっていいヒトで終われるタイプ。

本気で好きになった相手だとしても。

大体どーゆーことになるか、想像はついてる。

尽くして、貢ぎまくって、捨てられるんだって…
てか。

どんだけネガティブなのよ、俺？

そんな風に。

一人でぐちぐち悩んでる俺の手を。

まゆちゃんは、そつと掴んでいてくれる。

あれから何度も確かめてみたけど、左手も普通にあって。
少なくとも、俺にはちゃんと見えてる。

だとしたら。

あのカバンの中の手は一体何なんだろう？

そんなことを考えてる間に。

電車はホームへ滑りこむ。

本日何度目かの西28丁目。

やれやれ。

もう、何回往復したかも覚えてねーぞ。

そこでふと力才上げた時。

俺、やっと気が付いた。

まゆちゃんが、おっきな瞳にいっぱい涙溜めてて。

それが、ぼたぼた胸元に落ちてることに。

え？

何で？

何でまゆちゃん、泣いてるの？

おろおろする俺の手に、彼女が書く。

子供みたいに、手の甲で涙拭いながら。

【ごめんね】って。

ちょ、待つて。

何で謝るの？

何もしてねーじゃん？ まゆちゃん。

謝らなきゃならないようなこと。

何も悪いことしてねーし。

誰にも迷惑かけてねーのにさ。

…てか。

もういい。
もう、いいよ。

もういいから。

判ったから。

ここでしか会えなくていい。
ユーレイでも何でもいいよ。

そう思ったら。

俺、完全に、抑え効かなくなった。
やべーよ。

さっきも言っただけど。
好きじゃなきゃ、何の問題もないんだって。
気持ちがあるから、こんなに苦しくて。

こんなに辛いつて感じる訳で。
だから。

勇気を出して、まゆちゃんのこと抱き締める。
もういいから。

泣かなくていいから。

俺、何とかするから。

どうにかするから。

だから、泣かなくていい。

…てか、ぶっちゃけ。

泣きたいのは、俺の方なんですけど？

@ @ @

「——…馬っ鹿じゃねー？」

…とは、富樫の弁。
そう。

俺、よりによって、こいつに相談しちゃった。

あーあ、やっちゃった。

ミスミス。

痛恨のミス。

ドラクエ5買って、3日かかりで攻略した時。

セーブするの忘れて、ラスボスに倒されてさ。

あれほど自分の間抜けさ加減を呪った日はないと思ってた。
けどね。

俺もまだまださ。

あるのよ、これが。

その時以来の大ボケが。

大通公園のミスドで、奴と向かい合いながら。
カフェオレ飲みつつ俺、溜め息ついちゃった。
だつてさ。

それはねーべ？

いきなり、馬っ鹿じゃねーって。

お前一体何様よ？

「ぜってーやめた方がいいって！」奴は、三つ目のポン・デ・リングを頬張った。「やべーって！」

「そうか？」俺は、オールドファッション派。「やべーかな？」

「何か最近ヘンだと思ったら、そういうことだったのか」

「あのな。お前にヘンとか言われたくねーし！」

「いや、でもないわー、それ。マジありえねー」

「何言ってるんだ。オタ研究会の分際で」

「オタじゃねー。オカルト！」

「似たよーなもんだべ？」

「全然ちげーし！」

「まあいいや。これ食ったら帰るべ？」

「はっ？ 何で？」

「人選を激しく誤った。お前になんか相談するんじゃないかった」

「あのねえ三国ちゃん」奴は時々、気味の悪い呼び方をする。「ひとつだけ言っていていい？」

「そう言う奴って、大抵、ひとつじゃ済まねーんだけど？」

「あらかじめ用意した答えを相手に期待するってのは、相談って言わないんじゃない？」

「……」

「俺じゃなくても、皆同じこと言うと思うけどね？」

「……」

「まっ、でも。最終的には、お前が決めることだから」

「……」

「俺なら諦めるか。じゃなきゃ、どうしたらいいか、まゆちゃんと直接話し合っただろーな」

「でもさ。泣かれるんだよ。それってまずくね？」

「うーん。涙は女の最大の武器だからな」

「だから、どうしたらいいのか考えてたんだけど」

「……てかさ。いっぺん、北見まで行ってきたらいいっしょ？」

「はっ？」

「その手。返して欲しいって意味じゃねーの？」

「ああ。手な」俺は、傍にあるカバンをチラ見する。「……てかさ。お前には見えてねーじゃねーの？」

「それ実家に持っていったら、別なアイテムが貰えるかもよ？」

「アホかお前？ ゲームじゃあるまいし」

「ま、いつから。そんなに気になるなら、線香の一本でも上げてくれば？」

「……」

そう言ったあと。

横を通り過ぎようとしたねーさんを、富樫は素早く掴まえて。カフェオレのお代わりをねだる。

そういうとこだけは、抜け目ないんだよな。でもさ。

いきなり知らない人ん家行くの？
それってヤバくない？

俺がそんな疑問をぶつけると。

富樫はまたげへげへ笑った。

「大丈夫だって。同じ大学なんだし。何とでもなるんじゃない？」

「まーな。確かに……」

「それにしてもさ。何でまたよりによって、地下鉄のユーレイなんか好きになっ——」

「こら、馬鹿っ！ 声でかつ！」

奴がいきなり、そんなこと言うもんだから。

俺は慌てて、富樫の脚蹴っ飛ばす。でも。

あいつの声、かーなーりーでかいもんで。
向こうにいる家族連れが、ちらつと振り返り。

隣のカップルが、怪訝な力オしてる。

あー、もう、すんません。

変人なんすよ、こいつ。

あ、俺？

俺は違いますから。

一般人ですから。

ごくごくノーマルですから。

ユーレイに恋してるそこ除けば。

でも。

今回の富樫は、一味違つてて。

妙に正論ばかり吐きやがる。

だから。

俺もそうしようかなって思った。

とりあえず、まゆちゃんの家行つて。

線香の一つも上げないと。

なんて思ったりして。

あ。

でもさ。

この手、どーする？

ナマモノじゃねーけど、保存状態はいいし。
でも俺以外には見えてねーみてーだし。

うーん。

とりあえず…

ピンクのリボンでもかけておくかい？

アホ富樫と別れてから、もっかい地下に潜ったんだけど。どーゆー訳か、大通駅はいつも混みまくり。

三越前にたむろってる学生やら、フーゾク勧誘要員のイケてない黒服メンやら。

そついう連中に背を向けて、黙々と階段を下りる。

南北線のホームは、なるべく行きたくなかった。

まゆちゃんが轢かれた場所だから。

東西線に乗ると、彼女はすぐに現れて。

にこにこしながら、俺の隣にちよこんと座る。

今日は、如何にも女の子っぽい格好。

ふんわりした袖のブラウス。

パフスリーブちゅーの？

その下に同系色のピンクのキャミ着てる。

ボトムは、細身のジーンズとピンクのサンダル。てかね。

最初のゴスロリも、制服も勿論いいんだけど。

こういう格好がまた似合うんだ。

でもって、すっげー可愛いのに。

それだけに。

誰にも自慢出来ないのが、ちと辛いんだよなあ…

今日は用事があったんで、デートは短めに。

しかーし！

こういう時に限って、電車は嫌がらせみたいに混みやがる。それでも。

まゆちゃんと同じ場所にいて、人目を盗んで筆談したり。

そーゆーのがすっげー楽しいの。

他の連中には多分、見えてないと思うけど。

キョドってるようにしか見えないと思うんだけど。

でもね。

何てゆーか、俺、見てるだけでいいのよ。

少なくとも、今の時点では。

全く。

小学生カップルが、仲良く手繋いでコンドーム買ってるこのご時勢に。

どんだけ純情なんですか、俺？

てか、どんだけ女のコにメンエキないんですか？

そんな自分に思わず笑っちゃったりもするけど。

最初のうちはやっぱ、戸惑ったりもしたけど。

いろんな煩惱捨てきれずにいたりもしたけどね。

何かね。

もうどーでもよくなった、そーゆーの。

俺の姿見つけると、まゆちゃん、すっげー嬉しそうな顔して。

どれだけ混んでも、近くにいてくれる。

たまには例の裏技發揮して、人払いしてくれたりもするんだけど。

彼女の笑顔見てるだけで、俺、何も要らねーなって思ってた。

まゆちゃんが喜んでくれるなら、それでいいやって思うようになった。

富樫に言わせれば、ばっちри憑依されてる状態らしい。

そのうち、精気吸い尽くされるぞ？　って脅しやがる。
ったく。

牡丹灯籠じゃあるめーし。

宮の沢から折り返して、西28丁目へ。

ここで今日はお別れってことになる。

まゆちゃん、寂しそうだっただけ。

俺のこと思って我慢してくれてる。

不思議なんだけど。

そーゆーのって、言葉にしなくても判るんだ。
だから。

また明日って思いつつ、ホームから手を振った。

電車はみるみる小さくなる。

まゆちゃん乗せたまま。

バスターミナルのところに出て、北欧パンでパン買って。

東急ストアで惣菜買って。

それからぶらぶら歩いてアパートへ帰る。

カバンの中には、例の左手があるけど。

全然重さは感じなかった。

てか。

むしろ、前より軽い気がするんだよね。

アパートの郵便受けには、相変わらずゴミばっか。

ピンクチラシには目もくれず、道新だけ抜き取って階段を上がる。
とはいえ。

俺もまあそのお年頃なんで。

前はそーゆーのにも興味あったりしたんだけど。

やっぱね。

なんかの歌詞じゃねーけどさ。

愛がなくなちゃいけないーと思っただ訳よ。

あー、そこのお客さん。

引くとこじゃねーから。

俺、乙女座Bだけど。

基本ヘタレだけど。

こっつ見えて、結構真面目なのよ？

ベッド脇のバスタオルの上に、ちっちゃな手を置いて。

それからテレビ点けて、はねトびかけて。

こたつに座って統計学のレポート書いたりするんだけど。

どーも、集中出来ねーの。

まゆちゃんの寂しそうな才思い出すとき。

あと一往復ぐらい、付き合ってたやれば良かったかなって。

そう思ったりもするんだけど。

でも、それだと俺、絶対4年で卒業出来ねーし。

そしたら速攻かーちゃんに絞め殺されるし。

うーん。

どうしたらいいんだ？ こーゆーの。

なんせ、初めてだから。

ぶっちゃけ、何が何だかで。

どう接したらいいのか判んねーんだよね。
くそ。

誰か教えてくれねーかな。

なんて考えてた時。

ふと気付いたんだ。

バスタオルの上にある、例の左手。

軽く閉じられた指の中に、何かあるってことに。

…。

……。

あのー。

さすがにこれ、やばくない？

てかさ。

やっぱ、開いて見なきゃダメ？

…てかさ。

もう怖いのがしっと思ってたのに。
せっかく安心したのに。

俺、また、涙目なりそーなんだけど？

@
@
@

軽く閉じられた指。
そいつを、一本一本めくっていく。

…。

…ごめん。

やっぱ、無理。

少なくとも、夜は無理。

俺には無理。

だって。

確実に、何か出るフラグが立ちそーで。

そんなん出たら、卒倒しちゃうかもしんねーし。

でもって、救急車とか来ちゃうかもしんねーし。

…考え過ぎ？

だよな。

考え過ぎだよな。

…でも。

やっぱ、明日にしょーっと。

そんなんです。

ヘタレ通常モードに戻った俺、ふつーに風呂入って。

ふつーに飯食って、ふつーにゲームやって。

それから、寝ることにしたんだけど。

まゆちゃんの手を枕元に置いておくのが、ちょっとだけ怖くなった。

冷たい奴って思っしょ？

でもさ。

実際問題として、皆さんが俺とおんなじ立場になったとしたら。半透明の手首から先が、枕元にあるのって。ちよっと怖いと思いませんか？

俺もガキン時からこーゆー体質で。

他の人よりはかなりメンエキあると思うんだけど。

それなりに、経験値もあると思うんだけど。

やっぱね。

怖いもんは怖いし、気味悪いもんは悪い。

まゆちゃん全然怖くないし、むしろ好きなんだけど。

それとこれとはちよっと違うんよ。

てかね。

大分前に兄貴と話したことあるんだけど。

人間って、丸ごといるのは別に怖くないんだよ。

死体でも何でも、多分、それほどじゃないと思う。

ところがね。

あれが何故か、パーツになると怖いんだわ。

人が倒れてるのは、大丈夫かな？ って見ちゃうけど。

手とか足とか指とかが、その辺にごろんって落ちてたらどーする？

びつくりするっしょ？

スクリームするっしょ？

元ネタは同じなんだけどね、確かに。

パーツはいかんよ。

あれは駄目。

例えばさ。

ロツカーに小指とか入ってたなら、俺、その場で即死する。

確実に死ぬ。

それくらいこえーのよ。

どうしてかは知らんけど。

なんて言い訳をいろいろしながら。

俺、ようやくベッドへ潜り込む。

うとうとしてから、どれくらい経っただろう。

レムをうろろしてる段階で、はっと目が覚めんのよ。

どうも気になって。

まゆちゃんの手のことが。

いや。

駄目駄目。

明るくなってからにすればいいんだから。

そう自分に言い聞かせてみるけど。

やっぱ気になって仕方がないんだわ。

だから。

1時間ぐらい悶々としたあとに。

俺、完全にギブ。

だから。

ベッドから抜け出して、取りに行ったんだ。

台所のテーブルに上げておいた、可愛い左手を。

それは同じ場所にまだあつて。

置いた時と同じように、軽く握った形のままだった。

それを、下に敷いたタオルごと、そつと持ち上げて。

ゆっくりと部屋に運んでいったんだ。

さすがに、まゆちゃんも寂しいのになつて。

そんなこと思いながら。

しかし。

俺のやることが、すんなり行く訳ないんだな。

案の定、途中でけつまづいて。

転びはしなかったけど、爪先がつりぶつけちゃった。

あまりの痛さに、一人でぴょんぴょんしてたら。

まゆちゃんの手から、何かがぼろりと落ちた。

…はっ？

何これ？

何この展開？

恐る恐る、それに近付いてみたけど。

ころころ転がって、テレビ台の下に入っちゃった。

あーあ。

何やってんのよ、俺？

でもさ。

今更自分のアホさ加減をぐだぐだ言ってもしょうがないんで、
定規突っ込んで、何とかそいつを引っ張り出してみる。

ごそごそ。

ごそごそ。

かちん。

よし、取れた。

グッジャブ、俺。

1年分の埃ももれなくついてきたけど。

で。

あらためてそいつを、確認してみる。

いや。

引っ張り出した時点で、確認はとっくに済んだんだけど。
もっかい見直してみる。

…。

……。

うーん。

何だろう、これ？
どう解釈すべき？

うん？

結局何だったのかって？

それがね。

ケロロ軍曹のキーホルダー。

しかもね。

鎖が切れて、本体部分だけの奴。

…あのー。

まゆちゃん。

一体、これをどーしろと？

「あ、それなー。俺んだわ!」

なーんて富樫が言うもんで。

俺、一瞬、椅子から転がり落ちそーになった。
はあ?

何だよそれ?

「ドム子に貰ってケータイに付けてたんだけど。いつの間になくなっちゃってたんだよね」

「それって、かなり前の話だろう?」

「うん。なくなったのに気付いたのも相当前」

「……」

「で、それがどーした?」

「いや、別に……」

そう言いかけて、軍曹をポケットに入れようとしたら。
富樫の奴、げへげへ笑いながら手え出しやがる。

「返せよ」

「いや、要らないべ?」

「とりあえず返せつて。呪いかかっているかしんねーから」

「呪いとか言う？ お前、ほんつと失礼だよな？」

「まゆちゃんが握つてたもんなんだろう？」

「そうだけど。だから何か、意味があんじゃないかなって…」

「あ、それ、アレだ。彼女、俺に気があつたんじゃね？」

「ありえねー」俺は、きっぱり言つてやる。「それはないわー」

「オカルト研に来たのも、ひよつとしたら三国じゃなくて、俺目当てだったんかも？」

「ねーし！」

「何で判る？」

「まゆちゃんは、俺に惚れてんの！」

「だから、何でそれが判んのよ？」

「……」

「ちゃんと告つたのか？」

「……」

「それとも、ちゃんと告られた？」

「それはとりあえず」

「サイアクだな、お前」富樫は、ずずずずずとアイスラテを飲む。「女に告らせるか、フツー？」

「サイアクな奴にサイアク言われる筋合いはねーよ」

「ちゃんと訊いてみ。でもって言葉で伝えてみ。お前が本気ならさ」

「……」

「……って訳で、今回もお前の奢りね」

「はっ？ 何言ってるの？」

「いつつも俺にばかり愚痴ってくんじゃん？」

「愚痴ってる訳じゃねーよ。至極健全な世間話だろーが！」

「ま、いつから」と、手を出して。「軍曹返せよ」

「……」

高級感溢れるスタバの店内で、軍曹片手にあーだこーだ言ってる。かーなーりー場違いな雰囲気のアキバ系二人。

中国福建省出身の貧乏旅行者って感じの富樫と。

チエック柄のネルシャツにデイパック背負ってる俺。

ああ。

俺としたことが。

「またもや人選を誤ったぜ…」

「ところで三国、経済学出んの？」席を立ちながら、富樫が言う。
「あれ、まともに出欠取ってるぜ？」

「うわ、マジで？」

「マジマジ。そろそろ出ねーとマジヤベーよ？」

「しゃーねーな。出てやつかあ」

そう言いかけて、デイパック背負った時。
俺は見ちまった。

富樫がゴミ箱に、軍曹捨ててるの。

「ちよっ！ テメーツ！！ 今何やった？」

思わず叫んだ俺に対して。

富樫はきよとした顔を向けてくる。

「いや、だって、要らねーし？」

「ばっ！ あれはまゆちゃんが大事に持ってたものじゃねーの？」

「でも元々俺のもんだし？ 留め金壊れてっから、もう付けられねーし？」

「アホっ！ だからって、捨てることねーだろー！！」

と言いつつ、ゴミ箱のドア開けて。
紙コップやらストローやらに手え突っ込んだ。
幸い軍曹はそんな奥まで落ちてなくて。
何とか、探し出すことが出来たけど。
ほっとして手を引っこ抜いた俺。
気付いちまったんだ。
周囲のおねーさん、おにーさん。
おじさん、おばさん。
ママさん、お子様の冷たい視線に……

あーあ。

俺、またやつちやった？
やつちまった？

駄目なんだって。

まゆちゃんのこととなると、フツーに理性がぶっ飛ぶんだって。

てか。

アホ富樫の暴挙のせいで。
もう完璧、痛い子フラグ立ったな…

@ @ @

アホ富樫を大通にポイ捨てしたあと。

フツーに地下鉄に乗る。

てかさ。

皆さん、お忘れかしんねーけど。

俺、いちおう、大学生だから。

たまにはガッコ行かなきゃいかんのよ。

階段下りて、南北線の麻生行きに乗るとすぐ、まゆちゃん来てくれる。

今日は、ごくごくフツーの格好。

しましまのパーカーにピンクのTシャツ、ジーンズ生地のスリムスカー
ート。

でもね。

これがまた可愛いんだわ。

俺、にやにやしちゃう。

けどね。

他の人から見たら、単なるヘンタイだわ。

でも。

北17条で電車降りようとしたら、まゆちゃん悲しそうな顔するから。

今日はごめんって、両手を合わせた。

これだって、他の人から見たら単なる頭おかしい奴になる訳で。案の定、周囲のリアル女子は俺をじろじろ見てやがる。

あー、マジうぜーよお前等。

ドムみてーな体型してる分際で。

足に大根標準装備しやがって。

悔しかったらそれ、取り外して見せろってーの。

とりあえず今日は真面目に講義出て。

それから、カテキョのバイト行く。

今受け持ってるのは、中二女子と高一男子、高二女子。

やったことある人は判ると思うけど。

これが結構タイヘンなのよ。

…ん？

何気に女子比率高くない？って？

冗談言っちゃいけませんよお客さん。

ロマンスなんか生まれようのない方々だから。

こー見えて俺、仕事は仕事って割り切るタイプだし。

女子というよりは、量産型ザクに近い方々だから。
妄想すら出来んのよ。

で。

バイト終えて電車乗ったら、もう22時過ぎ。

ぐったりして座席に倒れこむと、まゆちゃん来てくれる。
うん。

何ていい子だろう。

24時間、俺のこと見ててくれてんの。

でもって。

いつも通り、終電ぎりぎりまで往復する間。

俺、ふと思いついて。

ケロロのこと訊いてみようと思って。

カバンの中に手、突っ込んでみたんだけど。

…。

……。

あれ？

…ない。

いや、あるって。

富樫から回収したんだもん。
あんな恥ずかしー思いして。

あるって。

ある筈…

…。

マジで？

うっそ。

失くしちゃった、あれ？

ケロロはイレギュラーじゃん？

しょっちゅう持って歩くもんじゃーねーべ？
だから、まあ、しょーがないんだよ。うん。

なーんて。

一人でうんうん納得していると。

まゆちゃん、ヘンな顔して俺のこと見てる。

そりゃそうだよな。

俺だって引くわ、フツー。

で、ようやく本題。

煤けたケロロを、まゆちゃんに見せてみる。

でもって、訊いてみる。

単純明快な俺らしく。

実にシンプルに。

「これってさ。まゆちゃんが持ってたの？」

そのケロロ見た瞬間。

彼女の顔が、ぱーっと明るくなった。

でもって頷く。

うんうん！ って。

だから。

引き続き、俺、訊いてみる。

「…で。どうしたの、これ？」

そう言っと。

彼女、俺の左手取って。

一生懸命書き始める。

俺が予想もしてなかったことを。

【これ、落としたでしょう？】

「うん。そうらしいね」

【あの時、アニメイトの前で拾ったの。三国くんのだと思って取っておいたんだけど】

「…あ？」

【それからずっと、返さなきゃって思ってた。今度会った時】

「……うん」

【でも、大学でも電車でも、すれ違ってばかりで。やっとあの時見かけたから】

「……」

【それで】

「……」

【声かけようと思って。そしたら】

そしたら。

その言葉の続きを、まゆちゃんは書こうとしたけど、手は、ぴたりと止まってしまふ。

その瞬間。

俺は珍しく、神的な勢いで空気読んだ。

てか。

考えなくても判ることだけど。

だから。

恐る恐る、先を促した。

「そしたら…その時に」

で。

何て言おう？

この先。

いつか。

いつも通りストレートで。

「電車が、ホームに、入って来た、…ってこと？」

俺がそう尋ねると。

まゆちゃん、口の端きつと結んで。

おっきな目、俺に向けて。

うん、って頷いた。

…。

……。

まゆちゃん。

ちげーし。

そこからしてちげーし。
そもそも。
これ、俺んじゃねーし。

でも、返そうとしてくれたんでしょ？
俺のこと見付けて。

そう思った時。

俺、思い出しちゃった。

あの朝のこと。

混んだ地下鉄で揉みくちゃにされながら。

他人事みてーに、反対のホーム眺めてたこと。

あの時、まゆちゃんはあるところにいて。

俺に気付いて、声かけようとして。

どういう訳か、ホームに落ちて。

そのまま……

…。

……ほらみる。

俺、もうちょっとで笑っちまいそーだったけど。
笑わなくて良かった。
何でケロロだったのか。
何で俺だったのか。
でもって。
何であの朝だったのか。

謎は全部解けた。

解けたよーな気はするけど。

はあ。

ちよっとこれ、あんまりじゃねー？

このあと俺、どんな風にフォローしてったらいいの？
正直に言う？

あ、悪い。

これ、俺んじゃねーんだわ。

富樫のなんだわって。

このせいで、彼女事故に遭ったのに。

でもって、死んじやったのに。

そのせいで、こんなところにさまようことになって。

俺のこと、ずっと覚えててくれたのに。

なあ、それ。

その事実。

まゆちゃんに言える？

…あのね。

俺がいつくらアホだとしても。

鈍感だとしても。

乙女座Bだとしても。

アキバちゃんで、天然ちゃんだとしても。

…。

……。

言えっかヴォケーツ!!!!!!

@

@

@

さてー。

どうするよ？

どうしよう、俺？

隣には、おっきな瞳で俺を見上げるまゆちゃんがいる。
その手は、しっかりと俺の手握ってる。

えーと。

これはその、アレだよな？

謝らなきゃいけないフラグ立ってるよね？

いや。

ほんとなら、俺のせいって訳じゃないんだろーけど。

いやいや。

やっぱ、間接的に俺のせいだけど。

とゆーことは。

やっぱ、謝るべきだよな？

そんなんで。

軍曹握り締めたまま、溜め息ついて。

それから、こう言ってみる。

「要するに、その…」

ん？ って。

まゆちゃん、首を傾げる。

なあに？ って感じの顔して。

「ごめん。俺のせいで、こんなことになって…」

んん？ って。

まゆちゃん、まだ首傾げてる。

どーゆーこと？ って感じの顔して。

「つまり。これを俺に返そうとして。ホームに落ちたってことじゃないの？」

ぶんぶん。

まゆちゃん、激しく首を振る。
で。

再び、慌ただしく、筆談再開。

【お願いだから謝らないで。三国くんのせいじゃないよ】

「んなことないって。俺のせいだって」

【そんなつもりで言ったんじゃないから】

「いや、そんなつもりとかじゃなくて。俺が直接関わってなかったとしても、流れとしてはそうじゃん？」

しゅん。

まゆちゃん、俯いちゃう。

やべー。

ちよつと言い方きつかったかな？

「あの。別にまゆちゃんのこと、責めてるつもりないし。事実としては、そーゆーことだったんだなって……」

しーん。

まゆちゃん、無言。

うわー。

どうするよ？

しかも。

電車は空気読まずに駅着いちゃうし。
でもって空気読まずに乗客来ちゃうし。

だから。

まゆちゃんはすつと席外して、いつもの位置に立つ。
俺に背中向けた状態で。

周囲には大勢の客。

おっさん、おばさん、コンパ帰りの学生、その他もろもろ。
しかも、これ終電で。

西18丁目も円山公園も、あつと言つ間に過ぎちまつた。
あと一駅で西28丁目に着いちまつ。

ピーンチ！

なぐんで焦ってるうちに、あつさり電車はホームに滑り込んで。

俺はよろよと席を立つ。

だつてね。

小樽の兄貴なんかもうクソの役にも立たねーし。

さすがに、宮の沢から歩いて帰る元気もねー。

そんなんで。

俺、諦めた。

まゆちゃんには悪いけど。

明日出直すわ。

そう思ってたら。

ホームに下りる直前になって。

まゆちゃん、くるって振り返った。

で。

俺の手に、おやすみって書いてくる。

だから。

俺、咄嗟に言つちまつた。

も一度説明するけど。

周りには、大通から乗ってきた大量の酔っ払い。そんな中で。

何もない空間に話しかけるのは、マジ勇氣要るんだけど。まゆちゃんはまだユーレイじゃねーから。

少なくとも俺にとっては。

もう、いい加減にあしらえる相手じゃねーから。なけなしの氣力振り絞って、こう言ってみる。

「まゆちゃん！」

その瞬間。

自動改札に向かった酔客、一斉に振り返る。

マジうぜー。

こっち見んな。

「俺のことなら、氣にすることねーから！」

電車、走り出す。

中の学生、くすくす笑ってる。

くそ。

呪われるテメーら。

「明日、ちゃんと話すから！」

頷きながら手を振るまゆちゃん乗せたまま。

電車、ついに見えなくなる。

足を止めてた暇人も、そろそろ歩き出す。

で。

俺もターンして、そいつらについて行こうと思ったんだけど。
そこで初めて、ホームにいた車掌がガン見してたことに気付いた。
げっ。

何見てんだよっ！

なるべく目を合わせねーよーに、歩いてみたんだけど。

おっさん、くすくす笑ってる。

全く、どいつもこいつも。

いつか、呪いかけてやる…

「学生さん。飲み過ぎたかい？」

おっさん、にこやかに声をかけてくる。

俺、シカト。

自動改札まで、あと少し。

あと少しなんだって。

「いやいやいやあ、めんこいね！ 手と足一緒に出てるって！」

…。

……。

…ねーわ。
それ、ねーわ。

てか。

おっさん、何でそれを先に言わないの？

定期出しながら。

くすくす笑いのリーマンに囲まれて。

俺、すでに涙目なんですけど？

超恥ずかしいんですけど？

そっからまた歩いて、部屋まで戻んだけど。
俺は落ち込み継続中。

だって、しゃーねーべ？

言うしかねーべ？ あのシチュエーション。

でないとまゆちゃん、明日までずーっと一人でいるんだし。
一人で悶々としてんだし。

幾ら相手がユーレイさんだからって。

俺のせいで、そーゆー思いさせたくねーし。

中途半端なまま、終わらせたくねーし。

中途半端だったとしても、余計なこと考えさせたくねーし。
だから、しゃーねーのよ。

ああするしかなかったの。

でないと俺の方が悶々としちまうもん。

明日地下鉄に乗るまでの間、ずーっと。

途中にあるコンビニ寄って、カップ焼きそばと牛乳買って。

アパート帰って、鍵開けて、電気点けて。

念のため確認に行くと、例の手はまだそこにあった。

半透明のまま、ちょっと握り加減の状態で。

最初見た時はかなりビビったけど、今はそーでもない。

これが、まゆちゃんの手だって判ったし。

悪いことしないって判ったし。

夜中に動き出したりしないってことも判ったから。

台所でお湯沸かして、カップ焼きそば作って。
ふと思いついて、窓ハンド（仮名）をタオルごと移動する。
テーブルの上にそれ置いて、焼きそば食いつつ眺めてただけ。
見れば見るほど、シユールな感じ。
うーん。

あらためて思ったけど。
俺って意外と、ユーレイ耐性あんのな？

それにしても。
ケロロの件、どうしよう？

とりあえず、俺のだってことにしておけばいいんだろうな。
一番波風立たん方法ってことで。

そーだ。
そーしよつと。

飯食い終わってから、シャワーして。
明日の予習はとりあえずほっといて、ベッドに潜り込む。
窓ハンド（仮名）もいちおー、枕元に移動して、と。

電気消したあと。
横向きの状態で、その手眺めてただけ。
何だか、胸がずきずきした。
これって何だ？

罪悪感？
まゆちゃんにウソついてることの？

いや、ちげー。

まゆちゃんが、俺のせいで事故に遭ったってこと。

その事実に対する、何ていうか、やりきれなさっての？

何だか、すっげーもやもやするんだけど。

そのもやもやを上手く説明出来ない自分にイラッとしたり。

ほんと。

知らなきゃ知らないで俺、恐らく、一生面白おかしく生きていけるタイプなのに。

明日のバイトのことぐれーしか、心配しなくて済んだ筈なのに。やれやれ。

何でまたこんなことに巻き込まれちゃったんだろう？

…なぐんて思ってるうちに。

いつの間にか、寝ちゃったらしい。

でもっていつの間にか、夢の中にいた。しかも。

誰かの記憶を辿ってる感じの夢。

言いたかねーけど。

これってさ。

多分、まゆちゃんの記憶だ。

@ @ @

夢の中で。

俺は、東西線のホームに立ってる。

周囲には、沢山の人。

丁度混む時間帯っばい。

で。

俺はずっと俯いて、黄色い線と睨めっこしてんだけど。

ふと開いた左手は、何だかちっちゃくて。

自分の手とは思えなかった。

ピンク色のカバンには、いろんなキーホルダーがついてて。

その中から何故か、ケロロを外す。

でもって。

俺はそれを、ずーっと眺めてる。

周りがやけにがやがやしてきたことにも気付かずに。

それから、視線は向かいのホームに向けられて。
そっちにも人がいっぱいいる。

リーマンやら、学生やら、その他大勢。
そのうち、新さっぽろ行きの電車が来て。
そこからも、そろそろ人が降りてくる。
中身も大体同じ。

リーマンや、学生みたいな若い連中。

最初俺は、そいつらをぼーっと眺めてたんだけど。
あるところで、視線はぴたりと止まって。
それから、デジカメみてーにズームする。
ホームを歩いてるのは、二人の大学生。
小さくてよく見えねーけど。
左側の背の高いのが…

あれ？

ひょっとして、安西か？

あの朝たまたま、同じ車両で出くわした。

だとすると、その隣って…

…。

……。

あれ？

ヘインズの白Tに緑チェックのネルシャツ。
垢抜けねーぼさぼさ頭に、505のジーンズ。
靴紐の解けたナイキのスニーカー。

…。

うー。

マジかよ。

あれ、俺じゃん？

ってことは、これは…

っと思ってたら。

俺、何故か歩き出す。

俺が向かってる方へ。

多分、追いかけようとしたのかな？

途中の連絡通路のあたりまで。

そこへ。

電車が入りますのアナウンス。

俺、まだ歩いてる。

俺の方ずーっと注視しながら。

そこへ。

向こう側から、誰かが走ってきて。

突然、ふわりと体が浮いて。

そのまま、背中から叩きつけられて。

向こうから、眩いライトが迫ってきて。

車輪が強烈に軋む音がして。

うわ、ヤバいつ！ って目を閉じた瞬間。

不意に。

出し抜けに、記憶はなくなった。

てか、戻ってきた。

安穩とした俺の朝に。

平和極まりない俺のベッドの中に。

そんなん。

目は覚めたけど。

イヤってほどぼっちり覚めたけど。

そこまでせんでもって感じで覚めたけど。

俺は起きる気力もなくなつて。

ひたすら、ぼーっとしてた。

やっぱりなつて気持ちと、嘘だろう？　って気持ちのまま。
ぼーっとしつつ、天井眺めてた。

妙な夢ん中で、あらためて判つたことだけど。

まゆちゃん、俺にあれ渡そうとして。

じゃなくても、何とか声をかけようとして。

つまり。

俺の推論は、ぼっちり当たってたってことで。

あー。

どうしましょう？

どうしようかしら？

このめくるめく罪悪感を。

ちげー。

この前代未聞の凹みっぷりを。

でもって、どうしよう。

ケロロと、この手と、まゆちゃんと。

まだ、アイテム全部揃ってねー気がするけど。

はあ。

また最初っから、考えていかなきゃいけねーなあ…

翌朝。

クソ重たい気持ちのまま、アパートを出たものの。

さすがに地下鉄に乗る気にもなれなくて。

バス乗り継いで、ガッコへ向かう。

ん？

ヘタレだつて？

言うなよな。

判ってんだから。

そんなんで。

講義もまるで上の空。

そりゃそうだよね。

あんな夢見ちゃったら。

幾ら乙女座Bでもさ。

オタクでも、秋葉ちゃんでも。

さすがの俺も、そう簡単に立ち直れねーもん。

で。

こんな時に限って、お約束のよーに富樫が来て。

お約束のよーにサークルに誘われる。

あー、ウザ。

でもまあ、今回は付き合ってみた。

UFO 討論とか、魅惑のユーレイ・スポットとか。

つまらない話に、思いっきりつまんなそーな力オしてみせて。

それでも。

一人部屋にいて悶々としてるよりは、随分とましな気がした。
何てーか。

俺もまだ、心の準備出来てなくて。
頭の整理もついてなかったから。

で、19時過ぎ。

ようやく、オカルト研もお開きになって。
俺と富樫、ふつーに地下鉄に向かった。
その時。

あいつ、こんなこと言いやがる。
いつもみたいに、げへげへ笑いながら。

「そーそー、三国ちゃん。知ってた？」

「何が？」

「本田まゆの件。続報あるんだわ」

「ほお」

「俺のおじさん、ケーサツにいるんだけど」

「へえ」

「あれからずっと調査してるのに。どうやっても、見つからないもんがあるんだって」

「ふーん」

「事故の直後。他のは全部見付かったらしいんだ」

「全部？」

「そう。一個だけ、パーツが足りないそうです。どーゆー訳か……」

地下鉄へ続く廊下を、いつも通り降りながら。

俺、テキストに聞き流してた。

どうせ富樫の話だし。

ろくな情報じゃねーし。

そんな風にしか思わなかった。

次の台詞聞くまでは。

「左手だけ、まだ見つかってねーんだって！」

@ @ @

富樫の言葉聞いた途端。

俺、吹っ飛んだ。

間違いなく吹っ飛んだ。

何がつて？

そりやもう、いろんなことが。

こういうの、何て表現するんだ？

冷水を浴びせられたとか？

頭の中がマツシロに？

いやいや。

そんなもんじゃねー。

完全にゼロ。

思考能力ゼロ。

エポケー状態。

だつてさ。

あんまりじゃん？

そんな偶然の一致いらんし。

てか。

俺、今日、家帰れるのか？

まゆちゃんとともに話せるのか？

しっかりばつちり固まつてる俺を見て。

富樫はまたげへげへ笑ってる。

気に食わねー。

ほんつと気に食わねー。

何が一番気に食わねーって。

こいつに先手打たれたのが、とにかく気に食わねー。

そんな俺の気も知らず。

奴はにこにこ笑いつつ、俺の肩どついてくる。

「やだなあ。なーにショック受けてんの？」

「ショックなんか受けるかアホ！」

「またまたあ、三国ちゃんったら。顔色悪いぜ?」

「うつせーな。悪くねーし!」

「俺には見えなかったけど。お前の持つてる奴、ひよっとしたらホ
ンモノかもよ?」

「……」

「てか、ちゃんと冷蔵庫に入れておかないと」

「……」

「これからもっと暑くなるから。鮮度落ちちゃっつよ?」

「……」

富樫の不穏な忠告を。

あいつのネタを信じた訳じゃねーけど。

俺はとりあえずバイトとか何とかテキトーな理由作って、あいつを
巻いて。

麻生のバスセンターまで黙々と歩いた。

ジーンズのポケットに手突っ込みながら。

朝見た夢、それと、なくなっただまの左手。

導き出される答えは、幾つかあるけど。

結局、俺が何かしなきゃいけない雰囲気
でないと。

まゆちゃんは一生、あそこに掟われたままで。
一生、地下鉄から出られない。

てか。

偶然かわざとか判んねーけど。

彼女の死に、誰かが関わってるのは確かで。

どういう事情があったのか知らんけど。

そいつは結果的に、まゆちゃんを見殺しにした訳で。

幾つぐらいで、何やってる奴かもはっきりしないけど。

犯人は、平然とここで生活してる訳で。

今も多分ふつーに地下鉄に乗ってる。

自分がしでかしたことを、すっかり忘れて。

まゆちゃんがいることにも気付かずに。

そう思ったら。

やっぱり、腹が立ってきて。

やれることは全部やってみようと思った。

まずは、まゆちゃんと話すこと。

頭のおかしい奴だと思われてもいいから。

彼女と話す時間を作ること。

それと。

あの左手の謎を解くか、あれを北見に届けるかしないと。

あーあ。

何だか面倒なことになってきた。

これじゃまるで、RPGじゃん？

俺がどういう選択するかで、未来が変わってくるんだから。

俺の言動が、これからの全部に影響しちゃうんだから。

そう思うと、ますます気が重くなってきたけど。

しょうがねーよ。

うん。

しょうがねー。

やるしかねーよ。

俺にしか出来ないことなんだから。

俺しか、やってやれないことなんだから。

気持ちに整理のついたところで、麻生駅へ降り。

そこで、南北線を待つ。

これまでは考えたこともなかったけど。

空いてる時間の地下鉄って、何だか妙に寂しくて。

しんとしたホームは、どうも落ち着かない。

でも。

こんな場所に、まゆちゃんはいつもいるんだ。

電車が動いてる時も、そうでない時も。

いつつ、一人でここにいるんだ。

そんなことを思っている時。

電車が到着するってアナウンスが入る。

椅子から腰上げて、黄色い線のところまで歩いたけれど。

どういう訳か、ぐいと右腕を引かれた。

はっとして振り返ったら。

そこには、誰もいなかった。

でも。

俺の腕にははつきりと、誰かの指の感触が残っていて。

それに、ぞつとさせられる。
うわー。

気味わりーな、オイ。

イヤな気分には陥りながら、電車の方へ向き直ると。
その瞬間、視界が大きく揺らいだ。

え？

何？

何だこれ？

考える暇もなく、何処かに掴まる暇もなく。
俺の体は宙に浮いてる。

ホームの向こう側には、二つのライトが見え。
ぐんぐん、近付いてくる。

マジ？

やべーじゃん。

てか。

かなりやばくない、これ？

何が起こってるのか理解出来ないまま。

背中から、レールに叩き付けられて。

その衝撃で一瞬、息が出来なくなる。

これも、あの夢と同じ。

ブレーキが激しく軋む音と、飛び散る火花。
それに、誰かの悲鳴が交錯する。

あ。

俺、死ぬの？

死んじゃうの？
こんなところ？

てかさ。

まだ、何も終わってねーんだけど？

耳をつんざくブレーキ音。

それ聞いた瞬間、体は勝手に動いてた。

自慢じゃないけど俺、グラウンドセフトオートとか、メタルギアソリッドとか。

アクションゲーおたくなの。

だから、咄嗟に思い出したのは、こういう場合は横に飛ぶってことで。

ホーム下には、退避場所があるってことで。

セオリーに従って、そいつを右手で探って…

…。

……。

… 退避場所、ねーし。

影も形もねーし。

暗くてよく判んねーけど。

ここって、ただのコンクリートの塊っばい。

… 嘘だろう？

さわさわ。
さわさわ。

しつこく触ってみるけど。
ねーのよこれが。マジで。

いや〜ね、もう！

これって完璧、死亡フラグ？

でも。

命根性汚い俺は、まだ諦めない。

何とか、ホーム下の狭い空間にへばりつく。

前に友達から聞いたんだけど。

札幌の地下鉄って、鉄製じゃなくてゴム製の車輪使ってたって。

そいつに轢かれると、切断されるんじゃない、ぐしゃっと押し潰されるらしいから。

俺が幾らどMでも、そんな痛い死に方したかねーよ。

いや。

どんな死に方もしたかねー。

まだ、何もやってねーんだから。

何一つ解決してねーんだから。

これで俺までユーレイになっちゃったら、まゆちゃんはどうすんの？

一生、ここに閉じ込められたまま？

てか、俺はどうなの？

未永く幸せに暮らしましたとさって？

じょーだん。

俺にはまだ、やるべきことあんだから。
そう簡単にユーレイにはなれねーの！

なんて思ってる数秒間に。

電車はもの凄い勢いで近付いてくる。

風圧と恐怖のせいで、まともに息出来ねーし。
目も開けられねー。

怖い。

マジで怖い。

音怖い、振動も怖い。

周囲の悲鳴も。何もかも。

こんな恐怖を、まゆちゃんも味わったんだろーか。
それで。

何が何だか判らないうちに、死んじやつたんだろーか。
今の俺みたいに。

って思ってたら。

また、ぐいって腕引っ張られて。

今度こそダメだあって覚悟した。

くそ。

歯の根合わねー。

ちびりそう。

氣い失いそう。

痛いんだろーな、地下鉄に轢かれるのって。

てか。

こついうのって、賠償金とか損害金とか取られるんじゃないかっただけ？

1分間で50万とか？ 100万とか？

どーしよう。

うち、ビンボーなのに。

どうやってそんな金払うんだろう？

許せ、おふくろ。

怒るな親父。

妹はどうすっかな？

BL好きの腐女子ではあるけれど。

いちおーは悲しんでくれるかな。

で、兄貴は…

あいつのことは、考えたくねーな。
絶対笑うな。

うん。

間違いない。

バツカじゃねーの？　って、笑うなきつと。

…な〜んて思ってたら。

今度こそほんとに、腕がつしり掴まれて。
ホーム下に、わらわら人が降りてきた。
拳句の果てに。

「何やってんだ！」

「怪我ないか？」

「君！　早く出て来なさい！」

つて。

いろんな人から怒鳴られてんの、俺。

…へっ???

ふと見ると、電車は俺の鼻先で止まってて。
ホームにいたおっさんとか、にーさんとか。
有無を言わずに、俺を引っ張り上げてんの。
いやいやいや。

てかみんな、何処持ってるの？

「せーので上げるぞ！　せーのっ！」

って。

何だよそこの自衛官。

でもって車掌。

ライフセーバー気取り？

いや、サーセン。

何でもありません。

あざーす。

ご迷惑おかけしましたっす…

あ。

ちよっと待て。

痛い痛い！

そのオバサン、リュックごと引っ張らないで！

にーさん、ベルト持たないで！

その位置やばい！

マジヤバい！！

ちょ、見てみー？

いいだけ大事なトコに食い込んでるっしょ！

あああああ。

ちょ、待って！！

痛いって！

大したもんじゃねーけど、ちゃんと引つかかるんだって！
でもって、マジ痛いんだって！！

@ @ @

言いたかねーけど。

それからもう、大変な騒ぎ。

何が大変だったって？

そりゃもう大変もいいところ。

説明するのも大変なくらい。

大掛かりな救出劇のあと。

何処も怪我してないって言ったのに、誰も信じてくれなくて。

生まれて初めて救急車乗せられて、そのまま無理矢理入院させられ

て。

でもって、誰かが勝手に連絡したらしく。
おふくろと親父とワンセットで、旭川から飛んで来ちゃって。
ボコられるやらわめかれるやら泣かれるやらで、もう、わや。

あ。

わやってのは、北海道方言かな？

要するに、もうぐっちゃぐちゃのしっちゃかめっちゃか状態。

兄貴は案の定爆笑してるし、妹には頭はたかれるし。

関係者各位からは事情聴取されるし、怒られるし、説教食らうしで。
ほんとわやだった。

そんなん。

俺がようやく社会復帰した時にはもう、事故から3日も経ってて。
まゆちゃんとの約束、しっかりブッチしちまった計算になる。

あーあ。

明日ちゃんと話すって言ったのに。

どーするよ？

彼女、待ってたかもしれないのに。

俺のこと信じて、頷いてくれたのに。

全く。

やってらんねーぜ。

何でこんなことに巻き込まれたのか、よく判んねーけど。

結局、俺、嘘つきになっちゃったじゃん…

で。

いよいよ退院ってことになった時。

よせばいいのにうちの親、またもや旭川からのこのこやって来て。

俺を車に詰め込んで、ご丁寧にも、西28丁目のアパートまで護送する始末。

ん？

それって送迎じゃないかって？

ちつつ。ちげーのよ。

単なる護送。

またヘンなことやらかされないように。

別に、親心でも何でもねーのよ。

自分達がメーワクかけられるのがイヤなだけ。

基本的にうちの家族って、そういう連中だから。

「いやいや、ほんととここ、カビ臭いもんねえ！」

窓を開けながら、おふくろがばやくと。

基本的に空気読まないうちの親父、すたすた行つて閉めやがる。
てか。

病院いる時からこいつら二人、アホな会話ばっかして。

他の患者さんは爆笑してるわ、俺はマジで頭痛くなるわで。

出来るもんなら、他人の振りしたいくらいだった。

でもね。

運の悪いことに、俺、おふくろそっくりなんだわ。

ガキの頃から、戸籍謄本要らないねって近所のオバサンに笑われて
たんだわ。

しかもね。

うちのおふくろも乙女座B。

さらにね。

言いたかねーけど、妹もおんなじ。

兄貴は何故か獅子座O。

長男だから、いちおー考えたらしい。

てかさ。

考えたって、一体何をどう考えたんだよ？

ほんととイミフなんだけど？

五人家族のうち、三人が乙女座Bってどうよ？

どう考えてもおかしくね？

何だよこの家庭環境？

どんだけ計画的に子作りしたのよ、あんたら？

これで俺がまともに育ったら大したもんでしょ？

すっかりブルー入ってる俺に気付くこともなく。

親父とおふくろは、大声でわめき始める。

ああ。

もう知らねー。

絶対近所から苦情来るって！

「おとーさん！ なして窓閉めるのさ？」

「いーべや。寒いから」

「いくないっしょ！ 換気しないとダメだべさ！」

「したっけ寒いんだもの！」

「寒いんだら何か上に着ればいいっしょ？」

「ジャンバー、車の中だもの」

「ほんっときかないねー！　ちよっと、ヒロ！」

「あゝ？」↑俺、もうやる気ゼロ。「何？」

「おとーさん寒いって！　ストーブ点けて」

「ストーブ点けるだけ無駄っしょう？　窓開けてたら」

「ほんつとうるさいねー！　あんたまで逆らう気？」

「ここガスストーブしかないんだから。先月も北ガス値上げしたっしょう？」

と、抗議するも。

おふくろは基本的に人の話なんか聞かないから。

さつさと元栓開けて、ストーブ全開にしゃがる。

だったらいちいち人に訊いたりしないで、自分でやれって。

そう思いませんか？

そんなことはまあいいとして。

いや、ほんとはよくねーけど。

とりあえず置いといて。

久し振りに帰った部屋の中で、俺、何故か違和感バリバリ。

いない間におふくろが来たのは知ってるけど。

エロ本エロゲーの類がごっそり持ち去られたのも知ってるけど。

そのうちの80%が兄貴ので、15%は富樫のだから、俺は基本ノーダメージなんだけど。

でもってその手の回収品は、いつの間にか親父に回ってるってのも知ってるけど。

そういうんじゃないくて。

何かおかしいの。

何か足りないの。

そう。

何ていうか、いつもここにあった……

⋮

•
•
•
•
•
•
○

あゝ~~~~~つ!!!!!!!!!!!!!!

あれだ、あれ！

あ
れ
が
な
い
！
！

まゆちゃんの手！

なんで？

ねえなんで？
何処行つた？
何処消えた？

半ばパニックながら、台所へ駆け込んだ俺。

見ちまった。

まゆちゃんの手を乗せてたタオルが、いつの間にか洗濯されてて、
ふつーに干されてるの。

…。

……。

ちょ。

ねーわ、これ。
マジねーわ。
ありえねー！。

てかさ。
いっつも思っけど。

親って、頼んでもないのに。
何でいっつも余計なことばっかすんの？

もう、最悪なんだけど？

…で。

おふくろの余計なフラインプレーのお陰で、すつつつつつかり凹みモードの俺。

再び親父の車に乗せられて、暖龍に連れて行かれて。

黒酢豚やらあんかけ焼きそばやらつまんでみたものの。

どーも、もやもやして仕方がない。

でもね。

基本自分のことしか考えてねー親父。

珍しく、こんなスルーパスを出す。

「どうだヒロ、生ビール飲むか？」

やりい！

そう思った瞬間。

KYなおふくろ、すかさずカットに入る。

「ダメダメ！ 未成年なんだから！」

「別にいいべや。親同伴だもの」

「いくないっしょ！」

「じゃ、俺だけ」

「ますますダメだべさ！ したら帰り、誰運転すんのよ！」

「お前運転すればいいべ？」

「いやー、お父さん！　あたし運転したら、命いくつあっても足りないっしょや！」

アホ同士のカウンター攻撃がひっきりなしに続いてる間。

五目春巻をばりばりっど箸で割ってる俺。

それを黙々と口に運びながら。

もう何だかすっかり嫌気差してる。

テンション下がりがまくり。

防戦する気にも、応戦する気にもなんねー。

あーあ。

それにしてもさ。

あの手、何処行っちゃったんだろう？

てか。

まゆちゃんに、何て説明しよう？

「お待たせしましたー」

そんな声と共に。

可愛い店員さんが、テーブルの上に何か置いたから。

俺は腕組みやめて、薄目開けてみる。

何と。

目の前にあったのは、きんきんに冷えた生ビール。

それも二つ。

でもって。

そのうちの一つを、親父が手に取って。

美味そうに飲み始めたもんだから。

おっ！

親父、やるじゃん！

なーんて。

一瞬喜んで、俺も手を伸ばすが。

次の瞬間。

「あ、これ、あたしの！」

と。

まさかのマルセイユルーレット発動。

俺のビール。

おふくろにさくつと取り上げられちまった。

…マジで？

それ、ありえねくね？

「ちょ、待って！」俺、咄嗟に叫ぶ。「親父もおふくろもビール飲んでんじゃない！」

「んあ？」と、親父。

「だよ？」と、おふくろ。

「したら、今日の帰り。誰が運転すんのさ！」

「あんたに決まってるべ？」おふくろ、間髪入れず。「いやー、や

っぱ、労働のあとはこれだね！」

「これだねじゃねーよ。てか、誰が労働したって？」

「あんたの部屋。片付けてやったべさ？」

「どーでもいいーけど。何で俺が旭川まで運転しなきゃなんねーの？」

「いやいや。今日、あんたんち泊まるから」

「はあ？」俺、もう開いた口が塞がらない。「じょーだん。寝るとこねーし！」

「客用の布団、あつたべさ？」

「ちよつ、マジで？ マジで俺んとこ泊まる気？？」

「ここまで来たら諦めれ」親父が、ふおっふおっふおって笑う。「そーゆー運命なんだって！」

「何よその運命って？」俺、もう倒れそう。「いやー、やめようよそれ。頼むからホテル取ってよ！」

「あんたの入院費払って、すっからかんだもん！」と、おふくろ。

「別に好きで入院した訳じゃねーし！！」

「まあまあ。うちら、すすきの行くから。あんたそこまで送ってって。先に帰ってればいいべさ」

「…あのー。おたくら、ひょっとして観光しに来たの？」

「そりゃそうだべ？」と、親父。「高速代かけて来たんだから」

「当たり前っしょう？」と、おふくろ。「明日は、デパートで買い物しまくるべさ！」

あー、もう。

サイアク。

ちよつと油断してる間に、シュート入っちまってる。

しかも、ロスタイムなし。

いきなりの試合終了。

いくら肉親でもさ。

家主である俺の許可も得ず。

ビール飲むわ、すすきの行くわ。

それって、あり？

マジ頭いてー。

てか。

何この夫婦？

どうよこの展開？

どうやったらこんなに関々しくなれんの？

要らねー、こんな連携プレーー。

あー、やだやだ。

ぜってー、部屋帰りたくねー。

こんな連中と一晩いたら、マジで気が狂う。
ストレス溜まりまくる。

…。

……。

いつそ、ユーレイでも湧いてくれねーかな？

@ @ @

そんなんで。

アホ二人を、すすきのの交差点近くで降ろして。
その帰りにディスカウト・ストアへ寄って。
悔し紛れに、缶ビール一抱え分買っておく。

駐車場に車入れて、アパート戻って。

一通り、部屋ん中搜索して。

洗濯機の中からトイレの中まで見たけど、やっぱりない。
うわー。

どうしよう？

なーんて思いながら、ビール取り出した。
すまん、まゆちゃん。

とりあえず、俺の生還祝いつてことで。
一本だけ飲ませてちょーだい。

ブルトップに指かけて引き起こすと、ぷしっ！　て音がして。

これがまた何ともいえず美味そうなんだけど。
口をつけかけて、ふと気が付いた。

あいつらすすきのに置いてきたのはいいけど。
一体どうやって戻ってくるつもりだ？

…んあ？

ちよつと待て。

迎えに行くのも俺ってこと？

じょーだん。

あいつら、ザルだし。
底なしだし。

一週間に十日飲むって言われる連中だし。
そんなバケモノ相手に、付き合えるかってーの！

でも。

こう見えて、結構策士な俺。
ちゃんと手は打っておく。

どうしたかって？

小樽の兄貴に電話してみる。

あいつったら、根っからのすすきのソープ、いや、キャバクラフリークだから。

週末、部屋にいる訳なんかねー。

そう思っただけで直接ケータイに電話したら。

案の定、速攻出やがった。

すっげー嫌そうな声で。

「――あー、ヒロ？ 何？」

「いや、何ってあんた」俺、つい笑っちゃう。「あのさ、今何処？」

「”ナースステーション”」

「困った奴だな。今日も夜勤かよ？」

「金曜の夜は大抵夜勤だな」と、奴は堂々と言いやがる。「ちなみに明日も常夜勤」

「それにしてもさ。よくそんな金続くなあ？」

「そのために稼いでんのよ。パチとか競馬とか」

「てか、最近、そこばつかじゃね？」

「んなこたねー。ちゃんとローテーション組んでる」

「キューティーバニー」の亜里沙ちゃんは？」

「懐かしい名前だな。あんなとくにフラれ…っって、おい！
何の話だよ？」

「あ、そうそう。あのな、実は親父とおふくろ、そっちにいんだけど」

「はっ？」

「二人して来てんのよ。で、今、すすきので飲んでるんだわ」

「すすきの？ マジで？」

「うん。グリーンビルの前で別れたんだけど。まだ電話いつてね？」

「来てねーな。今んとこ」

「そっか。残念だな。あいつら、たまに抜き打ち調査しないとなつて。兄貴んとこ泊まる気満々だったよ」

「うわ、ありえねー！ マジやべーって！」と、いきなりおろおろします。「まずいつて、それ！」

「どっかで待ち合わせて、拾って来るしかねーよ。どうせ兄貴もタクシーで帰るっしょ？」

「いや、マジで洒落になんねーんだけど？」

「気持ちはいよく判る」

「てか、何で札幌にいんのよ？」

「俺、今日退院したから。手続きがてら観光に来たっばい」

「あーあ、最悪だな」

「確かに」

「てか、お前んとこの方が近いし！」

「そりゃそうだけど。兄貴、正月からずっと家に顔出してねーし。おふくろのお気にだし」

「そついう問題じゃねー。てか、わざわざ俺んとこ来なくても。お前んとこ泊まった方が早くね？」

「無理無理。そつちの高級マンションと違って。俺んとこ、二人も泊められるスペースねーし」

「客用の布団あんだろ？」と、同じこと言いやがる。「俺もついでに行くから」

「はっ？　ちょ、待って。何でそんなことになんの？」

「だって、考えてみるよ？　小樽までと、そこまでと。タクシー代とんだけ違うと思ってる？」

「いやいや、ちょっと勘弁してよ。兄貴だけならいいけど、あいつ

らは」

「あ、わりーけどもう切るぞ？ 時間もったいねーから。お前の時給よりたけーのよここ」

「だろーな」俺は、すんなり同意。「ERの安給料でよく通つてるよ」

「ERだったら余裕だろう。所詮俺はMR。センセの召し使い。タバコと言ったら火」

「火と言ったら灰皿、の世界な。判ってますって」

「ま、いつから。二人拾って、お前んち行くからさ。布団敷いて待つてろ！」

「あ、兄貴。どうせ来るなら、ついでに何かつまみ的なもんを……」

って言いかけた時。

電話はぶつとり切られちまう。

そりゃそうだよな。

高い金払って、女の子とお喋りしてる最中なんだもん。

俺だってキレル。

でも。

奴の焦りにつけこんだせいか、俺の裏工作はばっちり成功して。兄貴があいつら連れて、タクシーで来てくれることになったから。迎えに行く必要も、子守りする必要もなくなった。

そんなんで。

俺の任務はこれにて終了。

うるさいのが来る前に布団敷いて、シャワーして。

それからあらためて、冷蔵庫からビール取り出した。

きんきんに冷えた缶。

グラスに注ぐなんて野暮なことーしません。

そのまんま口つける。

すると。

しゅわーっと口元で細かい泡が弾けて。

冷んやりした液体が、さーっと体の中に落ちていく。

あー。

うまー。

サイコー。

めっちゃ幸せ。

これで、まゆちゃんの手さえあればなあ…

どんぐらいしてからだろう。

アパートの呼び鈴を、ピンポンピンポンピンポンピンポン連打する奴が現れたのは。

はう？

俺、ひよっとして寝てた？

で、モーローとしながらドア開けに行くと。

親父とおふくろ、兄貴の三人が、すっかりばっちり出来上がった状態が入ってくる。

「ただいまー！」と、親父がわめく。「おっ！ 廣明！ こまんだれぶー？」

「いやいやいやいや、すっかり遅くなっちゃったもんねえ！」と、おふくろ。

「何、お前寝てたの？」と、兄貴にデコ小突かれる。「いーよなー、学生さんはよお！」

「ちょ、待て、お前等」俺、ついに文句つける。「何時だと思ってる？」

「にじはーん！」

「いや、さんじだべさ？」

「判ってんなら、さつさと入って」俺はもう世界をひっくり返したい。「近所から苦情来んだけど？」

「はいはい。おっしゃー、寝るべ寝るべ！」

と、大トラ三人はもう收拾つかず。

俺は連中を放置して、自分のベッドに潜り込む。

客用の布団は台所に二組敷いておいたから。

とりあえず、安眠は妨げられずに済む…筈が。

「ちょ！ ヒロ！ これ、狭くね？」

兄貴が、大声で文句付けてくるから。

俺はもう勝手にしてくれモード。

「狭くねーって。全然余裕っしょ？」

「そつちに一組敷けばよくね？」

あー、マジうざい。

でもさ。

いいだけ陰で悪い遊びしまくってる兄貴のこと。

そーゆー後ろめたさとかがあるんじゃないの？

だもんだから余計、あいつらと一緒に寝たくないんだなと、俺は解釈して。

解釈したはいいけれど、俺もほんといっぱいいっぱい。

返事する気力もなく、バイバイと手を振ってみる。

言いたかねーけどね。

この時点で、俺のライフは見事にマイナスで。

久々のビールのせい、疲れのせい。

あいつらがぎゃあぎゃああと陣取り合戦やってる間に。
こてんと夢に落ちちゃった。

で、朝。

ベーコンの焼ける匂いで目が覚める。

…ん？

ああ？

ちょ、それ、俺の取っておき！！！！

慌てて飛び起きると、おふくろと親父、しっかり飯食ってて。
寝癖全開の俺見て、おはよーって手振ったぐらいにして。

ふと見ると。

兄貴は俺の部屋にすっかり布団持ち込んで、ぐうぐう寝てやがる。

あのー。

おたくら一体、何しに来たの？

でもまあ、人様に作って貰う朝飯は久し振り。

焼きあがったばかりのトーストに、黙々とバターを塗ったくりつつ。

俺は何度も欠伸を噛み殺す。

親父は俺の道新勝手に読んでるし。

いつの間に買い物してきたのか。

おふくろは、冷蔵庫に食材補充しながら話しかけてくる。

でっかい背中、こっちに向けたまま。

「ご飯食べたら、あたしら大通まで行ってくるから」

「はいよ」「もぐもぐ。」

「あんだ、一緒に行かないかい？」

「レポートあるし」「これは嘘。」

「いやいやいやあ、それは残念。服ぐらい買ってあげようと思ったのに」

「行きます」「きつぱり。」

「レポートは？」

「夜書くからいい」「あ、卵の黄身潰しちゃった。」「兄貴どーすんの？」

「叩き起こせ」と、新聞の向こうの親父が言う。「運転させるべ」

「いいけど。こいつ超寝起き悪いんだよね」

「取っておきの召喚呪文がある」親父は、あっさり言う。「まあ見てろ」

そう言うつと。

親父、新聞と老眼鏡置いて。

すたすたと、兄貴のところへ行く。

で、何事が囁いた次の瞬間。

兄貴、がばとはね起きて。

布団の上に正座して、ぺこぺこしている。
んん？

何だ何だ？
一体どんな手使ったんだ？

とりあえず、飯食い終わってから。

親父の車で、大通まで行くことになった。

アホ二人は相変わらずの夫婦漫才状態で。

俺と兄貴は、ずーっとな離れて歩くことにした。
で。

俺、ふと気になって。

兄貴に聞いてみる。

「タカ？」

「あん？」

「朝、親父に何言われた？」

「……」

「いつもグダグダの癖に。一瞬で起きたじゃん？」

眠たげに目を擦りながら。

兄貴は右手で、がりがり頭掻きむしる。

見るからに秋葉チャンの俺と違って。

兄貴は背はたけーし、見た目もそれなりだし。

製薬会社の営業マンだから、いちおー人当たりもいいんだけど。
病的な女好きがタマにキズなんだよね。

大通公園には、チューリップやら何やらが綺麗に咲き誇って。吹き上がる噴水の周りを、ガキ共が走り回ってる。

芝生の上には、家族連れがマット広げてるし。

ベンチには、いちゃこくカップルの姿。

そんなのを漫然と眺めながら。

兄貴は、でっかい欠伸をする。

「まあ、その、つまり。何だ」

「うん」

「これ以上キャバクラ通いが続くようだったら、小樽のマンション引き払うぞ？　って」

「はっ？」

「やだねー。わざわざ居酒屋で待ち合わせたのに。すっかりバレバレなんだもん！」

溜め息つく兄貴見ながら。

俺は、そりゃそうだよなと思う。

あんなだけ香水臭けりゃさ。

でもってこんだけ金使い荒けりゃさ。

親父じゃなくとも、バレるに決まってるだろー？

@ @ @

それから。

アホ三人と、延々行動を共にしてた俺。
ロイヤルホストで飯食って、ユニクロで服買って貰って。
夕方になってようやく、解散と相成った。

で。

先に兄貴を、すすきのの駐車場まで送ってったんだけど。
それ以降の同行は気合で拒みやがった。
そう言えば、今日も常夜勤だって言ってたもんなあ。
てゆうかね。

んなカネあったら、苦学生の俺に恵んでくれと言いたい。

体よく兄貴に追い払われたあと。

親父の車で、アパートまで送って貰う。

まゆちゃんには会いたかったけど。

きちんと話しなきゃとは思ってたけど。

あんなことのあとだから、さすがに地下鉄に乗るのは怖くて。

てか、珍しくおふくろがいきかせて、冬服とか持ってたやるって言ったから。

結局、その言葉に甘えることになったって訳。

「じゃ、どーもね」

とりあえず、服と飯の礼言って。

さくさく机に向かってからも。

おふくろはずっと、台所でごそごそしてる。

何やら、不穏な感じ。

「外食ばかりしてるんでないの？ 冷蔵庫空っぽだったよ？」

「あーい」俺、生返事。

「バイトちゃんとやってんのかい？」

「いちおー」

「あ、そうだそうだ。里佳さあ、来年、あんたとおんなじとこ受けるってよ」

「はっ？ マジで？」

「うん。もやしもんにハマってね。農学部行きたいらしいよ」

「無理無理。あいつのアタマで入れる訳ねーって！」

「でもさ。里佳がこっち受かったとして。二人してここに住んだら、うちら楽出来ただけど？」

「はあ？ じょーだん。せっかくの俺のシングルライフが…」

「あつ、そ。じゃ、仕送りは今年度分で打ち切りってことで…」

「検討の余地はあるかと」振り返りもせずにつづ。「前向きに善処いたします」

「…なんでそう変わり身早いの？」

「家系つしょ？」

「それもそっか」

「てか、俺、そろそろレポート書きたいんだけど？」

「あ、はいはい。お邪魔しましたあ！」

俺がそう言っただけで、ようやく腰上げてくれる。基本的に空気読まないヒトだから。いちいち、文句言わないといけないのがめんどい。

ところが。

大荷物持って、玄関に出たおふくろ。突然、こんなこと言いやる。

「あ、そーだ！」

「何？」

「あんたさあ。何かおかーさん達に隠しごととしてないかい？」

「いや、別に…」

「ほんとに?」

「うん」俺、ちょっと考える。「なんもねーよ」

「なら、いつけど」おふくろ、冷蔵庫を指差して言う。「ベッドに
ヘンなもん置かないんだよ?」

「全部回収したっしょ?」

「いやいや。ナマモノさあ」

「ナマモノ?」

「誰のか知らんけど。ラップしといたから」

「…はっ?」

「チルドに入れてあつから。早めに何とかしなよ?」

俺、一瞬沈黙。

何のことが全っ然判らなくて
でも。

ほんの数秒後。

びっくりして、大声上げちまう。
だつて。

だつてでしょ?

つまり、そーゆーことでしょ?

「え、ちょ、待って! 何のこと言ってんの?」

「タオルにくるんであったからさ。何かと思ったよ」

「あ、で、おふくろ、あれ見えるの？」

「見えなかったら気付かないべ？　こうやって喋らないべさ？」

「いや、そりゃそうだけど！」俺、ちょっとパニック。「何で見えるの？」

「なんも不思議じゃないって。見えるのってあんただけでないさ？」

「でも、これまで一回もそんな話…」

「あたしだけじゃなくて。里佳も見えんだ？　あんたの従妹の美奈ちゃんも。ふつーに」

「……」

「タカとおとーさんは見えない体質だけど。何でかねえ？　乙女座Bだからかねえ？」

「……」

「ま、とにかく。早く持ち主に返してやるんだ？」

「……」

「でないと、いつまで経っても成仏出来ないっしょ？」

なんて言いながら。

おふくろ、からから笑いつつ階段下りていく。
ボーゼンと、そのでかい背中を見送ってる俺。
それから慌てて冷蔵庫見てみる。
すると。

まゆちゃんの左手は、長方形の角皿にちやあんと乗せられて。
しつかりラップされた状態で、チルドに入ってた。
でもって。

これまた、非常にシュールな光景なんだけど…

…。

……。

かーちゃん。

なんてーか…

あんだ、ちよつとすごくね？

旭川台風が去った翌朝。

俺はいつになく早起きして、地下鉄駅へ向かう。

もうビビっちゃいられねー。

おふくろの（あてにならん）話によれば、ユーレイ部品の扱いは難しくくて。

鮮度もそんなにもたないみたいだし。

だとしたら、早目に返さなきゃって。

でも。

リュック背負って、階段駆け下りてる時も。

新さつぽろ行きの始発電車に、慌しく乗り込んだ時も。

俺ん中には、不安材料が二つばかり。

一つは、俺を突き落とした奴が誰かってことと。

そいつにまた襲われたらどうしようってこと。

もう一つは、この左手をまゆちゃんに返すとして。

彼女に直接渡していーもんか、判断つきかねる。

てのは。

もしあれが最終アイテムだった場合。

それでまゆちゃんがあっさり消滅しちゃったら。

俺のこれまでの苦労は一体どーなるんだろーと。

第一。

ユーレイの彼女は、五体満足な訳で。

あんなに渡して倒れられても困るし…

なぐんて思いつつも。

これは俺の勝手な推測だけど。

まゆちゃんはあれを俺に何とかして貰おうと思ってんじゃないかな。そもそも、カバンを調べてって言い出したのも、彼女だし。ってことは、まゆちゃんはある手の存在をもう知ってるってことになる。

で、それをどーしたらいいかについては、まだ全然話せてなくてだから。

眠い目擦りつつ、地下鉄乗って。

人のいない時間に、ちよつと訊いてみようと思ったのよ。

朝早いせいか、車両はさすがにがらんとしてる。

円山公園から登山靴履いた老夫婦が乗ってきたのと。

西18丁目から、くたびれたサラリーマンが乗ってきたのを除けば。大通までは、他の客は殆どいなかった。

見知らぬ連中が、入れ替わり立ち替わりしてる中。

俺は膝の上に、読みもしないマンガ広げたくらいにして。

i pod聴きながら、まゆちゃんが来るのを待つ。

バスセンター過ぎた頃。

ようやく、彼女の姿を見付けた。

最初はドアの向こうから、こっそり覗いてただけ。

俺に気付いてか、にっこり笑ってくれる。

すっげー嬉しそうな感じで。

なんで。

ややキョドリつつ、右手振ってみただけ。

彼女、小走りに駆けてきて。

俺の隣にふわっと座る。

フリーツの入った黒のミニスカ、黒のキャミ。
そして、白レース付きのニーソ。
で。

文句言う訳でも、怒る訳でもなく。
俺の方見上げつつ、腕組んでくる。
おっきな瞳、きらきらさせながら。

…あー。

ごめん。

俺、萌え死ぬ。

確実に死ぬ。

今日の任務もゼーんぶ吹っ飛んで。

なけなしの理性も、公共の福祉とやらも。

秒殺ないし、瞬殺されちまう。

でもね。

見とれてる暇はねーの。

俺、言わなきゃ。

相談しなきゃ。

ちゃんと話さなきゃいけねーの。

事故に遭ったこととか、チルド入りのブツのこととか。
そう思いながらも。

何だか、馬鹿みたいにどきどきして。

どきどき通り越して、もう何だか訳判らなくなっ

て。まゆちゃんの体、ひしと抱き締める。

車両に誰もいないのいいことに。

他の奴には見えないかもしれないけど。

腕の中にいるまゆちゃんは、すっげーリアルで。
いや。

俺にとっては、リアルな女の子そのもので。
今は、その何もかもが手に取るように判る。

ユレイだけど。

心音も、温もりも、ちゃんと伝わってくるし。

ユレイなのに。

俺はやっぱり好き勝手出来ない。

妄想や夢なら何とでもなる世界。

けど。

まゆちゃんには、まゆちゃんの意味があつて。

考えがあつて、感情があつて。

だから。

俺は好き勝手出来なくて、フツの女の子と同じ感覚で彼女と接してて。

接してるうちに、どんどん好きになって。

何度となくブレーキかけようとして、そのたびに失敗して。

自分でももう、どうしていいか判らなくなつてた。

ヘンタイだよね。

こういうのって、多分。

でも。

会いたかったんだよね。

ほんとに。

こんな風に。

二人っきりで、会いたかった。

俺、ヘタレだけど。

秋葉ちゃんだけど。

こんなの、ほんと初めてで。

まゆちゃんのこと、何とかしてやりたいって気持ちと。

彼女と離れたくないって気持ちがいっつもケンカしてる。

俺ん中で。

でもさ。

今は、まだ言わないでおかないと。

だってね。

やること、いっぱいあんだから。

惚れたはれた言う前に。

スキとかキライとか言う前に。

もう、バレバレかもしれないけど。

@ @ @

貸し切り状態の地下鉄の中。

俺がぎゅっとしても、まゆちゃんは嫌がらなくて。それどころか、しっかりと抱き締め返してくれる。

ヤバいって。

まずいって。

俺のどきどき、すっかりバレちまう。

てか。

こういう経験、これまでしたことねーから。

どういうタイミングで体離すのかも判らねー。

でもさ。

これって、ほんとのこと。

まゆちゃんの両手が、おずおずと背中に戻されてきたのも。

目を閉じて、俺の肩にこてんと頭乗せてきたのも。

首筋に感じる、ちょっと速い息遣いも。

多分、ほんとのこと。

気を失いそうなくらい緊張してるってのに。

俺、やっぱり、どうしていいか判らなくて。

しばらくそのまま、まゆちゃんのこと抱き締めてた。

前の時とは全然違う。

全く違う。

何だろうね、この感覚。

通じ合ってるというか、通い合ってるというか。

ぴりぴり、全身が痺れてくる感じ。

で。

俺もう、まともに息出来ない。

呼吸困難。

てか、誰か助けてくれ。

衛生兵、衛生兵！

そんな一人ボケ&ツツコミをしてるうちに。

まゆちゃんの方から、そつと体を離してくれた。

ちよつと名残惜しいなっで感じて、微笑みながら。

その途端。

俺もよーやく我に返って。

耳まで血が昇ってきちまった。

あ。

だよね。

長過ぎたよね。

幾ら何でも。

サーセン。

何せ俺、彼女いない歴19年だから。

秋葉ちゃんだから。

何もかもが未体験ワールドなもんだから。

どうも、引き際つてもんが判ってないのよ。

そんなことはあったけど。

俺は無事、まゆちゃんと話すことが出来た。

地下鉄で起きたこととか、例の手のこととか。

これまでのいきさつやら何やらを。

結構長い時間がかかったような気がするけど。

朝早いせいかもしれないけど。

何故かこの車両には、誰も乗って来ない。

他の車両には、ぼつぼつ人がいるもんだから。

ひよっとしたら、まゆちゃんが何かしてくれてたのかもしれない。

一通り話が終わると。

今度は、まゆちゃんがいろんなことを教えてくれた。

一番伝えたがってたのは、俺を突き落とした相手のことみたいで。

彼女自身、確証はないけれど。

そいつが多分、まゆちゃんを殺した犯人で。

他にも似たようなことをやってるかもしれないって。

「うーん」まゆちゃんを見詰めながら、俺は考える。「要するに、悪霊みたいなもんかな？」

彼女、こくんって頷く。

やけに真剣な力才したままで。

「じゃあ、また誰か襲われる可能性もあるってこと？」

俺がそう言つと。

まゆちゃん、突然指差してくる。

俺のデコに向かって、真っ直ぐに。

ん？

どーゆーこと？

俺、一瞬、どうリアクションしたらいいか判らずに。
その手をじーっとなんも見詰めたあと。
おもむろに、ぱくりとくわえようと…

ぱん。

まゆちゃんの、黄金の平手炸裂。

…ですよ。

イヤですよ、ふっ！。

ふざけ過ぎですね、俺。

調子こきましたね。

サーセン。

今度こそ、空気読みます…

とりあえず平謝りして、気を取り直してから。
俺はよーやく、まゆちゃんに向き直る。

「あ、ひょっとして…俺が狙われてるってこと？」

また、こくん。
げっ。

マジで？

「あーと…でも。何で、俺が、狙われなきゃなんない訳？」

まゆちゃん、手の平に書いてくれる。
大分慣れた感じで、さらさらっと。

【三国くんが、わたしのことを知ってるから】

「…ん？ どういうこと？」

【わたしとこうやって話して、死んだ時のいきさつなんかも、三国くんは知ってるでしょう？】

「うーん、ま、確かに。まゆちゃん、夢で教えてくれたし」

【そのせいで、生きてる人に、自分の存在がバレちゃったからだと
思う】

「いや、存在つつつてもさ。俺が誰かに言って歩いたところで、誰

も信じねーんじゃない？」

【それはそうだけど。でも、現実に殺されかけた訳でしょう？】

「まあ…言われてみれば、そうかな」

【助かったのは、運が良かったから。でなければ、同じようになつてたかも】

「……」

【三国くんを殺そうとしてるってことはつまり、あなたに勝てない何かがあるんだと思う】

「いや、んな訳ねーって。だって俺、別に靈能力者でも何でもねーんだし…」

そう答えながら。

俺、思い出しちゃった。

おふくろが言ってたこと。

代々三国家に継承されてる呪われた血。
オヤシロさまの崇りの何か。

いや、そいつはちょっとオーゲサか。
ひぐらしじゃねーんだから。

鬼ヶ淵伝説、もとい、乙女座Bユーレイ体質の謎。
最新の情報だと、俺の妹と、叔母さんと。

おふくろと俺の四人が、似たよーな系統らしいから。

…。

……。

まあ、要するに。

死に神なのか、自縛霊なのか判んねーけど。

あいつが標的にしてるのは俺なんだから。

何でか知らねーけど。

あいつが俺に脅威感じて、消そうとしてんのは確かなんだから。

好むと好まざるに関わらず、俺がやんなきゃダメってことだね。

俺が考え込むと、まゆちゃんも腕組みしちゃう。

眉根を寄せた力オがまた可愛くて、つい萌えそーになるんだけど。

さっきの失態思い出して、慌てて首を振る。

ダメだっちゅーの、三国廣明。

それより先に、やることがあんじゃん？

だって。

俺が幾ら零シリーズSランクでも。

リアルなユーレイ相手に一人で戦える訳ねーし。

まず、兵を募って、作戦練って。

話はそれからじゃねーか？

…ん？

兵なんか何処にいるんだよ、って？

いるじゃないっすか。

適役が。

毎回俺にメシ奢らせるヘンタイが。
歩くオカルト野郎が。

よっしゃー！。

この際、決戦の日は部員総動員して。
派手な祭りにしてやろうじゃん。

参謀は富樫、先陣は俺。

しんがりはサイキック牧田にやらせりゃいい。

あ、うん。

鋭いね、お客さん。

今のところ、俺にそんな権限ねーのよ。
部長でも何でもねーし。
何てったって、ユーレイ部員だから。

…って、洒落てる場合じゃねーだろ、俺。

あーあ。

てかさ。

ほんっと笑えねー。

でも。

やんなきゃ。

まゆちゃんの敵討ちするためにも。

俺、基本日和見だけど。

平和主義的秋葉ちゃんだけど。

やられっ放しってのは、どーも性に合わんのよ。

@ @ @

まゆちゃんとハグして、電車を降りてから。
俺はオカルト研の部室へ直行する。
で。

そのPC無断使用して、ポスター作ってみる。

さっぽろ地下鉄 オカルト探検隊

オプションル・ツアー：浄霊（巫女さん同行） 参加者募集中。

…うーん。

いかん。

今ひとつインパクトねーな。

いっそ、浄霊実演体験って形にした方がいいのかね？

なぐんで悩んでると。

突然背後から、何かがかぶさってきた。

「なーにやってんの？ 三国ちゃん！」アホ富樫の声。「おう、いいね！ オカルト探検！！」

「ちょ、バカっ！ びつくりさせんなよ！」

「珍しく部室に来たと思ったら。そんな企画立てたのかよ？」

「おうよ。たまには俺もアイディア出さなきゃって…」

「てか、お前。ついに地下鉄止めたんだって？」

「うつせーな。好きで止めた訳じゃねー！」

「その損害金700万だか1000万だかは、誰が出すの？」

「俺を突き落とした奴に決まってるだろ？」

「へっ？ そうだったのか？」

「目撃者もいるんだよ。で、現在調査中」

「なるほどな」富樫はまた、げへげへ笑う。「で、それと浄霊と何のカンケーがあんの？」

「まゆちゃんが言ってたんだ。地下鉄に巢食ってる悪霊がいるって」

「ああ、そうなんだよな」

「はっ？」

「有名な話だよ。お前、知らなかったの？」

富樫があっさりそう言いやるから。

俺はつい固まっちゃう。

ええええええ？

何だよそれ？

「これまで何度か、霊能力者に協力して貰ったんだけど。なかなか強力な霊らしくて」

「……」

「前に、どさんこワイドでも特集してたっしょう？ 見てないの？」

「…駅前30秒勝負と、星澤センセイの料理コーナーしか見ねーかな」

「ちょ、お前」富樫は、吹き出した。「何だよその組み合わせ？」

「ちなみに俺は森中さんのファンだ」って、言いかけて。「いや、ちげー！ そーゆー話じゃなくて！」

「幾ら三国がユーレイ体質だからって。お前の手に負える相手じゃ

ねーよ」

「でもさ。俺には最終兵器がついてんだよ」

「あー、例の巫女さんか？」

「そうそう。従妹の美奈ちゃん」

「いいねいいね。巫女萌え」

「…いや、だから。そーゆー話じゃなくて…」

「まあ、お前がそこまで言うなら、オカルト研としても協力してやらない訳にはいかねーけど？」

「へっ？ マジで？？」

「うん。部長に掛け合ってやるよ。伊藤さんもそーゆーの好きだから」

そう言つて。

アホ富樫はまたげへげへ笑うけど。

俺はまだそんなに樂觀してなかった。

だってね。

常時神様と交信してるせいかな。

美奈ちゃんは、筋金入りの変人で。

俺の言うこと、すんなり聞いてくれるとは到底思えねー。
だから。

まずは、人員を集められるだけ集めておいて。

最終兵器との交渉は、最後に回すことにしておいたんだ。

さて。

上手くいきますかね？この作戦。

でもまあ、ここまで来たらやるしかねー。

まゆちゃんのために。

さっばろ地下鉄を利用する全ての人のために。

秘密裏に、こそこそと。

出来るだけのことを、やってみるしかねーのよ。

その日。

講義終わってから、地下鉄乗って。

まゆちゃんに、ある程度話する。

対決するつもりだって言ったら、彼女びっくりしてたけど。
何か出来ることあるかなって訊いてくれた。

いって。

そんなん。

全然。

てか、気持ちだけで嬉しいから。

南北線も東西線も、思ったより混んでたんで。

今回はあんまり話せなかった。

けど。

まゆちゃんにも、覚悟みたいなものはあったらしくて。

彼女は彼女なりに、俺のこと考えてくれてたっぽい。

だから。

その気持ちに比べられるように、俺も頑張らないと。

男三国、いよいよ正念場だぜ。

名残惜しい気持ちはあったけど。

予定通り、西28丁目でまゆちゃんとバイバイして。

自宅に帰ってから、冷蔵庫覗いてみる。

チルドにはしっかりと、例の左手があったけど。

前より随分と、透明化が進んでるみたいだ。
ちょ。

ヤバくね？

これが消えたら、何となくダメな気がするから。
富樫に電話して、決行日を早めることにした。

「てか、三国ちゃん。どっちかってーと、平日の方が良くね？」

大事な打ち合わせだってのに。

たまたま夕飯時だったのか。

アホ富樫、ずーーーーーっとか食ってやがる。

「やつぱそうかな」怒るな俺。平常心平常心。「土曜の方が参加し
やすいかなと思ったんだけど」

「参加者はいーけど」くっちゃくっちゃ。「ギャラリーも多くなる
べさ？」

「まあなー」

「だったらいつそ、木曜の昼とかにしちゃったら？」

「俺、ガッコあんだけど？」

「あ、そっか。俺もあつた」くっちゃくっちゃ。「じゃ、終電間際
とか？」

「終電だったら、帰れなくなる人がいるんじゃない？」

「それもそうだな」くっちゃくっちゃ。「金曜の朝にすつか」

「俺はいーけど。杉本とか大丈夫かな？」

「あいつはああ見えて要領いいから」ずっ、ずずずずずずずずずび。「大丈夫じゃね？」

「…あのさ」

「あん？」じゅるじゅるじゅる。「なした？」

「お前、何やってんの？」

「何って」ぷはぁ。「カップラーメン食い終わって。ビール飲んでる」

「俺、真面目に喋ってんだけど？」

「うん」ずっ、ずずずずずずずずび。「だから俺も、真面目に答えてんだけど？」

「電話中に飯食つか、ふっー？」

「飯食ってる時に電話して来る方がおかしーべ？」

「……」

「それよか。巫女さんに連絡着いたのか？」

「…あ？」

「まさか、そっちのアポも取らないで、奔走してるんじゃないよな？」

「……」

「俺より先に、巫女さんに連絡すべきじゃねーの？」

「……」

「んじゃ、決まったら電話して」

そー言つと。

富樫、ぶちつとケータイ切りやがる。

かー。

くそー。

何やってんの俺？
マジム力つく。

そんなん。

今回は、俺のフライング。

不覚にも、一本取られちゃった。

あーあ。

ほんと、悔しーぞ。

@ @ @

そんなんで。

屈辱を押し殺しつつ、旭川に電話する。

出たのは、彼女のおかーさん。

つまり、俺の叔母さんに当たるヒト。

「あらあら、ヒロくん！ どうしてた？」

「あ、どうもです」

「札幌にいるんでしょう？ ちゃんとガッコ通ってるのかい？」

「あ、はい。いちおー」

「めんこい彼女出来たかい？」

「いや、多分まだです」

「多分？」

「で、美奈ちゃんいます？」

それ以上突っ込まれるとたまらないんで俺、ついにこう切り出した。

すると。

叔母さん、あっさり答える。

「あ、いるいる。今お風呂から上がったばかりだけど」

「はっ？ いや、じゃあ、あとでいいです！」

「大丈夫大丈夫。みなー！ みなー！！ ヒロくんから電話……！」

げっ！

マジで？

ちょ、やめてくんねー？

と、大いに慌てつつ。

その時点で俺、思わず妄想しちまう。
てのは。

前に何度か会ってるけど。

美奈ちゃん、ぶっちゃけ可愛い。

真っ直ぐの黒髪に、ぱっちりお目目で。

将来超美人になるに決まってる。

でさ。

あの力才で、巫女服なんか着られてご覧なさい。
でもって、みー？ とかわれて御覧なさい。

にぱーとか微笑まれて御覧なさい。

もう、俺なんか総崩れ。

心臓ワシ掴みだから。

「はい」

そんな俺の妄想をぶっちぎる勢いで。

電話の向こうから聞こえてきた不機嫌ヴォイス。

あ、

やべー。

何か知らんけど、めっちゃ怒ってるっぽい。

遅い時間だったからかな？

「あ、どもども。ヒロだけど」

「知ってる」

「……」めげるな、俺。「ごめんね、夜遅く」

「ふつーはないよ、この時間電話とか」

「メールしたけど、返事なかったからさ」頑張れ、俺。「で、ほんとごめん。風呂入ってたんだって？」

「うん」

「悪いけど、ちょい急用でさ」

「……」

「美奈ちゃん、今週あたり、遊びに来な——」

「やだ」

まさかの即答。

これも美奈ちゃんクオリティ。

いやいや。

ビビるな、俺。

いつものことだ。

「まー、そう言わずに。円山動物園でも、何処でも案内するからさ」

「興味ねーし」

「スイーツ食い放題とかは？」

「ダイエット中」

「あ、じゃあ。ビアホールでジギスカン食い放題とか」

「だーから、ダイエット中だって言ってるでしょう？」

「……」

「…黙ってんなら切るよ？」

「ちょっと待った。あの、アレだ。すすきのツアーとか」

「未成年なんだけど？」

「駅ビルで買い物ツアー」

「この前おかーさんに行ったから」

「あの、じゃあき。どうしたら来てくれる？」

「てか、何であたしが札幌行かなきゃいけないの？」

「それがちよつと、困ったことがあつて…」

「困ったこと？」

「うん。ぶつちゃけ、浄霊のお願いなんだけど」

沈黙。

そりゃそーだ。

「…美奈ちゃん。聞いてる？」

「聞いてるけど。ひょつとして、地下鉄の奴？」

「あ、知ってんの？」

「うん」

「マジで？」

「あれは無理だから。北海道神宮にでも頼んで」

「いやいや。そう仰らず」俺、もう必死。「お願いだから、助ける
と思つて…」

「やだ」

「まあその、そこを何とか…」

「やだ!」

「交通費とか、全部出すからさ」

「やだ!」

「判った。そっちまで車で迎えに行くから」

「やだ!」

「じゃあ、こうしよう」しゃーねー。最終兵器発動。「キャンパス・ツアー付けるから。それでどうだ?」

再び沈黙。

おっ?

いい感じじゃね?

「…もう一声」美奈ちゃん、ぼそつと言う。「何かない?」

「うーん。そしたら。新さつぱろのセルレでコスメ買い放題」

「乗った!」

よっしゃー。

これで、美奈ちゃん召喚完了。

てかさ。

女って不思議。

何でコスメで釣れた？

美奈ちゃん、小四なんだけど？

いよいよ、決行当日。

しかしこれが何故か、土曜日なんだな。
でもって、午前中なんだな。
というのは。

美奈ちゃんと叔母さんが、その時間じゃないと都合つかないって。
その週の始めに、こんなこと言い出したからで。

「ごめんねヒロくん、ついでだから、4プラとか寄ってみようかと思っ
て」

なぐんて言っ
て、叔母さん笑うから。
俺、断りようがない。

だって、スポンサー様だから。
悪霊祓いのために、娘連れて、わざわざ札幌まで来てくれんだから。
それぐらい、しょーがないっしょ。

「あ、勿論です」

「で、美奈もどっか見たいところあるんだって。だから出来れば、さ
つさと済ませたいのよ」

「はあ」

「午前中、地下鉄行つて。ちゃっちゃっと終わらせて。狸小路でラ
ンチしようか」

「あ、はい……」

「で、そうそう。ヒロんとも全員行くつばいよ?」

「…はっ?」

「うちほら、プリウス買ったんだ? したっけ、まだ遠乗りしてな
くってさあ」

「はあ……」

「札幌遊びに行くって言ったら、皆行く行く! って」

「……」

「…うん? ひょっとしてダメだったかい?」

「…いえ。今更ダメってことは…」

なぐんて言いながら。

電話切つてから、深々と溜め息ついちゃう、俺。

…あのさ〜。

皆さん、何か勘違いしてませんか？
今回の目的、何だと思ってる？

とはいえ。

美奈ちゃんがいなけりゃ、俺等の一回戦敗退は明らかかな訳で。
打ち合わせ通り、10時に大通に集合する。

俺はいちおう、美奈ちゃんが事前に送ってくれた霊水みたいなのを
頭にぶっかけて。

風呂上がりみたいな状態で、ポールタウン入り口に立ってた。
そこへ、続々と部員が集まってくる。

「おつ、吉野！」

「佐々木、見参！」

「南だよーん」

「いやいや、モッチー！ 久し振り！」

…ん？

和気藹々と盛り上がる連中をチラ見するなり、その異様さに気付いた俺。

だってね。

何故か女子は皆、巫女服着てるんだ。
で。

南や佐藤といった一般人クラスの女子ならともかく。

お前幾ら何でもそりや無謀だろう？　って突っ込みたくなる御仁まで。

あー、はち切れる。

巫女服がはち切れる。

ぱっつんぱっつんだってーの。

てか。

お前等それいつの間に揃えたの？

てかさ。

お前等全員、趣旨間違えてねー？

頭痛を耐えてたら、今度は背中どつかれた。

前のめりになりつつ振り返ると、そこには富樫がいて。

いつものリュック背負って、げへげへ笑ってる。

何かやな感じ。

「おう、三国ちゃん！　いよいよ決行だって？」

「まーな。やるしかねーだろ、こーなったら」

「じゃあ、俺はレスキュー班ってことで」

言いながら。

奴は何故かぶつといナイロンザイルを俺のベルトに通しやがる。

こら、こら！

何をする！！！！

「この前の例があっからさ。万が一、ユーレイに持ってかれたらまずいっしょ？」

「あのなー！ 犬じゃあるまいし。何だよこれ？」

「遅れてんな、お前。今は子供もこーやって繋ぐんだぞ？」

「ふざけんなっ！ 立派な人権侵害だろーがつー！」

「あーうるさいうるさい」奴は根負けして、ザイルを引っこ抜く。

「これだから法学部は…」

「ちげーしっ！ 俺は教育学部だっちゅーのっ！」

なんてぎゃあぎゃあ騒いでたら。

近隣住民から、冷たい視線をこれでもかと浴びせられちゃった。
てかね。

皆遠足気分だし。

合コンのノリだし。

終わってから何処に行くって話ですでに盛り上がってんの。

やれやれ。

どーする、三国？

こんなことになんなら、別働隊なんか集わずに。

美奈ちゃんと二人でやった方が良かったんじゃないの？

っーかさあ。

マジで、勝算ねーよーな気がしてきたんだけど？

だってね。

相手、ユーレイなのに。

まゆちゃんだけじゃなく、その他に何人も、罪なき市民を電車で轢かせてる奴なのに。

全国ネットにも公開された、由緒正しき悪霊なのに。

こんな状態で、あいつと対決出来んのか？
こんなんで果たして、あいつを浄霊出来んのかよ？

@ @ @

そんな感じでがやがやしてるところへ、真打登場。
リアル巫女的美奈ちゃんだ。
が。

彼女はごくフツウの格好。
ミニスカの下にスパッツ穿いて、ピンク色のＴシャツ着て。
あーあ。

巫女萌えの俺としては、早くも予想を裏切られたぜ。

「何がっかりしてんのよ？」気付いてか、美奈ちゃんは鋭い一瞥を
くれる。「わざわざ来てやったのに」

「いや、今日は巫女服着ないのかなーと…」

「あのさ。あれは仕事着なの。あんな格好で街歩いてたら、バカみ
たいでしょ？」

「まあね」

美奈ちゃんの見解はごもつとも。
しかーし！

そのバカが周囲に12人もいるこの状況ってどーよ？
てかさ。

お前等、大学生にもなってコスプレたあ情けねー。
少しは恥を知れ。

んなことを思つてると。

いきなり背後から、がしつと両腕掴まれた。

ぎよつとして振り返ると、そこにはでかい図体の二人。
あーんど、チエシャ猫顔の女子高生。

「いやいやいやいや、土曜ともなると混むもんね！」

「高速は空いてたけどね。駐車場なくて参ったわ！」

「おにーちゃん、いい加減髪切れば？ 相変わらずむさ苦しいんだから！」

などと、相変わらず空気読まないうちの両親。

相変わらず態度のでかい俺の妹。

プラス、美奈ちゃんの母。

つまり俺の叔母さん。

知床に棲息してそーな俺のおふくろとは大違いの美人さんなんだけ
ど。

その見た目に似合わず、かなりブラックなお人でもある。
そう考えると。

美奈ちゃんのブラックさ加減はまさしく遺伝な訳で…

「ヒロ！」美奈ちゃん、基本呼び捨て。「で、何処でやんの？」

「いや、東西線のホームにしようかなと…」

「人が多過ぎるから危ないよ。別の場所まで移動した方がいい」

「うーん。そっか。何処にする？」

「知るか」美奈ちゃん、基本タメ。「あんた地元でしょう？」

「そりゃそうなんだけど。じゃ、二十四軒にしよう」

「何で？」

「とりあえず、ここよりは混まないっしょう？」

「いいんじゃない？」と、富樫。「じゃ、皆さん、切符買って移動移動！」

そんなんで。

二セ巫女12人と学生8人の野次馬20人。

それと、巫女服に着替えたホンモノ巫女と俺。

総勢22人の怪しい軍団がぞろぞろ移動する。
ん？

おふくろさん達はって？

仲良く連れ立って買い物行っただけに決まってるでしょ？
お約束通り。

しかし。

東西線のホームに辿り着くと。

美奈ちゃんは何故か、ぴたりと立ち止まる。
んん？

どーした？

「…ヒロ」

「うん？」

「あんた、霊水使った？」

「使ったよ。ご覧のとーり」

「だからか」

「何が？」

ふと不安に駆られる俺。

慌てて背後を振り返るけど、なーんにも見えやしねー。
でも。

美奈ちゃんは、そこから目を逸らさない。
いつになく真剣な力オして。

「…動かないで」

小学生とは思えないシリアスな声。

そうとも気付かず、バカ騒ぎしてる大学生。
そのコントラストが、ことの重大さをますます実感させるから。

俺も真顔に戻って、彼女の言葉を待つ。

数秒間の沈黙。

電車が来ますのアナウンス。

その最中も、その前から。

美奈ちゃんは、感じてたみたいだ。

俺が予想してた通りのことを。

「ヒロ」

「うん？」

「もう、振り返っちゃダメだよ」

彼女は、厳かに言う。

周囲の喧騒に紛れて。

「—— あいつ。後ろにいる」

美奈ちゃんの警告に。

俺、一瞬固まって。

それから、深呼吸する。

マジかよ？

もう来てんの？

勘弁してくれよほんと。

なーんて思っていると。

美奈ちゃん、一行にてきばき指図する。

「計画変更。ここでやつちやうから」

「あ、なんで？」と、アホ富樫。「ひょっとしてもう来てんの？」

「そう。だから、準備してくれる？」

小4にタメ口きかれてる富樫に同情するべきか。

それとも、それにはいい答えてるあいつを笑ってやるべきか。

漫然と悩んでるところに、電車が到着。

でも。

その乗客の異様さに、俺は気付いた。

だってね。

乗ってる奴の殆どが巫女服なんだから。

そりゃあもうびっくりするよ。

てか、引きまくりだよ。

そんな俺の動揺にはお構いなしで。
大量の巫女軍団が、ホームに溢れ返る。
なもんで。

俺達全員身動き取れず、巫女集団も身動き取れず。
たちまちカオスになっちまった。

「ちょ、何だよこれ？」人混みに揉まれながら、富樫がわめく。「
どーなってるの？」

「知らんし！」俺は、冷たく言い放つ。「お前が何かやったんじゃ
ねーの？」

「大通公園でイベントあるらしいよ！」杉本の声だけが聞こえてく
る。「ソーラン祭りみたいな」

「巫女巫女フェスティバルだつて！」と、部長が叫んでる。「アホ
かてめーら！ちゃんと日程調べたのかよ！」

「何だよその巫女巫女フェスティバルって？」俺、今世紀最大に呆
れてる。「馬鹿じゃねーの？」

「どーでもいいけど。これじゃ香も焚けねーし！」

「あの。ホームで香なんか焚いたらまずいっしょ？」

「じゃあどーすんだよ？」

「テレビではやってたぞ？」

「あれはちゃんと許可貰ったの撮影だから…」

「何でそれを早く言わねーの？」

「どんな儀式するのか知らなかったんだもん！」

「てか、何だよ巫女巫女フェスティバ」

「だから！ 巫女萌え女子のコスプレ大会だってば！！！」

「巫女萌えは男の特権じゃ？」

「誰がそんな決めたのさ？」

「したっけ、三国は何やってんの？」

「あ、俺ここにっ」

「見えねーし！」

「いるっしょ？」

「見えるかつ！」

「いるってー！」

「背伸びしろってー！」

と。

豊平川の花火大会並みの混雑の中で。

最早、誰が何処で何言ってるのか。

何やってんのかさえ全く判らない状態。

っーかわや。

完璧わや。

エレベーターに殺到する巫女軍団と、一般の乗客と。

俺達の集団が見事に混ざり合ってて、もう訳判らん。

これじゃ凶悪なユーレイも手が出せまい。

そう思った時。

はつきりと、富樫の声が聞こえてきた。

「おーい！ 三国い！！」

「何？」

「お前、何処にいる？」

「だーから、ここにいてっ！」

必死に手を振ったら、ようやく見つけてくれた。

ったく、使えねー。

内心、ちよつとイラつとしていると。

富樫は引き続き、こんなことを訊ねてくる。

俺が予想もしてなかったことを。

すっかり忘れてたことを。

「…で、美奈ちゃんは？」

@ @ @

「――へっ?」

「近くにいるのか?」

「あ、いるいる! いるに決まってる!!」

慌てて美奈ちゃんを探そうとしたけれど。

唯一のリアル巫女は、何処にも見当たらなくて。

俺を押しつけてくるのは、バツタもん巫女ばっか。
言いたかねーけどさ。

それも、うちの部の女子以上に無謀な奴ばっか。

いやでも、そんなのはどーでもいい。
てか。

この状況、マジでやべーわ。
非常事態だわ。

「美奈ちゃん?」

俺、大声出す。

オバQみたいな巫女もどきが、じろつと一瞥する。
マジうぜー。
こっち見んな。

「美奈ちゃん！」

返事がない。

ただのしかばねのようだ。

なんて言ってる場合じゃねー、俺。

「美奈ちゃん！！！」

いよいよ増えた巫女掻き分けて。

俺、何とか前に進もうとする。

あれか？

これか？

いやちげー。

てか、似たような服の奴ばかりで。

似たような後姿の奴ばかり。

いやいや、美奈ちゃんは小四だから。

ちっちゃいから。

絶対に、見分けられる…筈。

「美奈ちゃん！！！」

呼べど叫べど返事はなく。

俺はじわじわと不安に襲われる。

いや〜ね。

これで大将出ちゃったらどーする訳？

あたし丸腰なのに。

ヘタレなのに。

一人で戦えって仰るのん？

いつになくテンパって半分オカマ言葉になりつつも。

俺、涙目で美奈ちゃんを探す。

不気味な白装束集団掻き分けて。

「みーなーちゃん！！！！！！」

渾身の叫び。

しかーし。

返事なし。

やべーな、オイ。

彼女、敵前逃亡したか？

なんて疑ったのがいけなかったのか。

また、ぐいって右腕掴まれる。

うわ。

やだよ。

来たよ。

来ちゃいましたよ。

勘弁して下さいよ。

と思いながらも。

頼りになるのは、自分しかねーから。

意を決して向き直る。

くそ。

ユーレイだろーと、何だろーと。

やってやるうじゃないの？

行くわよ？

本気で行っちゃうわよ？

こう見えて、怒らせたら結構怖いのよ？

そう思つて薄目開けたら。

そこには、俺の予想と違うものがいた。

ぼんやりと白い塊。

でも、ほんのりあつたかい。

掴まれてるのは判る。

でも、形はない。

どくん。

心臓が鳴る。

え。

ヤバくない、これ？

だつてね。

増えてんだから。

その白い物体が。

俺が見てる間にも、どんどん数が増えてくる。

線路から、ホームから。

壁から、エスカレーターの上から。

そりゃもう、ありとあらゆるところから湧き出して。

人の上をふわふわ飛んだり、消えたりしながら。

転がり落ちるように、集まって来てんだから。

そのことに気付いた途端。
 周りは何故か、スローモーションになって。
 一切の音、消えてなくなる。

どくん。

どくん。

聞こえるのは、自分の鼓動だけ。
 何だこれ？
 どうなってる？

そうこうしている間にも。
 白い塊は、どんどんふくれあがって。
 振りほどこうと思っても、カラダが動かねー。

焦る俺の右端には、ドアが閉まったばかりの車両。
 その窓には、まゆちゃんの姿。
 拳握って、ガラス叩いて。
 必死に、何か叫んでる。

えっ、何？
聞こえないんだけど？

ヒトダマみたいな塊は、みるみる増えて。

巫女どころか、自分の足元さえ見えなくなってる。

ちょ、ヤバくね？

俺、憑^とり殺されんの？

こんなところで？

ねーわ。

そりゃねーわ。

ここで俺がどうにかなったら、まゆちゃんはどうなる？

ありえねー。

彼女のこと、何とか出来るのは俺だけなんだから。

俺にしか見えねーんだから。

美奈ちゃんが頼りになんねーとしたら。

他の連中が役立たずだとしたら。

俺が何とかしなくてどーする？

そう思った途端。

ちよつと俺、スイッチ入った。
で。

床に張り付いた足、何とか動かそうとする。

まゆちゃんは、それ見てほっとしたみたいけど。
彼女は、電車から離れられない。

大丈夫。

安心しな、まゆちゃん。

そう簡単にやられはしねーから。

…てかさ。

ふざけんなって。

コレイだか何だか知らねーけど。

俺だって乙女座Bの端くれ。

美奈ちゃんだって、微妙に血繋がってる訳だし…

「テメーなんかにやられてたまつかあ！！！！」

そう叫んだら。

ふっと、カラダが軽くなる。

びっくりしてコケそうになるのを何とかこらえたら。
白い塊は、ぐるぐる回りながら結集していく。

ん？

何だ何だ？

お前らひよつとして、味方なん？

いわゆる一つの元気玉みたいなもん？

俺の腕を掴んでた奴も、にっこりして離れてく。
いや、実際に見えた訳じゃねーけど。
にっこりしてたような気がした。

美奈ちゃんにダメって言われたけど。
俺、ついに振り返る。

背後に広がるどす黒い塊。

そいつが発する、強烈な憎悪みたいなもん感じて。
見た途端、背筋がぞくつとした。

ダース・ベーダーみたいな荒い息。

引きずり込まれそうになりながらも、俺は何とか足を踏ん張る。

いや〜ねあんた。

怖いカオして脅したってムダよ。

今日のあたしは、いつもと違うのよ。

だつてね。

ガキン時から、おふくろに言われてるのよ。

『やれば出来るコだから』 って!!

@ @ @

俺の意気込みが伝わったのか。

白い塊は、さあつと集まってきた。

何やら、巨人みたいな形になって。

俺と悪霊の間に、すつくと立ちはだかる。

おつ、すげー！！

超かっけー！！！！

あの。

ひよつとして。

俺のスタンドか、これ？

興奮を抑え切れないまま、俺は奴を睨み付ける。

何てったってね。

俺にはもう味方がいるんだから。

どういういきさつで集まったメンバーかは深く考えねーけど。

まあそーゆーところが乙女座Bたるゆえんでもあるんだけど。

とりあえずこいつらは仲間ってことでおk？

だよな？

てかさ。

このヤロー。

あん時はよくもやってくれたな？

でも、結局俺は助かったし。

だからこうして、お前と対決出来る。

俺はもうヘタレじゃねーし。

道民代表として、お前を退治する立場にある。
何より真っ先に、まゆちゃんの敵討ちをして。
彼女の無念を晴らしてやんなきゃなんねー。

判ってるか？ このクソヤロー。

お前がこれまでいろんな人をユークレして、線路に叩き落としたせいで。

泣いてる人間が沢山いるってことを。

判ったか？

お前がどんな死に方したのか知らねーけどさ。

だからって、人を巻き込んでいいって法がある訳ねー。

いいか？

俺には北海道最強の幼女、いや、リアル巫女がついてんだ。

それに、この元気玉みてーな連中も参戦してくれてる。

どーよ、この状況？

お前もっ、勝ち目ねーんじゃない？

だってね。

俺はいまや、スタンド使いだし。

スーパーサイヤ人だし。

ロード・オブ・ザ・リングのアラゴルン状態だし。

こいつらが味方なら、怖いもんなんかねー。

どうだ？

今すぐ降参したら、俺だって考えはある。

例えば…

なーんてことを脳内で訴えてたら。

黒い塊は、ふっと息を吐く。

…。

……。

どうも、せせら笑ったっぽい。

なんで。

俺、さらにスイッチ入る。

くそー！

舐めやがって！！

前言撤回。

こうなったら徹底抗戦だ。

ボコボコにしてやるぞ、この…

そう思いつつ。

白い塊に命令を下そうとした瞬間。

黒野郎の右腕らしきものが一閃。

直後。

白い連中。

一瞬で掻き消されちゃった。

……。

……。

……。

…
よ
わ
っ
！
！
！
！
！
！

ちょ、ありえねー。

何なんだよ、お前ら？

味方っぽく、華々しく出てきた割にはさ。

カンペキ、みかけ倒しじゃね？

なんて思ってる頃にはもう。

奴はどんどん間合いを詰めてくる。

俺の頭の中では何故か、“エアーマンが倒せない”がぐるぐるしてE缶だけは最後まで取っておこうなんて思ってる。

てか。

リアルな話。

あの一撃食らった時点で、俺のライフは確実にゼロなんだけど？

でも。

こうなったら、やるしかねー。

あんまり引つ張り過ぎると、読者さまにも申し訳ねーし。
やるよ？

やっちゃうよ俺？

もうあとがねーけど。

後方支援も何にもねーけど。

ガキの頃から運だけは良かったって、親父も言ってたし。

奴は多分目の前にいる。
でも。

俺にはもう、暗闇しか見えねー。
くそ。

負けねーぞテメー！！

が。

掴みかかろうとしても、殴ろうとしても、手応えなし。
それどころか。

何故か俺、ずんずん押されて、ホームに戻されて。

しかも、線路側にじわじわ追い詰められてく。

うわー。

ふざけんな！

負けてたまるかっ！！

見た目は黒い塊だけど、奴だって何処かに弱点はある筈。
そう思いながら、必死にもがいてみる。

蹴る。

ダメ。

また蹴る。

はんのーなし。

しかもその間に、ますます押される。

また、突き落とすつもりなんだろう。

どーでもいいーけどさ。

お前の攻撃って、毎回ワンパターンだな？

そんなん思ったら。

突然、ぐっと胸元掴まれた！気がする。

ふわりと浮く足。

げっ。

ちよっと待った！

そりゃねーわ！！

てか、サーセン！

前言撤回！！

それよりねえ、正々堂々と勝負しません？

しましうよ！！！！

お願いだから！！！！！！

なぐんてことをわめきながら、ほぼ涙目の俺。
でも、負ける訳にはいかねー。
なんで。

考え読まれないよーに、無駄なこと思い出す。

最初に考えたのは、まゆちゃんのこと。

人身事故のアナウンス。

反対側ホームの人ばかり。

しかしまるで他人事の俺。

エスカレーター上って、大学行つて。

何事もなかったかのよーに、講義受けてた。

それから。

カバンの中に入ってた何か。

初めて、彼女の姿見た時のこと。

ユーレイにしては可愛いなって、ただ単にそれだけだったのに。
親しくなって、沢山話して。

そんなことしてる間に、どんどん彼女のこと好きになって。

調べているうちに、ますます感情移入しちまって。
地下鉄でしか会えない彼女のことを、可哀想に思うようになって。
まゆちゃんの元カレに、本気で嫉妬して。
いや。
ぶつちゃけ、俺なんかよりよっぽどいい男なんだけど。
嫉妬抜きにしても、どうしても許せなくて。
ガキみたいな報復したりして。

俺の肩にこてんって頭乗つけてくれたまゆちゃん。
前払いのキス。
思いがけない告白に、悩んだこともあった。
誰にも相談出来ねーし、誰も信じてくれやしねー。
でもね。

まゆちゃんは、確かにそこにいて。
俺のこと、見ていてくれる筈。
ヘタレな乙女座Bだけど。

基本リュックの秋葉ちゃんだけど。
俺、初めて、誰かのために立ち上がった。
誰かの役に立ちたいって思った。

ユーレイでも何でもいい。
彼女のこと好きだから。

どうにかして、ここから出してやりたくて。
そのために。

俺が出来ることなら、何でもやってやりたいって。
そう思った。

だから。

そう。

負ける訳にはいかねーの。

当てにならねー援軍も、冷たい従妹も。

能天気な家族も、不気味な二セ巫女軍団も。

あんな連中の手を借りなくても。

俺、やってのけるから。

これ以上、悪霊の犠牲になる人が出したくねーから。
これ以上、まゆちゃんに辛い思いさせたくねーから。

押されて次第に息が苦しくなる。

かかとの後ろにはもう、何も無い筈。

でも大丈夫。

さつき電車が出たばかりだから。

あと5分は来ねーだろーと。

そう思ってた俺の耳に飛び込んできたアナウンス。

「間もなく、宮の沢行きが到着します。黄色い線の後ろまで下がってお待ち下さい」

…。

ちよ。

今度こそ、ピンチ？

てかさ。

何やってんの、駅員！
助けに来てって！！！！

@ @ @

援軍なんか当てにしねーって言いながら、必死に駅員の姿探す俺。
やっぱヘタレなんだよな。

冷静にそう分析しながらも、諦めず。

とりあえず、やれるだけのことはやってみる。

奴に抱きついた（つもり）。
で、押し返した（つもり）。

足払いかけた（つもり）。

…ダメじゃん。
ぜーんぶ、つもりだし。

てか。

生身の俺が、霊相手にどうやって戦えと？
せめてググってくれば良かった。

世界の何処かに答えはあっただろーに。
何てゆーか。

そーゆーところ、ほんっと詰めが甘いんだよなあ。

ホーム脇ぎりぎりんとこで、何とか持ちこたえてる俺。
意外と脚力はあるのよ、こー見えて。

そしたら今度は、首を絞められてるよーな感覚。
マジで苦しい。

てか、テメー。

この卑怯者！！

俺、必死。

かなり必死だけど。

苦しいもんはどーやっただって苦しい。

つーかもう、本気で死にそうだ。

でも、諦めるもんか。

そう思っただけな抵抗繰り返しながら、ふと考えた。

もしここで俺が死んだら、どうなるんだろうって。

まゆちゃんみたいに、ずっとここにいないことになるのかって。

でもそしたら、ずっと一緒にいられんじゃないかって。
まゆちゃんと二人…

じょーだん。

そーゆーハッピーエンド、俺キライなんだよね。

第一。

まゆちゃんにとって、それが果たして幸せかどーか。

俺がこの先どーゆー扱いを受けて、何処に行くか判んねーってのに。
天国か地獄か知らねーけど、ここにいられるって保障は何もねーだ
ろうが。

だとしたら。

まゆちゃんはまだ、ずっと一人きりになっちまう。

家にも帰れず、成仏も出来ず。

それは、やっぱりダメじゃねーの？

たった19年しか生きてねーけど。

俺にだってそれくらいの分別はあつから。

いざとなったら、テメーを道連れにしてやる。

そう思った途端。

全身に、力がみなぎってきた。

やってやる。

絶対、やってやる。

これ以上、テメーの好きにさせつかよ！！

首を絞めてた力がふっと薄れた時。

俺は奴のふところに飛び込んでやる。
ぬらぬらとした、湿気みたいな感じ。

明らかな血の臭いと、ぞっとするような圧迫感。
何だよ。

最初から、こうすれば良かった。

かなりな抵抗を感じながら、裏側に突き抜けて。
ふと見ると、俺の体も少し透けてる。

あーあ。

ちよつとだけくれちまったか？

ま、いいや。

これでダメージ与えられるって判ったら、もう遠慮しねーぜ。

ホームの向こうから、到着する電車の光が見えた。

俺の周りには、すっかり時間が止まってる。

巫女軍団も、乗客も、ぴくりとも動かない。

そんな中、電車だけが着々とこちらへ向かってくる。

何だかシュールな光景。

奴がくるりと向きを変えた（気がする）。

でもって、俺を鋭く睨みつけた（気がする）。

で、再び飛びかかってくる。

これは気のせいじゃない。

俺、あっさり後ろに弾き飛ばされて。

背中思いつきり、床に叩きつけられた。

でも。

あいつに向かって行こうとしても、何故か足が動かねー。

ずるずると、後ろに引っ張られる。

ちよ、何で？

あと少しなのに。

あと少しで、倒せる気がしてるのに。

その時。

俺の前に、白い物体がふわりとやって来る。
またあいつらか？

一瞬そう思ったけれど。

それは薄れることも、消されることもなく。
むしろどんどん、輝きを増していく。

あまりの眩さに目を閉じた時。

美奈ちゃんの声が聞こえてきた。

いや。

彼女が厳かに唱える、天津祝詞が。

「高天原に神留坐す、神漏岐、神漏美の命以ちて
——」

刹那。

たちまち巻き起こる熱風。

息が出来ねーくらい。

何とかまぶたこじ開けて見たものは、煌々とした光の手前に佇む、美奈ちゃんのシルエツト。

奴が咆哮するたびに、風は激しさを増して。

美奈ちゃんの緋袴と長い髪が、上下に靡くのが見えるけど。

彼女は怯むことなく玉串を捧げ、祝詞を唱え続ける。

「すめみおやかむいざな皇親神伊邪那岐の大神、おほかみ筑紫日向の橘の、つくしむか小門の阿波岐原に――
――」

「うおおおおおおーっ！！！！！！」

初めて聞く奴の叫びは、床を震わすほどで。

目を開けなくても、その姿が見えそうな感じだった。

うわー。

マジかよ？

俺、こんな奴と、丸腰で戦ってた訳？

「みそぎはら楔被ひ給ふ時に、あれま生坐せる、はらへど被戸の大神等――
――」

そのあたりから。

俺の意識は、徐々に薄れ始める。

これは一体何だろう？

実写版犬夜叉かよ？

眩しさと緊張が薄れ、力が抜けてくると。

俺の体は何故か、ずるずると背後に引きずられる。

ふと見ると、いつの間にか、腹にロープが回してある。

それを、富樫一行が、よいしょよいしょと引っ張ってた訳だ。

「三国いっ！」

「頑張れっっっ！」

「持ってかれるなー！」

「俺達がついてるぞー！」

奴等の必死な声を聞いているうちに。

俺の体はふんわりあつたかくなる。

やっとの思いで目を開けると、俺はまゆちゃんの膝の上にいて。

泣き出しそうなその顔を、ようやく見ることが出来た。

大丈夫。

俺、やったから。

出来るだけのこと。

てか。

おいしいところは、みんな持ってかれた気がするんだけど。

まあそれも、俺の仕様ってことで…

彼女の温もりと、細い指先をはっきりと感じるのと同時に。

俺のライフがゼロになるのも判った。

美奈ちゃんが戦ってる。

小さな背中を俺に向けて。

みんなもここにいる。

まゆちゃんも、富樫も。

その他大勢も。

ごうごう言うつレールの振動が間近になった頃。

地下鉄が威嚇的な警笛を鳴らす。

ふぁん。

それを聞いた直後。

俺の意識は、完全になくなった。

ぷちんと。

ぱつんと。

そんな中。

美奈ちゃんの最後の台詞が聞こえた。

かしこみ、かしこみもまをす…

気付いた時。

俺は、ホームの椅子に寝かされて。

無理な体勢だったせいか、猛烈に背中が痛んだ。

それなのに。

周囲は何もなかったみたいに和気藹々としてて。

到着した電車からは、またもや大量の二セ巫女が降りてくる。

富樫達は、遠くでアニメの話して盛り上がったるし。

俺の体には、何の異状もない。

「やだー、遅れちゃう!」

「限定版買えないじゃーん!」

そんな声と共に。

ありえねー巫女どもは、わらわらとエスカレーターに群がってあわや大惨事って状態を今にも作り出しそうだ。

とはいえ。

体のあちこちに、妙な痛みを感じてた俺。

殺風景な天井見上げながら、思わず溜め息ついた。

だってひでーじゃん。

あんまりじゃん。

これで夢オチとか言ったら。

俺、マジで泣くからね？

「ヒロさあ」

突然、名前を呼ばれて。

思わずびくつとする。

見ると、すぐ傍に美奈ちゃんが立ってたけど。

いつの間に着替えたのか、それとも最初から妄想だったのか。

彼女はとくに普段着になってた。

真っ直ぐの黒髪も、乱れ一つない。

「とりあえず、終わったから」

「…えっ？」

「完全に消すには、あと二回ぐらいかかると思っけど」

「……」

「あんたが頑張ってくれたから、何とかなったよ」

「マジで？ あれって、夢じゃなかったの？」

「夢だったら良かったんだけどね」彼女は、俺をじろつと睨む。「ほんつと、メーワクかけられたよ」

「…サーセン」

「一般市民には判ってなかったと思うから。富樫くん達には、結果だけは伝えておいてある」

そう言う。と。

美奈ちゃんは俺をぐいぐいどかせて、隣にちょこんと座る。

「でもさ。ヒロ、思ったよりヘタレじゃなかったじゃん？」

「まーな。今回ばかりは頑張ったよ」

「ちょっと持ってたけど、6割方取り返したから」

「へっ？ 6割方？」

「それでも、悪たれジジイになるまでは生きられるね」

「ちょ、待って」言いたかねーけど、彼女は小四。「持ってたって、寿命が何か？」

「人間、知らない方が幸せなこともあるさ」美奈ちゃんは初めて、につこり笑う。「ま、そーゆーことー！」

「うわ、マジで？」くどいよーだけど、彼女は小四。「それってかなりヤバイ状態？」

「だから、悪たれジジイになるまで生きられるって言うてんでしょ？　ゼータク言わないの！」

「…ハイ」

「それより。ヒロにはまだやることあんだから」

「え？」

「もう時間ないから。今日中にアレ、返してあげないと。彼女ほんとに、帰れなくなっちゃうよ？」

「……」

「返したら、北見まで送ってあげて。一人じゃ帰れないと思うから」

「……」

「出来れば最終電車使って、人目につかないようにして。霊波の弱いのがいると、上手くいかないこともあるし」

「……」

「ちょっと！　訊いてんの？」美奈ちゃん、ついにキレたっぽい。
「あたしもつ買い物行くからね！」

「あ、うん。ごめんごめん。返すんだよな、アレを」

「そうそう。日付が変わる前に」

「でも、アレ返したら、もうまゆちゃんとは…」

そう言いかけた時。

何故か、うちの両親と妹、叔母さんまでやって来る。

「お疲れ、ヒロ！」と、おふくる。「上手くいったかい？」

「んなこといーから、買い物行こうよ！」と、妹。「バーゲン！バーゲン！美奈ちゃんも行こうー！」

「お前、車使うだろう？」と、親父が鍵を渡してくる。「いつもの駐車場に入れてあるから」

「あ、じゃ、俺達も便乗していいっすか？」と、富樫。「イベント終わっちゃったんで」

「いいよー」と、美奈ちゃん。「じゃあさー、とりあえず地上出てそれから…」

「一回ロビンソンまで戻るかい？」と、叔母さん。「それとも、巫女巫女フェスティバル見てから行くかい？」

「あ、いいねー！」

「そうしょっかー！」

「じゃ、ヒロ！ またあとで！」と、美奈ちゃんも笑顔。「ねー、おかーさん。アニメイトも見たい！」

そんな風に。

これまた和気藹々と遠ざかる連中の背中を眺めながら。

俺はボーゼンと一人取り残されて。

ぽつりと、ホームに佇んでる訳で。

…。

……。

てか。

どーでもいいーけど。

相っ変わらず、空気読まねー家系だよ…

@ @ @

よーやく放心状態も収まって。

何とか、次の電車に乗ってみた。

単なる偶然かもしれないけど。

どいう訳かその車両だけ、やけにがらんとした。

落ち着かない気持ちで周囲を見回して。

誰かの温かみが残るシートに、腰を下ろしてから。

俺はその光景を、ずっと眺めてた。

端っこに座って競馬新聞読んでるおじさん。

i p o d 聴いてる細身の男子高校生。

おしゃべりに夢中のばーさん二人連れ。

こんなちっばけな車両にも、いろんな人がいて。

いろんな生活があって、多分、悲喜こもこもとした事件があっても。

悪霊のせいとかじゃなくても。

事故だとか、事件だとか、病気だとか。

ほんの些細なことで、そいつは簡単になくなっちゃうんだって。

若かるうが、年食ってよーが。

失うのは、ほんの一瞬なんだろうなって。

そんなことを、考えてた。

美奈ちゃんが言うには、あいつは元々自縛霊で。

生きてる頃、いろんなものを抱えてたそう。

自殺のきっかけは、彼女にもよく判らなかつたらしいけど。

深い恨みを残して死んだのはまず間違いないって。
だから。

通りすがりの人を、巻き添えにしたりして。

誰かを不幸にすることで、自分を慰めてたって。

バカみたいだけど。

ありえねー話だけど。

そういう奴って、生きてる人間の中にも沢山いるような気がする。

それより。

俺はまだ迷ってた。

あの手は、まゆちゃんと俺とを繋ぐもので。

それを彼女に返してしまったら、一体何が起きるのか。

さっき、美奈ちゃんに聞きそびれちゃったけど。

メールしても、返事来ねーけど。

何となく、想像はつく。

少なくとも。

まゆちゃんをここに縛り付けているものが解けて。

彼女は、家族の元に帰れるようになるんだろうって。

でも。

例えユーレイだったとしても。

まゆちゃんは俺の中では、リアルな女の子で。

もう会えなくなるなんて、考えたくもなかった。

いや。

ぶっちゃけ、俺は彼女を離したくなくて。

電車の中だけでもいいから、会えればいいなんて。

そんな勝手なこと思ってたたりして。

けれど。

もしアレを返さなければ。

彼女は一生、ここにいなきゃいけない。

俺が大学卒業して、この先何処に行くか判らねーけど。
何処に行って何をするか見当もつかねーけど。
札幌を離れる可能性だってある。

そつしたら、まゆちゃんはどうなる？

またずっと一人きりで、ここにいるのか？

俺みたいなユーレイ体質の人間が現れるまで。

一人寂しく、地下鉄の中で過ごすしかないのか？

大勢の人間が素通りして行くこの場所で。

成仏することも出来ずに、彷徨ってるしかないって？

ありえねー。

しつかりしろ、三国廣明。

寂しいからとか、離れたくないとか。

今更、んなこと言ってる場合じゃねーだろ？

お前のエゴで、彼女をそんな目に遭わせるつもりかよ？

マトモな俺は、そう言うけど。

マトモじゃない俺は、やっぱり迷ってる。

だって。

あんまりじゃね？

浄霊成功したのはいいけど。

まゆちゃんの敵も討てたし、犠牲者もこれ以上出さずに済むし。
それは勿論いいけど。

何てーか。

せめてもうちょっと、猶予期間が欲しかったかなーと…

そう思ってた時。

左手が、ふわっとあつたかくなつた。

まゆちゃんだ。

今日もゴスロリ調の服。

黒いボレロのついたジャンパースカート。

その下から覗く、真っ白なレース。

前から思ってたけど。

可憐って言葉は、彼女のためにあるんじゃないかって。

そんなまゆちゃんに向き合う時。

俺も前よりは、ちよつとだけカッコイイ気がした。

いや、あくまで気がしただけだけど。

そこはあんまり突っ込まないでくれるとありがたい。

「終わったよ」彼女の両手を掴んで、そう言ってみる。「もう、自由になれるから」

頷く彼女の肩から、薄茶の髪がこぼれ落ちる。

ああ。

もうダメだ。

萌え死ぬ。

ミィハーな気持ち、必死に抑えながら。

彼女の両手握ったまま、額に額くつつけてみる。けれど。

それ以上のことは、出来なかった。だって。

まゆちゃん、泣いてるから。

大粒の涙こぼして。

それ見た時。

俺、確信しちゃった。

判ってるんだなって。

俺だけじゃなく、まゆちゃんも。

だから。

何も言わずに、抱き締める。

溜め息つきたいの、我慢して。

判ってる。

今日が最後なんだって。

明日にはもう、お別れしないといけないって。

夜に会う約束をして、まゆちゃんと別れたあと。

俺は一度大通へ引き返し、叔母さん達と合流する。

それからあーだこーだいろいろあつて、散々連れ回されたものの、夕方にはようやく解放して貰った。

で。

いつもの場所で親父の車をピックアップして、北一条通り経由で西へ向かつて。

近所の駐車場にそいつを入れてから、西28丁目駅方面へ歩き出す。夕闇迫る街の上には、綺麗な夕焼けが広がっていて。

冷え始めた外気は、微かに夏の匂いがした。

パーカーのポケットに両手突っ込んで、深々とうなだれたまま。

札銀と館の前を通って、アパートに向かつてる間も。

俺の手には、まゆちゃんの温もりが残ってた。

どうする？

マトモじゃない俺が訊く。

ったく。

しつけない。

どうするって。

今更、どうにもならんべ？

郵便受けの新聞取って、階段上って。

冷蔵庫開けてみたけれど、さすがに食欲はない。

浴槽になみなみと湯を張って、時間をかけて風呂に入ってふと見ると、体のあちこちにあざが残ってた。

あーあ。

やっぱ、夢じゃなかったんだ。

のぼせる寸前に風呂から上がって、机に座って。

テキストにチャンネル回しつつ、缶ビールをぶしっと開ける。半分ぐらい飲んでから、車を持ってきたことに気付いたけど。ま、いつかってことにした。

今夜は多分、地下鉄で用が足りちまうだろうし。

明日のことは考えたくねーし。

PCを立ち上げて、グーグルマップを確認して。

北見までのルートを辿ってみる。

…。

……。

遠いなオイ。

てか、ほぼ網走だし。

殆ど端から端じゃねーの？

札幌から鷹栖まで、道央自動車道経由で1時間ちょいだから。
比布で降りて、そこから39号線をまーっすぐ…

うーん…

ま、何とかなるべ。

いや。

何とかしないと。

今夜、何が起こるか判らねーけど。

まゆちゃんを帰せるの、俺しかいねーんだから。
どういう縁か知らねーけど。

最後まで、俺が見届けてやらなきゃ。

いい感じで酔いが回ってきたせいか。

てか、ほぼヤケクソという見方も出来るけど。

何故か俺、じわじわとテンション上がってくる。

やんなきゃ。

あんなタチの悪い霊と戦ったんだから。

いや、とどめは俺じゃねーけどさ。

途中までは善戦したんだから。

あの時のしんどさを思えば。

まゆちゃんを地下鉄から解放して、280km先のご自宅へ送り届けるって。

それぐらいのミッション、どーってことねーべ。

ね、お客さん。

それが、男ってもんでしょ？

@ @ @

美奈ちゃんは、なるべく終電でって言ったけど。

この日の最終は、0時19分。

日付をまたいじまったらちよつとまずいなと思って。

その三本前の、23時49分に見てみた。

俺が選んだのは、東西線大通駅。

まゆちゃんと、初めて出会った場所だから。

やや酔っ払いモードながらも。

俺は徒歩で、大通まで歩く。

地下鉄に乗った方が断然早いけど、何故かそうしかなかった。
だってね。

西28丁目でまゆちゃんとはったり会っちゃったら。
幾ら何でも、カッコ悪くね？

そう思ったりして。

タクシーやら何やらが、ごうごうと通り過ぎる中。

俺は何となく、感じてた。

今日はきつと、忘れられない夜になるんじゃないかなって。いろんな意味で。

俺にとって、思いもしないことが起こりそうな気がしてた。根拠なんかないけどな。

ただ単に、酔っ払ってるせいかもしれない。

でも。

いつものＴシャツとか、ネルシャツじゃなく。

ちよつとだけ、いい服着てきたりする。

兄貴が置いてったドレスシャツは、何となくお水の匂いがあるけど。まあ、ドンキで買ったミリタリーシャツよりはましだろう。

髭も剃ったし、髪にも櫛入れて。

珍しくムースなんてもんも使ってみた。

何となく気恥ずかしい感じはするけど、精一杯胸張って。

街頭の下を、早足で歩き続けた。

にしても。

生涯最初のデートがこれかと思うと、我ながらちと情けない。しかも。

下手するとこれが、生涯最後のデートになるかもしれないし。そう思うと、どうしてもブルーになっただけ。

ま、しゃーない。

人生、なすがまま、きゅうりがパパ。

なるよーにしかなんねーもんよ。

俺の達観も、頑張りも、何処吹く風っていった感じで、大通駅は混みに混んでいた。

黒服、茶髪、金髪に、ド派手なミニス力軍団などなど。どうも、アフターお水の時間帯らしい。

てか、君達。

お水ならお水らしく、タクシーで帰りたまえよ。

予想が裏切られて、ますますブルーになったまま。

俺は西28丁目までの切符を買って、自動改札を通る。

もしまゆちゃんここで別れることになったら。

この切符を記念に取っておこうと思ったって訳。

23時49分。

時間通りに、宮の沢行きの電車が来る。

同時に。

俺の心臓は、イヤゝな速まり方をする。

これで最後か。

そんなことを、つい思っちまうから。

けれど。

乗ろうと思ったた車両に、まゆちゃんの姿を見つけた時。もう、覚悟は出来てた。

例の裏技を使ってくれたのか、その車両には誰も乗って来なくて。

俺はほっとしつつも、ちょっとだけフクザツだった。

だとしたら、別に何時のでも良かったんじゃない？

まゆちゃんは、一番端の席に座り。

俺は、一人分空けて、その隣に腰を下ろす。

電車のドアが閉まってから。

俺はカバンを彼女の前に置いて、タッパーを取り出した。

それから、少しだけ沈黙があつた。

戸惑いのような、躊躇いのような。

でも。

ここまで来たら、もうやんなきゃ。

チルドに入れておいた左手は、恐ろしく冷んやりしてたけど。

俺は慎重にそれを取り出して、手の平に乗せる。

おふくろがしまつて以来、怖くてまともに見てなかったから。

状態がどーのとか、まるで判らなかつたけれど。

その手は最初の時みたいに、ほんのりと光つてて。

ガラス作りの置物みたいに見える。

俺が空いてる右手を差し出すと、まゆちゃんは左手をそつと出す。

手の平を下向きにしたままで。

だから。

その形に合わせて、冷たい左手を重ねていく。

何て言うんだろう。

カメラのフォーカスを合わせる時みたいな感覚。

二つの左手が、ぴたりと合わさつた瞬間。

それは見事に同化して、たちまち血が通い始める。

ユーレイに血が通うって言い方もどうかと思うけど、ほんとにそんな感じだった。

まゆちゃんは恐る恐る、左手を動かして。

大丈夫そうなのを確認して、微かに溜め息をついた。

その直後、電車は西11丁目に到着して。

スーツ姿のおっさんが、どこか乗り込んで来る。

それで俺はちよつと慌てただけど。

まゆちゃんは、くすくす笑ってる。

それから。

俺のカバンを持ち、手を引いた。

「混んできたから。詰めた方がいいよ」

「あ、だよね」

ごく自然にそう答えてから。

俺、はたと気付いた。

まゆちゃんの姿が、いつもよりはっきりしてることに。

彼女の声が、きちんと聞こえることに。

いや。

そんなもんじゃねー。

きちんと揃えた靴のつま先。

そこには、くつきりと影が落ちてる。

それと。

俺の左腕に触れてる腕。

肩に寄りかかっている、彼女の髪。

その感触。

…マジで？

信じられずに、まゆちゃんのこと見たけど。
彼女、目閉じたまま、俺の左手に右手の指絡ませて。
その上に左手置いて、そつと握り締めてくる。

あつたかい。

てか。

嘘みたいだけど。
今の俺、ちゃんと感じる。
ちゃんと感じられてる。
まゆちゃんのこと。

声も、体も。

リアルに感じられる。

ほんと。

ふつーの女のコみたいに。

西28丁目に電車が着いた時。

俺はまゆちゃんに、切符を手渡して。

それから、自分の定期を出す。

まさかとは思ったけど。

今の彼女は、ユーレイじゃなくなつて。

何処にでもいるような、普通の女の子の姿になつてる。

だから。

改札出る時も、普通に切符使つて。

取るタイミング間違えて、慌てて引き返したり。

それを見てる駅員さんが、にこにこしてたり。

そんなことが、俺にはとても現実には思えなかった。
でも。

無事に改札をクリアして、もう一度手を繋いだ時。

まゆちゃんは、地下鉄から抜け出すことが出来た。

恐らく、数ヶ月振りに。

真つ暗な道には、車の姿もなく。

俺はまゆちゃんと手を繋いで、ゆっくりと街を歩いた。

街路樹も、星も、頬に触れる風も。

彼女に限らず、俺にとつても。

何もかもが、新鮮に思えた。

「…三国くん」

初めて聞く、まゆちゃんの声。

思ったより高くて、思ったよりずっと可愛い声。たったそれだけで。

俺はもう、ノックアウトされそうだったんだけど。照れと動揺をごまかしながら、こんなことを言う。

「名前でいいよ。何だか、他人行儀な気がすつから」

「じゃあ…ヒロアキくん？」

「ヒロでいいよ。皆、そう呼んでっから」

これまでの19年間。

何度となく夢見てた光景。

何度となく妄想してた会話。でも。

まゆちゃんと距離が近付けば近付くだけ。

俺はどんどん気が沈んでいった。つたく。

ほんと情けねー。

「いろいろ、ありがとう」

「いって。やめようよそっいつの。俺、苦手なの」

「でも…」

「いいから。俺も、まゆちゃんにいっぱい助けて貰ったし」

「え？」

「だから、いいんだって。ほんとに」

「でもあたし、何もしてないよ？」

「いいんだって。そんな、深く追求しない！」

ぶつきらぼうに突っ撥ねながらも。

実は俺、限界に来てる。

照れながら、緊張しながら。

まゆちゃんと話せて嬉しい筈なのに。

こうやって歩いて、ほっとしてる筈なのに。

ごめん。

俺、ほんとと素直じゃねーの。

泣きそうなの。

これが最後だって思うと。

思わないようにはしてるけど。

どうしても思っちゃう。

だから。

話したくなかった。

いっぱい話したいことあるのに。

出来れば、逃げ出したかった。

あんなに会いたかったのに。

だってね。

こうなるまで、気が付かなかったんだから。

ユーレイ相手なのに。

こんなに、本気になってるなんて。

本気で、好きになってるなんて。

俺、予想もしてなくて。

まゆちゃんを、地下鉄から救出したのはいいけれど、この先どうしたらいいのか。

明日ちゃんと、北見まで送ってやれるのか。

何から何まで。

もう、どうしていいか判らなくなってた。

アパートに着くまで。

まゆちゃんは、殆ど喋らなかった。

多分、気を遣ってくれてたんだと思う。

俺がパニックってたから。

でも。

しっかりと、手を繋いでいてくれた。

ボロな階段上って、俺が部屋のドアを開けるまで。

ずっと、手を離さないでいてくれた。

雑然とした部屋に、二人でいると。

緊張度は、ヤバいくらい高まってくる。

もう深夜。

テレビだって、ろくなのはやってねー。

沈黙に耐え切れず、ぱっと席立って。

とりあえずお湯沸かそうとして、派手にやかん引っくり返すし。ようやく水入れたら今度は、コーヒー切らしてるし。

台所の奥から引っ張り出した紅茶は、賞味期限が4年前。

あーあ。

俺、何やってんの？

そうやってばたばたしてる俺を見て。
まゆちゃん、くすくす笑ってる。

はあ。

目一杯お洒落したって、結局これだもん。
ほんと力ツコ悪い。

「大丈夫だから。どうかお構いなく」

「参ったな。コンビニ行って来ようか？」

「ううん。いいから。少し話そう」

そう言われて。

俺、渋谷部屋に戻る。

恥ずかしいのと、照れ臭いので。

彼女の顔なんか、まともに見られねー。

ごめん、ほんと。

がっかりしたよね。

こんな奴で。

そう思ってたら。

まゆちゃんには、伝わっちゃったらしい。

「そんなことない。思った通りの人だったよ」

「嘘ばっか。俺が女なら、絶対やだもん。こんな奴」

「そんなことないって。そういう人だから……」

向き合って顔を上げると。

間近に、まゆちゃんの顔がある。
うわ。

近いって。

近過ぎますって。

もう限界。

すでに、心停止寸前の俺。
でも。

彼女は俺の腕掴んで、離してくれない。

しばしの沈黙。

それなのに。

ガスの火は止めたっけ？

余計なことばかり考えてる俺。

でないと。

泣き出しそうだったから。

まゆちゃんのこと、好き過ぎて。

頭、おかしくなりそうだったから。

長い、長い時間。

まゆちゃんと俺、見詰め合ってた。

窓際に立ったまま。

向かい合ったまま。

判ってる。

これが最後だって。
だから苦しくて。

だからずっと迷ってた。
言いたかったのに。
ずっと、言えなかった。

迷っただけ。

どうしようかって思っただけ。

まゆちゃんが、俺の頬に両手当てて。

覗き込むみたいに、瞳を合わせてくれたから。

もう、言わなきゃって。

そう思っただけ。

ヘタレな俺だから。

チキンな俺だから。

簡単なことなのに。

凄く、時間がかかった。

好きだよって。

そう、告げるまで。

まゆちゃんが、大きな瞳にいっぱい涙溜めて。
何度も、頷いてくれてから。

同じように、好きだよって答えてくれて。

それから。

またかなり、時間がかかった。

それと、勇気も要った。

多分、どちらもそう。

この19年間で、一度も口にしなかった言葉。
でも。

言わなきゃ。

渡さなきゃ。

相手がユーレイだろうと何だろうと。

でなきゃ俺。

絶対、後悔する。

そう思ったけれど。

それからまた、何分が必要になった。

卒倒しそうなぐらい緊張して。

断られたらどうしようかって心配したりして。

だからほんと、永遠みたいに思えた。

キスしていい？――って。

そう訊いてから。

まゆちゃんが、はつきりと頷いて。
目を閉じてくれるまでの時間が。

その朝。

目が覚めるまで。

俺はやっぱり半信半疑だった。

実はこれが全部、夢だったりして。

地下鉄のことも、まゆちゃんのことも。

何もかもが、現実じゃなくて。

俺の脳内で起こったことじゃないかって。

でも。

相変わらず空気読めねー携帯のアラーム。

不幸中の幸いは、珍しくマナーモードにしてたことだけど。

その時も。

まゆちゃんはちゃんと、俺の腕ん中において。

まだ、ぐっすりと眠ってた。

右腕にかかる彼女の重さと、温もりを抱き締め直して。

もう一度、目を閉じてみる。

初めてのキスのあと。

そのまま、第二段階に雪崩れ込んで。

何とか、オトナの卒検終えてから。

彼女の右手と俺の左手は、しっかりと繋がれて。

おはようのキスまで、離れることはなかった。

ベッド抜け出して、服着てからも。

頭は全然回らねー。

だから。

着替えを済ませたまゆちゃんが、埃だらけのカーテン開けたり。もの珍しそうに俺の机を探索してるの見てても。

実感なんか、まるで湧いてこねー。

でもとりあえず、おふくろの買い置き引っ張り出して。

目玉焼き作って、トースト焼いて。

彼女がそれをテーブルに並べてくれるのを、ぼんやり眺めたりしてた。

「…何時に出るの？」まゆちゃんが訊く。「もう行く？」

「いや。夕方までに着けばいいかなと…」

「じゃあ、10時くらい？」

「うん」

何てーか。

俺、めっちゃ緊張して。

まゆちゃんがいろいろ話しかけてくれても。

何だかとんちんかんなことばかり言ってる気がするし。

向かい合って飯食ってても、味なんかまるで判んねー。だって。

ああいうことのアとだし。

俺、初めてだったし。

こういう時、どんな力オしていいのかも。

ふつーにしてるべきなのかも。

何か、気の利いたこと言わなきゃいけないのかも。

全っ然判んねーの。

それでも。

何も話さなくても。

まゆちゃんがそこにいてくれるだけで、何だか満たされて、
ぎこちないながらも、何とか会話して。

そんな俺のこと。

彼女は最後まで、優しく見守っていてくれたような気がする。

「忘れ物とか、ない？」

「ないよ。持ってきたものないし」

「あ、だよな」バカか俺？「じゃ、そろそろ……」

「うん」

玄関先で、彼女が靴履いて。

細い足首とこで、ベルトをかちんと止めるのを見て。

アパートの玄関に鍵かけて、狭い階段下りて。

それからまたあらためて、手を繋ぐ。

最初は滅茶苦茶緊張したけど。

さすがにちよつとだけ、慣れてきた。

「まゆちゃん」

「うん？」

「何処か、寄りたいとことがある？」

「特にないけど。ちょっとだけ市内を回って貰えたら」

「りょーかい」

親父のスカイラインを駐車場から出して、彼女を助手席に乗せ。
北一条通を駅方面に向かう。

「運転、慣れてるね」まゆちゃんが言う。「いつも乗ってるの?」

「まさか。高校出てすぐ取ったから。初心者マーク取れたばっか」

まゆちゃん、沈黙。

だよね。

俺だって沈黙するさ。

「シートベルト、締めておいてね」

「…はい」

@ @ @

初めてのドライブ。

彼女の右手は、俺の左手をそつと掴んでくるけど。運転に目一杯神経注ぎ込んでる俺は、それどころじゃなくても。

ファクトリーやら、大通やら、すすきのやらを軽く流したあと。大学前を通って、札幌北ICから高速に乗る。

実家のある旭川までは、結構往復したことあるけど。

その先は正直、未知の世界だった。

で。

走り出してから気が付いた。

CDが何か持つてくれば良かったって。

親父とおふくろは、演歌オンリーで。

入ったのも、鳥羽一郎だとか氷川きよしとか。

あーあ。

俺ってほんと、気が利かねーわ。

とはいえ。

長い道中、俺とまゆちゃんは、結構いろんな話をした。

大学の話とか、マンガの話とか。

でも。

将来に通じる話は、お互い何となく避けてた。

そりゃそうだ。

認めたくねーけど。

考えたくねーけど。

まゆちゃんはもう、死んでるんだから。

未来の話なんか、聞きたくもないだろーし。

俺も、言うべきじゃないと思ってた。

やってみれば判るけど。

それはめっちゃしんどいことで。

めっちゃ辛いことだった。

だってね。

どんだけ好きでも、まゆちゃんと俺は結婚出来ねーし。

どんだけ一緒にいたくても、彼女は向こうに帰るべき人で。

俺はイヤでも身を引かなくちゃなんねー。

初めて本気で好きになった子でも。

諦めなきゃなんねーの。

予定通り、比布で高速降りて。

それから、国道をひたすら北上する。

北見市に来るのは、生まれて初めてで。

途中から、まゆちゃんがナビしてくれる。

通ってた高校だとか、生まれた病院だとか。

そんなのを一緒に眺めながら。

俺はじわじわと現実を受け入れる。

覚悟してたことだけど。

やっぱりこうするしかないんだって。

市内の外れにある住宅街。

彼女の家の前に車を停めた時。

俺はつい、溜め息ついちまう。

でも。

繋いだ手を離すのが、何だか辛くて。

どうしても出来なくて。

気付いてか。

シートベルトを外してから、まゆちゃんは俺を抱き寄せて。何度も、繰り返しキスをする。

ありがとうって。

大好きだよって。

そんな言葉の合間に。

そうこうしてるうちに。

突然、ドアが開いたもんだから。

俺、慌てて体を離れたけど。

中から出てきたのは、彼女のお母さんらしき人。

「あら？」

ジョウロ片手に、こっち見てる。

うわ。

やべー。

とりあえず、頭下げしてみる。

そしたら。

お母さん、ふつーにこっち来て。

ふつーに助手席覗きこんで。

それから、にっこり笑った。

「お帰り、まゆ」

「ただいま、おかーさん」

「送って戴いたの？」

「うん」彼女、俺を紹介してくれる。「同じ大学のヒロくん」

「あ、どーもです」俺、もういっぱいいっぱい。「まゆちゃんにはいつもお世話に…」

「遠いところすみません。上がってらしたら?」

「いや。俺、バイトあるんで…」

「忙しいみたいだから」彼女は、ふつーにそんなこと言う。「今日はここでいいって」

生きてるヒトと話してるみたいに。

お母さんは、ドア開けて。

まゆちゃんも、ふつーに車から降りて。

玄関へ向かって歩いていく。

俺も一応、外へ出たけれど。

家の中からは、お父さんも出て来て。

それから、ジャージ姿のお兄さんも。

ごくふつーに、彼女を迎え入れる。

「まゆ、お帰り」と、お父さん。「疲れただろう?」

「何だよ、遅かったじゃねーか?」と、お兄さん。「皆、心配してたんだぞ?」

「うん。ごめんね」と、彼女。「いろいろあつて」

「お夕飯、支度出来てるから」と、お母さん。「手伝って頂戴ね」

家族に囲まれて、家の中へ入っていくまゆちゃん。
その背中を見詰めてる俺。

ドアが閉まる直前、彼女は一度だけ振り返って。
につこりして、頭を下げた。

俺は、一瞬躊躇したけど。

それから片手上げて、ちょっとだけ手を振った。

そんな風に。

彼女の姿が、ドアの向こうへ消えたあと。

久し振りに。

ほんと、久し振りに。

俺は、一人ぼっちになった。

これまでと同じように。

くエピソードく

「すみませーん」

「はい？」

「札幌銀行本店には、どっち行ったらいいですか？」

「ここ真っ直ぐ行くと、西改札ありますから。そこ出で、3番出口
んところす」

「ありがとうございます」

休憩終えて、戻ろうとしてる間も。

俺、何故か、ひっきりなしに呼び止められる。

「あ、ちょっと！」

「はい？」

「霊園前って駅なかったっけ？」

「昔あったんですけど。イメージ悪いからって、南平岸って駅名に
変わったんですよ」

「じゃ、平岸霊園には、南平岸で降りればいーの？」

「ですね」

すたすた去っていく男の足元は、何故か半透明。
これは切符を買う必要のないお客さん。
まあ、でも。

こついうのにも、いい加減慣れた。

「あのー」

「はい？」

「琴似と新琴似って違うんですか？」

「違いますねー」

「西区役所はどっちなんですか？」

「琴似ですね。ここから宮の沢行き乗って、6つめの駅です」

「判りました。どうもー」

「いえいえー」

なーんてやってるうちに。

部署へ戻るのがすっかり遅くなっちゃった。

「こら、三国！ また油売ってたのか？」

「いやいや、ちょっとお客さんに捕まってて……」

「そんな暇があったらCAIでもやっとけ！」

「あいあいさー」

先輩のお小言は聞き流すに限る。

制帽をかぶり直しながら、俺は再び構内を歩き回って。

危険物がないか、不審者がいないか、一つ一つ点検していく。

あれから5年。

富樫は俺より先に大学を出て、岩見沢でセンセイやってる。

他の連中もそれぞれ、就職したり、結婚したり。

親父とおふくろは、相変わらず遊び歩いてて。

妹は受験に失敗して、結局、東京の私大に進学した。

美奈ちゃんも美貌の巫女さんとして、ネットアイドルになっちゃった。

俺は何とか大学を出て、札幌市職員の採用試験を受けて。

何故かすんなり、交通局へ配属になって。

しかも何故か、地下鉄勤務になっちゃった。

そんなん。

ユーレイも生きてるお客さんも、勤務中の俺を捕まえて。

道を訊いたり、雑談してきたりするから。

そういう意味では、適職のような気もするし。

やっぱり、生き方間違っただよな気もする。

慌ただしい毎日の中。

大勢の人が行き来するのを眺めながら。

俺は時々左手に、ふと、あったかいものを感じたりする。
それを追いかけながら、ぼーっとしていると。
また背後からどやされる。

「三国い！ 何やってる！」

「はいっ！」

「いつまでも学生気分でいんじゃないぞ！」

「はいはーいっ！」

「はい、は一回でいいっ！」

「はいっ！」

毎日毎日、こんな風に。
怒鳴られて、叱られて、急かされて。
走り回ってる俺のこと、遠くから眺めつつ。
呆れたり、首傾げたり。
くすくす笑ったりしながら。

俺がここに在る限り。

いや。

例え、ここを離れても。

まゆちゃんはずっと、俺の傍にいる。

-
完
-

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4966h/>

サブウェイ

2010年10月10日07時57分発行